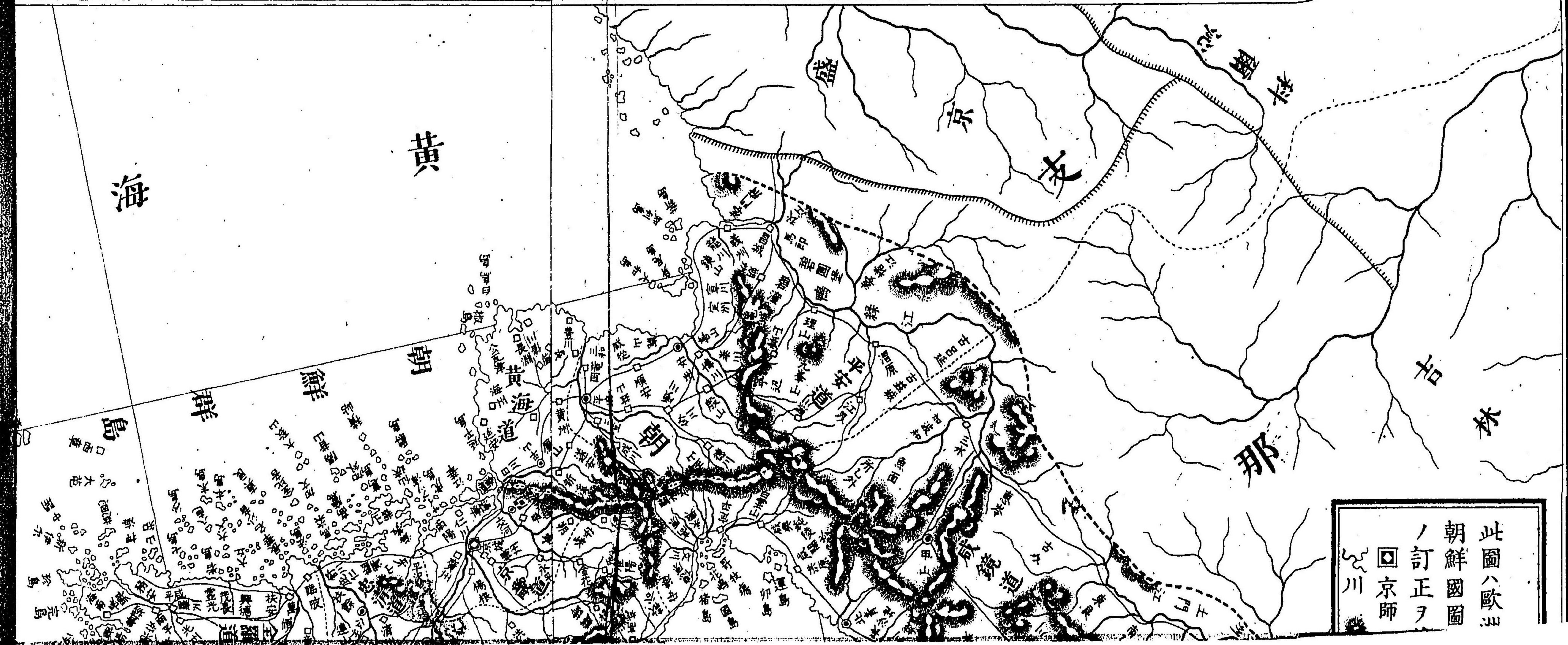
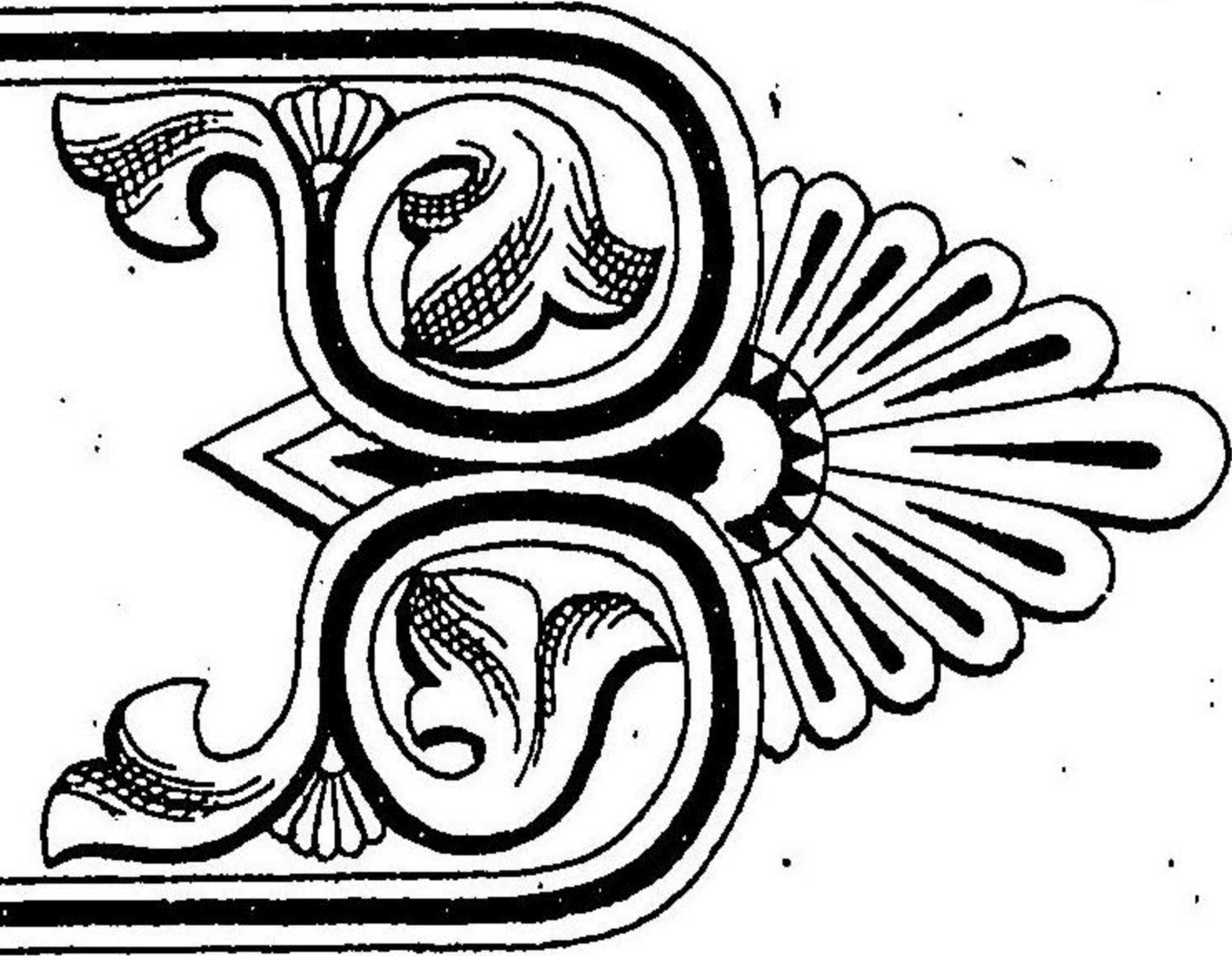
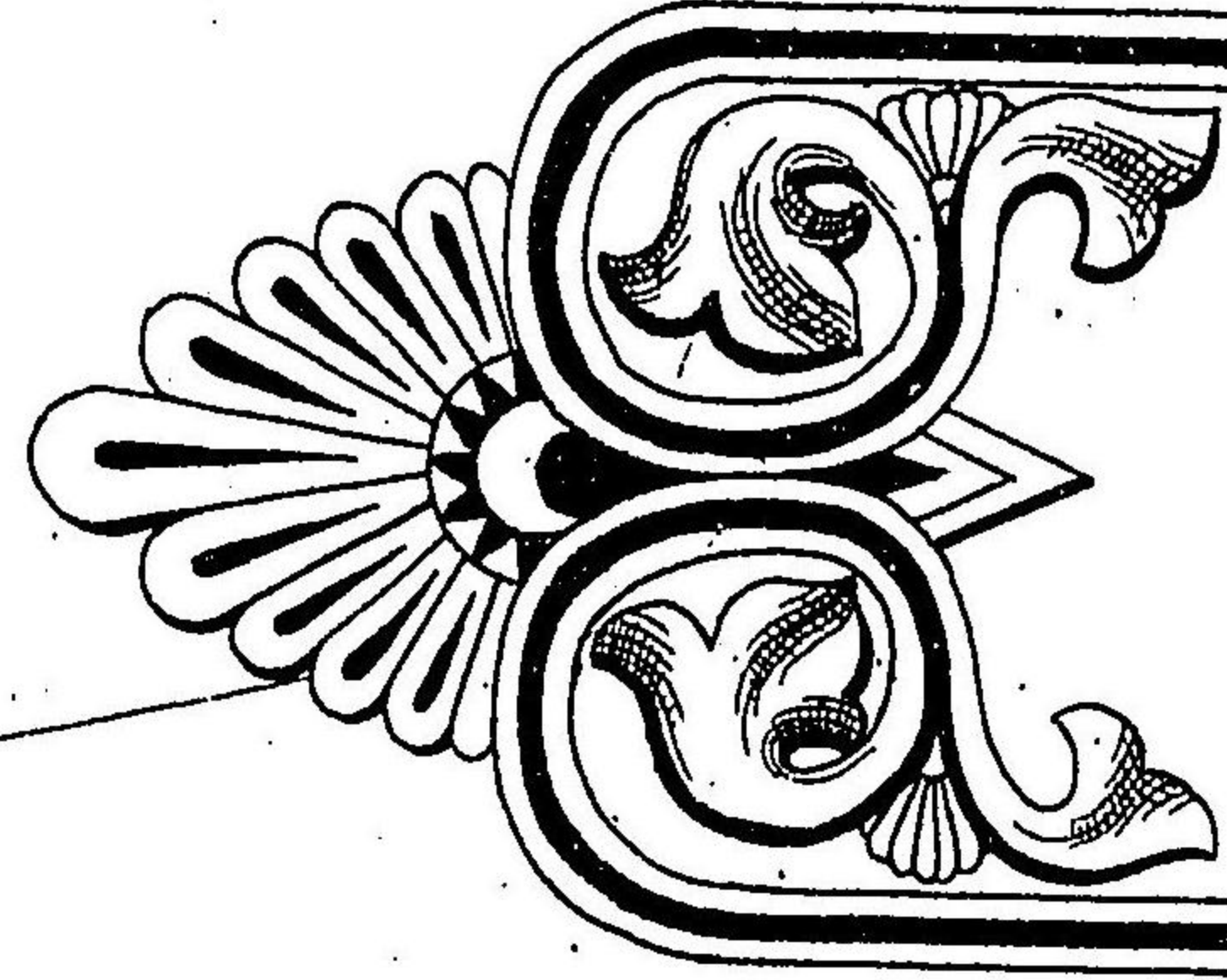


願朝鮮征伐記
 赤縣州相傳太古之世帝主出平東方開闢國土教
 化人於東是方蠢化蠕動始有倫理穴居野處方有神養
 矣亦出於鄉是之謂歟然則可知彼之所為道彼之父所為
 教亦皆係乎我神聖之所授也若能辨君臣父子之為
 義者則格帝命是西討東伐以定六十餘國猶羞諸醜夷
 諸道阻格者於先囑琉球通於明國猶不聽諸醜夷
 有阻王化者於是起海直入於明國猶不聽諸醜夷
 欲以朝發怒遂與大軍以伐朝鮮蓋勢不得不然也夫朝
 鮮者古之韓神功皇朝奉神教而獲方此也朝
 新羅素組面縛降於石鼻官船之前誓曰非東日更
 出西鵬綠之水逆流焉高麗百濟二國王亦一時降附
 則天神地祇共罰殛焉高麗百濟二國王亦一時降附

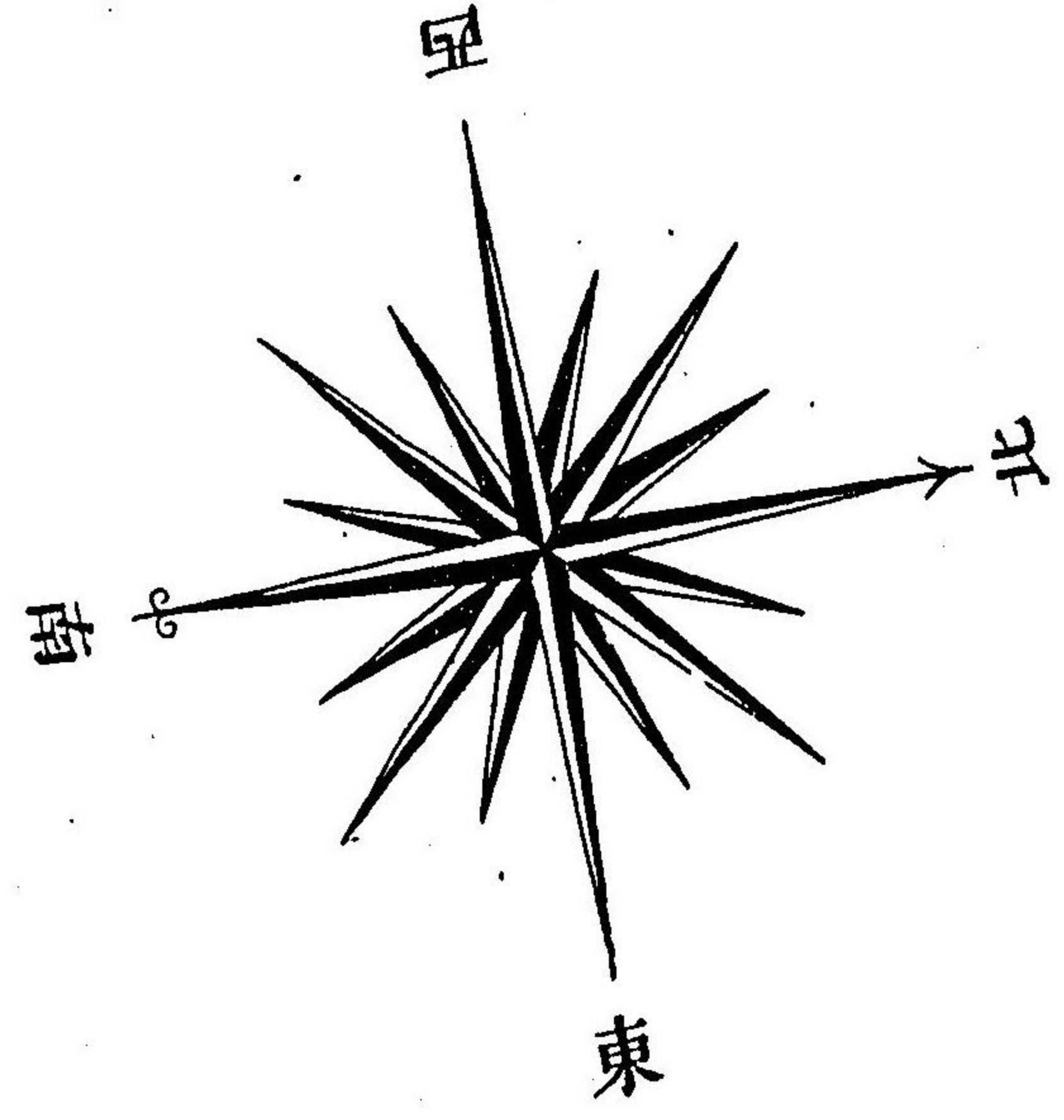


銅版朝鮮全國圖

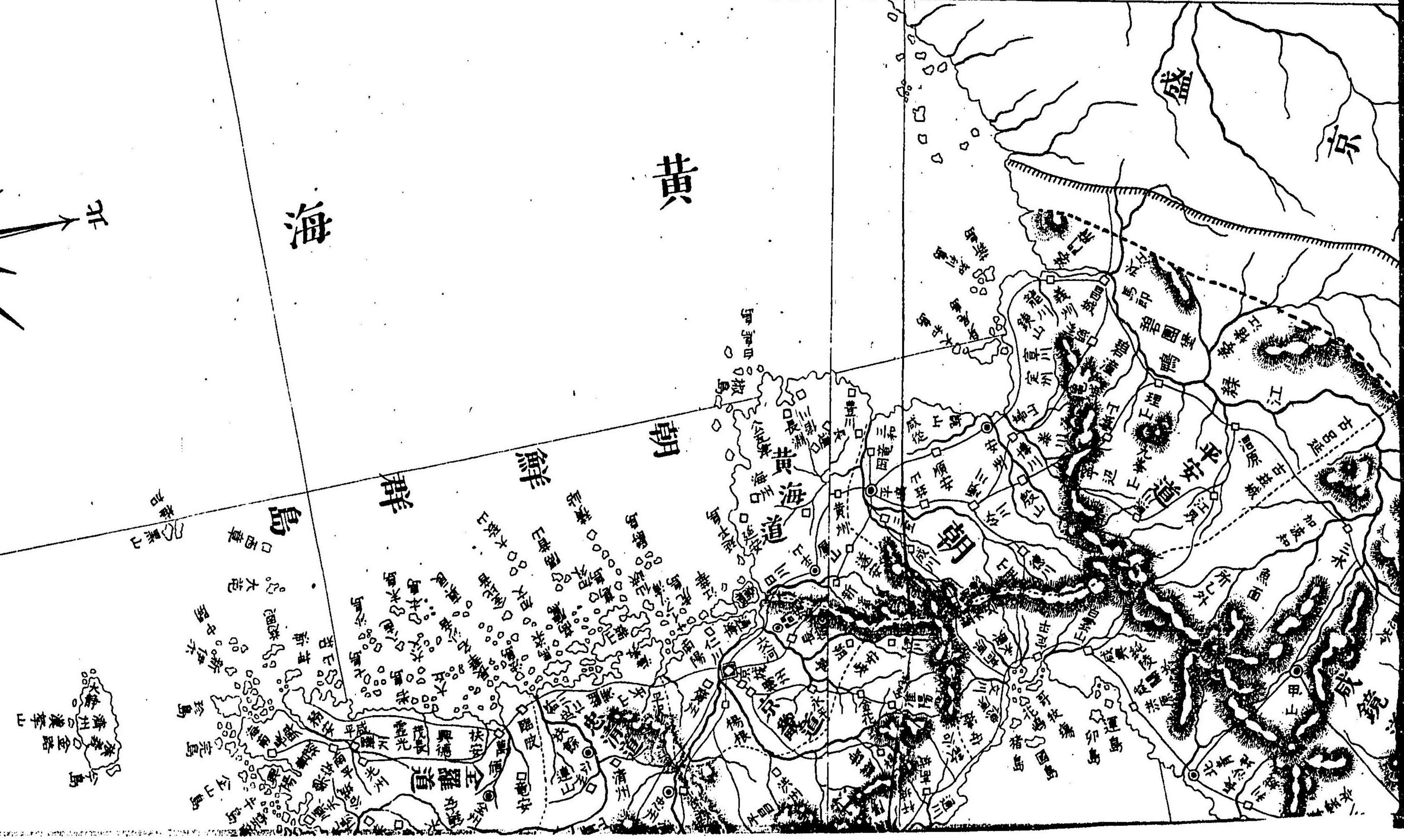


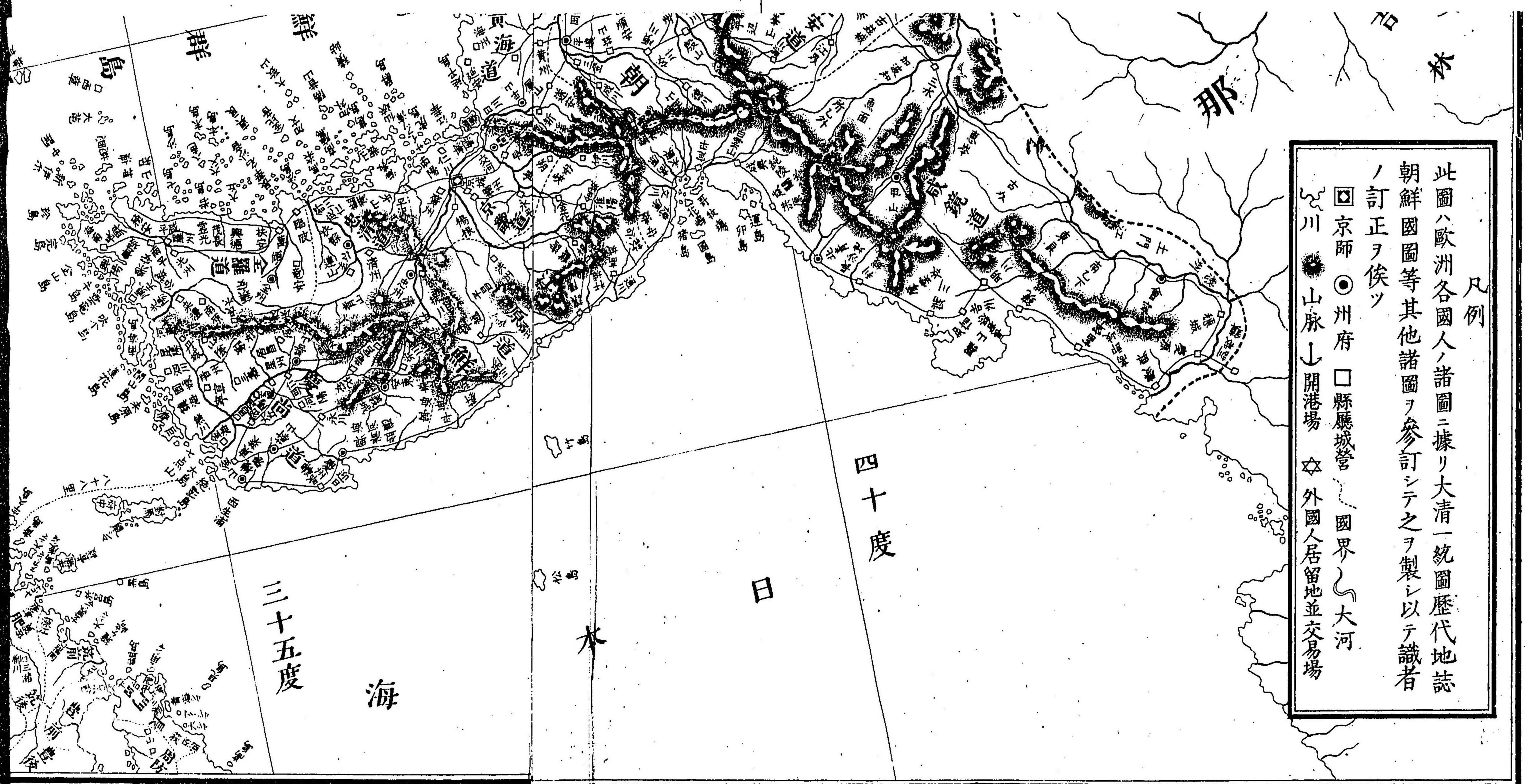


版朝鮮全國圖



黃海

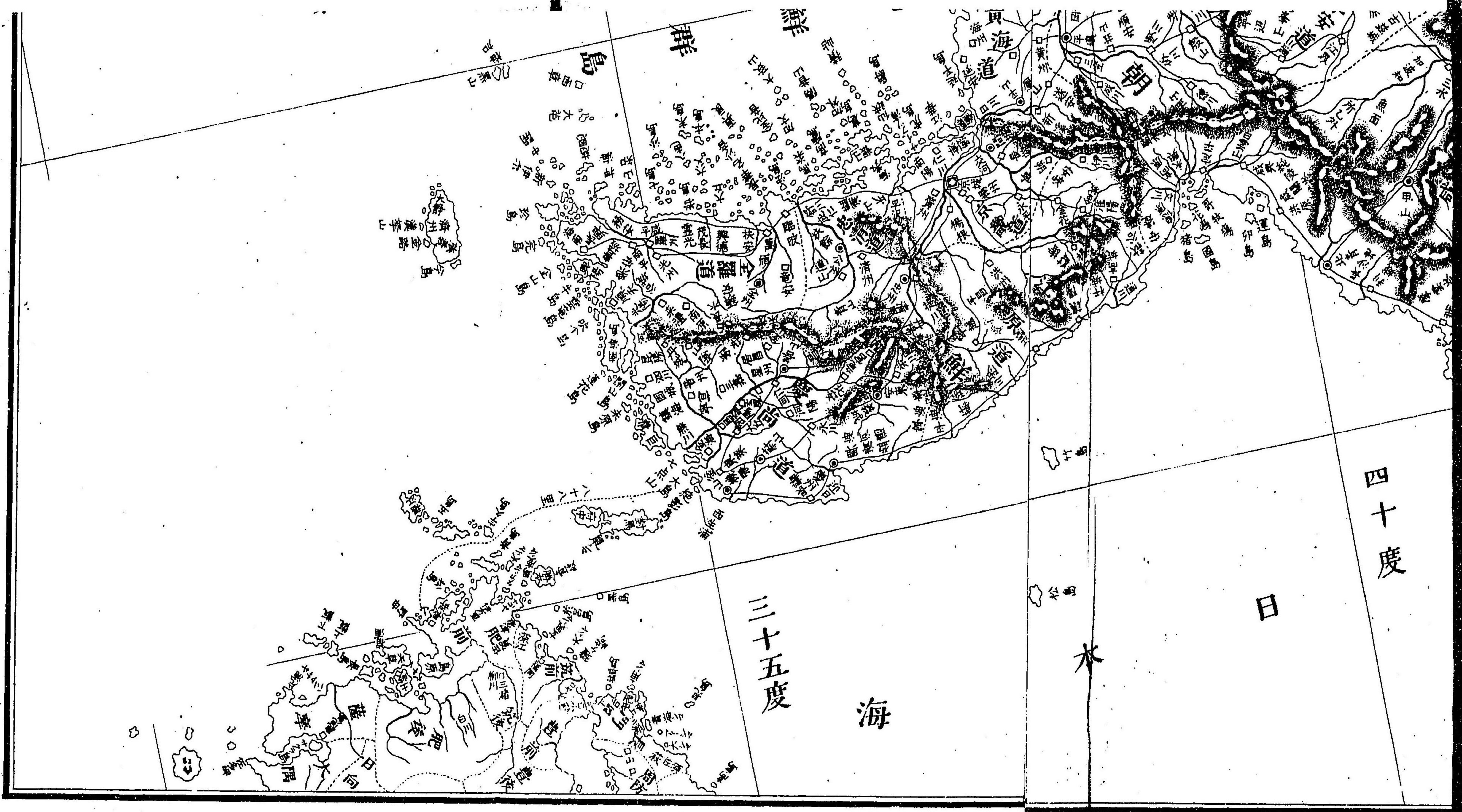




凡例

此圖ハ歐洲各國人ノ諸圖ニ據リ大清一統圖歷代地誌
 朝鮮國圖等其他諸圖ヲ參訂シテ之ヲ製シ以テ識者
 ノ訂正ヲ俟ツ

- 京師
- 州府
- 縣廳城營
- 〰 國界
- 〰 大河
- 〰 川
- ⬆ 山脉
- ⬇ 開港場
- ☆ 外國人居留地並交易場



四十度

日

水

海

三十五度

群島

島

東海道

關東

北陸道

大飽

新島

伊豆

相模

武蔵

上野

信濃

越前

加賀

石川

福井

滋賀

京都

大阪

兵庫

淡路

伊豫

美濃

尾張

三河

遠江

駿河

甲斐

信濃

越前

加賀

石川

福井

滋賀

京都

大阪

兵庫

淡路

伊豫

美濃

尾張

三河

遠江

駿河

甲斐

信濃

越前

加賀

石川

福井

滋賀

京都

大阪

兵庫

淡路

伊豫

美濃

尾張

三河

遠江

駿河

甲斐

信濃

今島
金路
海軍
山

十
子孫國を受けてつぎ世々傳へたる事千四百四十八年商の武丁乙未の年に至るといへり此後又殷の箕子
周の武王よ封せられ始めて此國に至るまでハ時世ハはるか隔たれど誰かその世をうけ傳へ繼世
どかへたりけん正しき史説なきゆゑふ彼國ハ人の論と云ども疑がハしきの一事とす武王既ハ殷紂
が無道と誅しその有道をたつとび紂が諸父大師の官箕子が大賢を以て朝鮮侯となし給ふ箕子
此國を給はりしより平壤ハ都と立たれど其民猶も愚痴なるを教しハ五穀を種ふるの道をつくし
の絲と繰り織工をささしむ國と治むる條目八ヶ條よかざりて其制禁と立定む爰ハ於て國內大治
まり國ハ盜賊のあつたゆれを自ら門戸と閉る事もなし女ハ夫ハ貞節とつくすの道をしる箕子は
じめ此所ハ至る時中華の人を五千人を率ひて到りける詩書禮樂醫卜の技藝までみなしたがへて往
たりしが既ハ朝鮮ハ入ると云ども其土の人の言語さらハ通ぜず故ハ譯者を以て言を解し人道ハ五
常あるとを知らする故中國の風自らうつしけるこれよよつて衣冠の制度ことごとく中國ハ同じ
それより歲霜おし移り周道もまた衰ふる代ハ到り諸侯我意をふるふの時こハ燕國の侯王號を借
稱し東方の國々まで兵を出して切なびけ既ハ朝鮮の地までも打入らんなど取さたれば朝鮮侯
ハこのよしを聞けりも同じく是も王號を稱し兵をおこして燕を伐周王の味方をあし天子をたつと
よ道を立んとしたりけるされども朝鮮の太夫禮といへる者強て便宜のよからね事をもつて諫むる

故兵を出その事を止みねその後ハ大夫禮をもつて説士となし燕國よつかハし燕王よ説しめた
り燕王ハ其理を得道して朝鮮ハ計畧する其志を止めたり其後ハ朝鮮國王の子孫ハ至りて其
國の富饒なるよつき其志しやく驕り政りごと虐にして國人の意離るハを燕の國より親ハ兵馬を遣
く入れ動じ朝鮮の西境を攻ると凡二千余里滿汗といふ所ハ至つて界を立其後秦六國を合する時
万里の長城を築きけるよ遼東を以てうきりとして朝鮮ハ外ハなしたりけり此時の朝鮮王ハ箕子よ
り四十代の孫儀否が位ハ立て君たるよ秦王の威ハおそれ秦ハ入て附屬す否死して其子準立て二
十余年陳勝項羽が乱起り天下大ハ困窮し燕齊趙の民ともやハ亡びて箕準ハ歸す其後盧縮が燕王と
あれる時箕準ハ燕と約を定め淇水を以て兩國の界と定め其後盧縮ハ漢ハ反して匈奴ハ入る此時ハ
燕人衛滿といへる者燕の國を亡命し黨を聚むると千余人ハして衛滿これハ頭となつて髮結蠻夷の
服を着け中國の衣冠を棄て東の方淇の水を打渡り來りて朝鮮國の王城ハ至りうつたハ云我々永
西界ハ居を定め朝鮮の藩屏たらん事を願ふハ箕準ハ是をまことし衛滿を官ハすよめて博士とあし
地方百里の州をあたへ西の鄙の境と守らす衛滿すでハ朝鮮國ハ居住して彼亡命の從黨を招きはか
りて朝鮮國を奪ハんとす則ち使者を朝鮮の王城よつかハし驚たハしく告げさせける漢の兵軍十方
より朝鮮國ハ襲ハ來るとうけ玉ハる我等今是ハ付て城内ハ參候し宿衛たらんとすハ箕準ハ是をま

とどし何の意もなき所へ忽ち衛滿が兵をも王城を撃入て攻討ける箕準が方にも番兵をも防ぎ戦ふといへども衛滿が兵士多勢なれば遂に戦ひ打負け箕準の船に打乗り南海に没落せり

衛滿朝鮮王と成る事

衛滿既に箕準をバ追ひ出し自ら王儉城を據て朝鮮の主人となり箕準は漢の惠帝皇后の世に當れるなり此時天下初めて定まりて太平は基を立つ察東の太守は衛滿を約せらく今より備于漢外臣となつて塞境の外なる諸國を保ち漢の境邊に冠となすべからず若し又諸國の夷蕃朝鮮の下に隨順し中國に入朝せんと欲する者をバ此方よりあへて是を禁むる事なし何程も夷蕃諸國を備の器量に任せて手み附へしと定むる故衛滿愛みかいて自己の兵威を逞しふして隣國を侵し撃ち或は財物と與へて是を誘ひき朝鮮國のその傍の小邑まで多く來伏せしめたり真蕃臨屯の諸郡もみあへて來て服屬すれば此地も今の方角數千里の國とな成りけるかくて衛滿が子孫朝鮮國と相受けて第三代右集といへるが世に至りし時漢國より逃亡し來る者ますます多くなりければ彌國の繁榮せりされども右渠の我威を立て天子の國に入朝すべきの意もあらず近隣の辰國より既に入朝す天子も參内すべきよしを思立よし云ひ來れば右渠は是を防ぎあへて道を通さず漢の武帝は時に至り沙河と云へる臣を朝鮮の使として右渠をもめ諭して天子の朝廷に入朝し其命は順へと云ひしむれども右渠は遂に

承引せず定もつて詔命を違背するだもその罪大なるべきよあまつさへ漢に使者沙河を襲めて擊殺せり愛みかいて漢の武帝元封三年朝鮮を討伐せんと樓航將軍楊僕も命じ齊より路しそれより渤海に船を浮せ左將軍荀彘は察東も出て朝鮮侯右渠が沙河を殺せる罪を攻しむ右渠もまた兵を積して漢兵を防ぐより兩將城と加こんで是を攻撃といへど亦其戦ひ利あらず攻めあぐんで見えたりける朝鮮の城中の諸臣も謀をめぐらし漢の二將の意を隔て楊僕をすゝめて朝鮮は降し漢は背くの相談となしたり左將軍荀彘は是を初め知りしかきものちこの儀を察するゆえいま一城とば急もせめす楊僕かその動靜を待窺ふて居たりけり漢の朝廷は楊僕が異變あると知り玉はず久しく朝鮮は兵を屯めて應に費すとぞがめ玉ふ荀彘はそかき楊僕が變あるとを中より重ねて齊南の大守公孫遂も命を下して朝鮮は往き向はしめ其節のぞんで便宜の事あるに至つては京都まで告報するも及ばず事を意に任すべきとの別勅を蒙りて夜を日いついで馳せたりける已に朝鮮の漢の陣は着せしかば左將軍荀彘は公孫遂も對しひそかき樓航將軍楊僕がそむ意ある事を告げ知らするも公孫遂やがて是を捕へしめ其軍兵を一所も合せて其後急も城を取かこんで攻撃たり城中の者も油断なし楊僕が左右の相圖を待居る時なるも思の外はせめ立られぬりて騒ぎきける愛も朝鮮の諸臣も朝鮮相路人韓相尼陰離林の相參將軍吹あれいなる

者ども一所謀を定めてつひ右渠を殺し漢軍を降りけり後於て朝鮮國全く漢の下に附屬せしかば國を破りて四郡となし今度右渠を殺して漢に歸したる者ども分ち與へらる泰と封じて濼清侯となし陰と封じて菽直侯とし暎を平州侯となし路人が子最と以て涅陽侯となしたりけるかくてまつたく朝鮮一國の侯號に絶たりけり

三韓古今分別有る事

馬韓辰韓辨韓是を合せて三韓といふ其馬韓といへるの箕準すでに衛滿が爲る攻奪のれ其左右に臣下宮人を率ひ走りて遠く海に逃れ入韓の地命馬郡に居住せし自號して韓王といへり其地後世も稱するところの益州の地の古城の墟なり土人の名付て箕準城といへるとなり朝鮮の南方に當るとか其後百濟王温祚が位に立る時此所を一所合せて保つといへり是をもつて考ふれば此所馬韓と名付るの百濟國の舊名なるも疑ひなしと云かるも後世説を立て馬韓の名も勾麗の名にして辨韓のまな百濟なりといふ者の尤正義もあらざるなり古の馬韓は地廣大にして五十余の國と立つ大國といふもれの人家家あり小國といふも千軒に減せず物じて十餘萬戸口は人家ありまた辰韓の馬韓より東あり自ら立て我々が先祖の秦の時の亡人にて始皇が世に亂を避ててこゝに至り漢國に遊入しを韓人これをわのれみ韓國の東界を置てこれと與へ城柵を立しむとその言語は秦人よ

類せる事ありともいへり或は是と辰漢を號し辰漢乃ち後世新羅なり始めのはさの國も主人なき時馬漢を食ふてこれを立しうそのうち新羅の始祖赫居世が此辰韓の地より興つて統を立て子孫をゆづる扱また辨韓の其始め國を起すの祖を知らずかつ辰韓の屬國と聞えたり辰韓の地をすべて二十四の國名ありし往昔のことと聞えたり其時より大國も四五千軒は人家あり小國も六七百家民人を住しめたりといへり新唐書も是を載せて辨韓の樂浪の地是をまた平壤と云ともいへり古の漢の時の樂浪郡といふ時は是を以て見るべき辰韓の新羅たる辨漢の高句麗たる疑なき所なりまた後漢書もこれを説て辨韓の南あり辰韓の東あり馬漢の西ありといふ其南とさし東とさすの漢の地界東の地を北西と定めて説との言なり辨漢の辰馬の二韓の南あるといふの機もあらす三韓をべて七十餘國の名目も陳壽が書せる三國志も見えされと東史世絶へて傳へられ今朝鮮の地もかめて在所のたしかも知れずといふ

朝鮮地方大畧の事

朝鮮地方縣郡の世々異なる名號と考ふるも漢の武帝元封三年右渠が王命したがらざるを討伐あつて遷し朝鮮の地を平定めてこゝに於いて樂浪臨屯玄菟眞番の四郡を置く樂浪郡の治りはこれとす故の朝鮮王右渠が都とする治所としてまた臨屯の故の東萊縣の治所を菟郡のまた故の沃沮

城と云し府にしてこれを時の治所なりとか中々夷寇の恣に所侵て郡と句麗は西北よりつじた
 漢の時といへども此所の治所たること同前たりと聞えたりまた眞蕃郡の治所たるは書縣を以
 て定めたりまた漢の昭帝始元五年朝鮮は舊地平那支菟等郡をもつて平州の都督府となし臨屯樂
 浪等の郡をもつて東府の都督府となせりそれ府の二國の治政と出しをす仕置所を稱するあり都督
 はまたその所の政事を正す官人の職名たりと云るべきあり其より唐の世に至りて朝鮮の土地方境
 を定むるは東西ハ二千里南北ハ四千餘里にして西北ハ鴨綠江にいたれり此水つねに緑の色なるの
 恰も鴨は頭毛を見るが如くなり故に其の江を名づけてかく云り北ハ女直の州まかされるは一名ハ
 元良海といへるごかや倭また國ハ八道と啓て第一ハ京畿道これ道ハ京城の海道にして江原咸鏡北
 兩道ハ北ハ出る道筋なり平安黃海の兩道ハ平壤の東ハあり忠清道 慶尙道の二道ハ海の東南ハ
 あり全羅道ハ海の西南の道路より外の外府州郡縣すべて二百餘りの地名をつらね三漢鼎足の如く
 立て代々數百歳の間を歴互ハ武威を争ひ來る(事段々下ニ見ゆ)新羅國の東ハ長人國よつといき西ハ
 百濟ハ隣り南ハ海濱ハ臨み北ハ高麗の地まづけり東南ハ是日本渡海の通路なり百濟國ハ唐土洛
 陽ハ東ハ六千餘里蒼海はるか途を隔てその正東ハ新羅國の海まづき西ハ越州北ハ高麗にあつた
 ぎ海水分ちて渡へたりまた高麗ハ新羅の西ハあつて南ハ海を越ゆるまで百濟國の領分たり西北

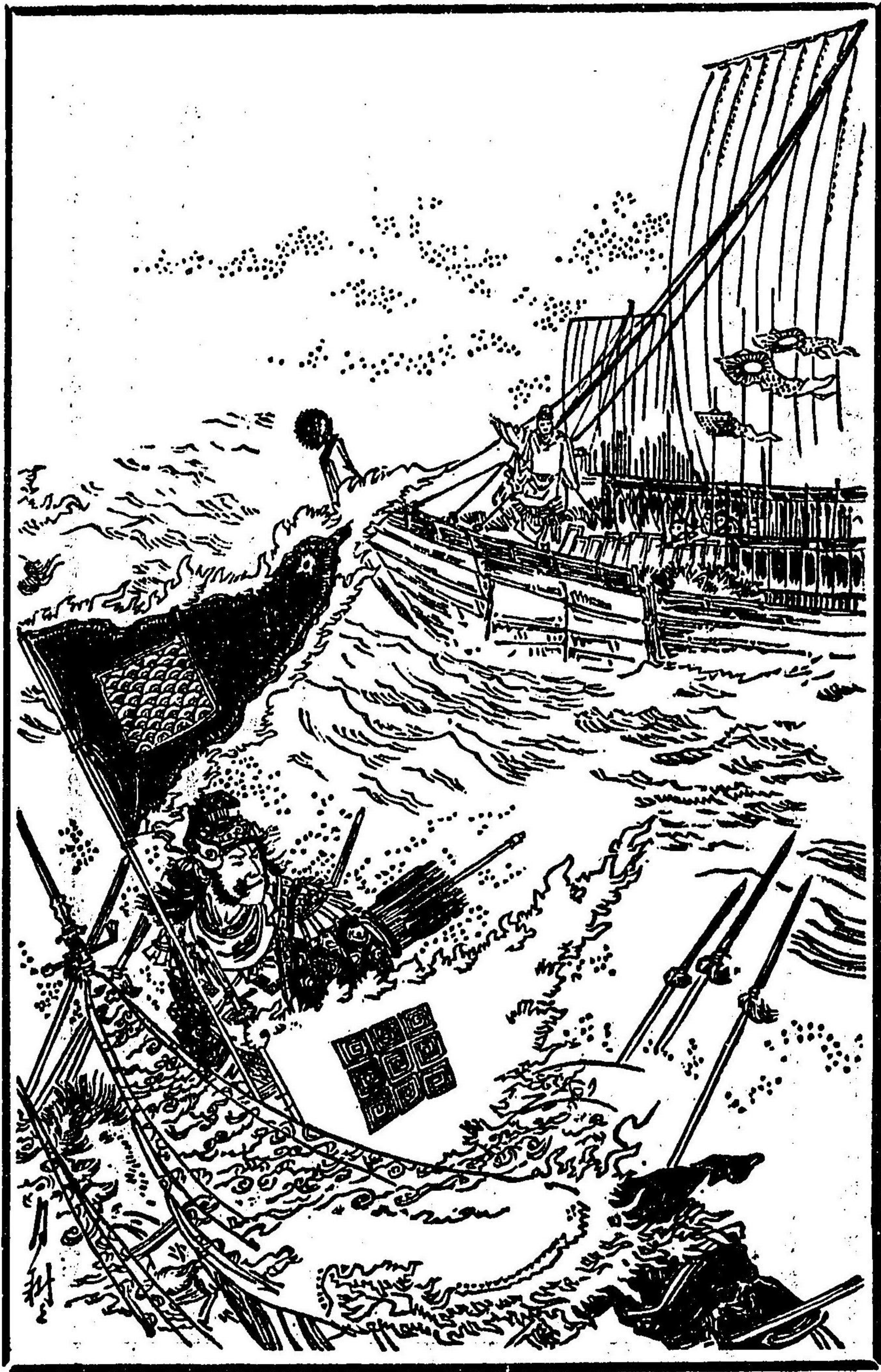
ハ寮水を過ぎ支那營州の地よつて北ハ方ハ未掲の狄國なりこの寮水を名付るは世よ考れる寮東の
 地よして未掲ハ今の遼國の別種たり是も漢の世樂浪郡の一分たり洛陽の東と去る事五千餘里國
 主ハ平壤ハ居城を構ふとあり余よ至つて朝鮮の國都よして長安城と名付るなり城野の外ハ一方
 ハ高山廻りついき盤石峙發へて險隘自の要害を其儘の城郭ハ用ひたれば堅固宜しき外關た
 り内ハ萬民居居所を安し市店商肆ハ町を連ね舊物をそなへ高堂樓閣軒と重ねたるハ寺院あり官所
 もあり眞俗貴賤交會男女その業をたのしめば實ハ一方富饒の境たり南郊ハ廣く開け俱水を限つて
 喉とし別ハ王宮と構へ其基壘土壘石で高く土屏を築て溝濠ふかくまたため乃ち俱水の流と
 引て深き淵を湛たるたといは河伯魚鼈たりとも漂溺れてなかく易くハ渡り得べからざるの急流
 たりそれより左りの方を望めば遙々を路隔たりて國內城と漢城と雲を衝き山嶺ハ兀然たるハ唐の
 代より此所朝鮮國の別都と定め壁とかさね塹と深くし一方の不虞の備よいましめ構ふまた大寮水
 小寮水二ツの流れ國內ハ廻りわかれて長ハ一漲れハ舟筏運漕の便宜あつて實ハ負擔れ旅客を助く
 此水源洞ハ遙か未掲の西南の山溪より洩出るさされ水それより次第ハ廣く深へて洋々たる流波を
 動じ南ハ向ハ安市城の前なる大江といなりたるありそれよりまた寮山の西岸ハ一帯の派流となす
 を名づけてこよ小寮と云その末再び南ハ廻り流ると梁水を唱ふれば一水よして三の名をなす

大河なり爰は馬背水と云ふ河あり是もまたその源上の末掲の白山と云所より涌き出る鑿々小ある
溪澗たりと雖も萬木は雨露の滴り落添てついでいりかゝる大江の秋水を湛ゆれば其未も至つてハ
千隻の旅船を浮め來ても猶餘なる大濤を起し動せる朝鮮は州郡第一の大浸たりその氷もより底
を計らす四時の碧潭藍染みあす是を名高き鴨綠江の要處あり平壤よりハ西北なれば唐土遼東の
地を經來る路道屈竟の堅めたるゆへは唐土中國と高麗の境と定め常は大艦を浮べ旅客の往來と迎
へ馬を渡し人を渡す大津口との聞えけり

日本より三韓を攻る初めの事

爰は本朝人皇十四代仲哀天皇と申奉るハ第十三代は君王景行天皇の王子日本武王子は第二の御
子にて渡らせ玉ふ御母ハ兩道入姫は命と申す垂仁天皇の皇女なりそもハ我日本の大祖神武天皇
より以來繼躰の御事たるや各々其代の儘にして全く父子は譲り給ひて爰は十二代の天祚と累
ねさせ給ふ處に景行の儲君日本武尊の東夷を制伐せ給ひ信濃國まで入り給ふとき山神の尤め
又遇ひ不幸にして御身を焼れ給ひける尾張の國まで事故なく回り至り給ひけれども遂は爰まで遊
去まず御父景行一向これを哀れ給ふのみならず王子の勤勞大方ならず痛ましく思召し其御子仲哀
を東宮に立て置き遂は御代をば譲らせ給ふとなんこの天皇の御形他はすこれハハししし御身の長

一丈にして實は勇猛の志氣あること御父尊も劣らせ給ひぬ御器量なり皇后ハ息長足姫と申す第
九代開化天皇より第三の皇孫息長宿禰の命の女あると立て皇后となし玉ふ是ぞ則ち神功皇后の御
とありは意天皇よひとしく雄れさせ玉ひて最も勇まわわします此時は當つて九州の戎の魁首熊襲
と云へる無道れ者可畏き天子の常ある神器の威ある理りを知らずこれよりさき景行天皇の御
宇に於て筑紫の地にて反逆を企て貢物をも押とめて是を獻せずえばハ一獻慮ふるむきし畿京都
より多くの軍兵を指遣され討伐を加へらる熊襲すでも己が足らざることを知れるが故に一旦ハ其罪
を伏し隨ふといへどもまた再び謀反をなし朝廷の貢獻を怠たつて奉らず天皇ハ聞召惡き者の仕
方か急ぎ誅伐あるべきよ定めて寶篋をか地は廻らされ自ら追討せよるべきの旨あり國を以軍
兵と召されける皇后ハこの事あるを聞召し吾ハ女なりとて此度の御供も參らでやあるべきと頻
り望ませ給ふより天皇も又此儲と御承引ましハける既ハ鑿舟の纜を解き至り皇后ハ此度
逆賊追討御禱のためよとて先だつて越前の國筒飯の明神に詣で奉幣を參らせらる其より北國の海
上ハ龍舟と巡らし天皇と一所ハ行逢給ひ筑紫の地は懸かせ給ふよ一どりの神あらハれ皇后の御夢
ともなく御現ふもあらで物おしへなし申す是より西の方よあたりて寶の多き國あり早くこれを討
伐して日本下ハ附屬し給ふべし熊襲ハ小國なりその上伊壯諾伊壯冊は產置たまへる國なれば討す



とも終よ順ひ麻さあんと有けるを皇后の急ぎ天皇は告げまひて諫めさせ給へども天皇これと
 用ひ給はず強て制し給ふところよその事遂に成就すべからざる故もや有けん俄に檀日の行宮よし
 て隠給ふぞうたてしき泣々御戸とば長門の國の内よ治め埋めてこれと穴戸豊浦の官とやとなりす
 では皇后の御腹よ應神天皇の胎育せ給ふ時奇りまかるも皇后はかゝる乱逆の時よのぞんで帝
 位一日も空かるべうらざる理りを群臣舉つて奏聞するより女牀の御身をがら天位よつかせ給ひ
 ける是ぞ第十五代の繼躰神 皇后よて渡らひ給ふ爰も皇后の仲哀天皇の御教と承け給はず強て我
 意を用ひ給ふよより神の崇りのある故もや俄に崩御まししけれは大に恐れ給ふのみかまた御憤
 りも深くして三韓征伐は微慮の遂よ起りけり諸臣ととも此議と論ひ計り給ひ日本の國內よあち
 ゆるところの大小の神祇を勸請し常陸國鹿嶋の地よ神集め給へける中よ阿度部の磯良と云る神
 一人この召よ應ぜざるいかななる故もやあらんと 諸の神達の庭燎の光とさかんよ焼き青白の幣
 を神の枝よ懸けつらね風俗催馬樂さまくの神事をなし給ふ磯良感またへずして海中より顯れ出
 て神遊の場よ交り會す諸神の磯良の顔をつくくよ見給ふよ降螺貝虫浮藻草海苔の類ひ透間もな
 く手足身體よ取付たりぬのく是を奇んでるの故を問給ふ磯良答て我海中よ跡たれて魚鱗を利せ
 らと思ひしよりかくのとくれさまとなるこの見くるしさと恥ぢ思ひ止んぞなき神遊よ運參をなせ

る所以なりと申ける皇后の機長もまつて海龍王へ使とし龍宮の寶物なる潮の満干珠と乞借り給ひける。龍神勅もまかせて二ツれ玉をたてまつる皇后のこれより早く御船を離し給ひて軍兵を渡海せんと給ふ。胎中又在す太子の月重りて御腹ふくらかよなるより常は召すは銀の引合せ狭くして御胸の脇のあさける故高良明神の謀めて巧ませ給ひ一ツの小板をこしらへて當給ふ。今の世まで傳り銀れ脇立といふものあるは是がはじめと承る。諏訪住吉の兩神の副神は二將軍となり給ひ皇后の陣と助け玉へましてや自餘の神兵とや樓船三千余艘を漫々たる蒼海原に乗り放つて高麗の地に漕向ふ住吉の社とまうとる。昔伊弉諾尊の日向の國小戸川に川上青木原と云所にして碁し給ふその時又化生したりし表筒男底筒男は神これなりと。か斯て新羅百濟高麗を討またがへ給ふべき奇瑞を見せ海神形を顯しは船とさしはさんで多くの海族守護せしかば波濤かのづから風を動ぜず彼國は着岸あるこの由す。三韓は聞へければ高麗の者ても兵船萬余艘をかし浮め海上に出會合戦となしたりける。兩軍鋒を交ゆることす。半は至りて皇后の千珠と取て海に入給へば海上忽ち干潮となつて舟の進退がなねを高麗の兵あざむかれ船より下つて歩行をなし矛戟と取つて進める時また潮れ満る玉と取てなげうち給へける。大瀟山を崩すが如く大水忽ち漲りて高麗の兵卒万人をことごとく底の藻くすをしたりける。残りし者ども亂れ立て漸くは船を

廻らし逃れ行ゆ皇後の神兵の全き勝を得たりける新羅王の手台の一戦も利を失ふのみならず我
 日本神兵の大軍なるも驚きおそれ遂に我陣前も降参して命を請ひすなはち誓てややう今より後
 日本へ貢獻の舟楫の乾く間も毎年郡の内は實物のやま及ばす男女奴婢の數をそへて是を調進
 すべしとてへば朝の日の西より出て河水返りて逆流し地の石昇て天の星辰も連れる世ありとも
 春秋の朝貢の闕き情たれる事あらじと頭を叩て詫申す茲もかいて皇后は新羅王の降を納れ免し
 其科をなだめ給へける其國も傳ふる文書の類も盡く取收め給へけるとなり新羅王の方より
 其國の至寶の數と撰みて大船八十艘も滿ち載せて奉る高麗百濟兩國の王もこの戦ひを聞き畏
 れ我軍 敵しがたきことを知れば早く皇后の陣營も馳参りとも降参を請ひす今より以來永く日
 本西方の藩兵と稱し貢獻さらも怠情なく是と捧げんと詫たるも是またこゝも免許されば永く日
 本の幕下となるも勇々しかりける次第あり此時支那の魏の世のことなりしが其臣張政と云ふ者
 を三韓和睦の使者とし日本の中を取りあつかへしと聞へけりこゝも於て皇后は矢野の宿禰と云
 人を新羅國の鎮めとし金城とせしめ置て歸帆を促さる皇后の持せたまへる弓の才強みて高麗王
 は日本の犬なりと石壁も書し玉ふも此時のことありと聞へけり皇后すでに筑紫の地も歸り着せ玉
 ひて御安産なりけるその御誕生まします皇子これを應神天皇とて御座す是よりして高麗の常は我

國も附き順ひ多年の貢獻怠たらず吳服羅絞の織工大紋の高麗線と世も云へるの昔も初めて此國
 より出たる物を聞へけり

日本世々朝鮮とせむる事

斯くて高麗百濟は二國の己も附きたがふといへども新羅の常も漸もすれば野心を含んで吾國の命
 も叛きぬるを皇后これを恕らせ給へ禁津彦も詔ましし重ねて新羅を責めさせらるれば是も畏
 れて附きたがふ其より年月過されば神功皇后も崩御まししけるゆへ皇子御位も即せ給ひ是を應
 神天皇とて奉る此時世も三韓全く我國も附屬すれば其國の政刑をも皆日本より是を下知して
 大和の國經嶋明の宮の造營の時蝦夷人と召て麻坂の道と啓き三韓の人を召て池沼と堀らしめ
 給ふとかやこの時武内大臣の弟甘美内の宿禰大臣を議を武内筑紫にして三韓を相語ひ謀叛せん
 と巧めりと云ふより天皇怒つて武の内大臣と誅殺あるべき討手の兵とつかひさるるより豊岐
 の直根根子と云ふ武の内命も替りて死たりける其内武内の臣ひそかき京洛もかへり至り
 て科なき由と申す天皇これを赦聞あつて武内と甘美内と神前もて湯を探らせその眞偽を正さる
 る武内の臣過さきよきわまれは甘美内が讒言のあらわれたり今この世も眞偽を神も正さんとて湯
 と探り鐵火を握れる因縁のこれが始めと承る此時また百濟國より貢獻をそめざるを討伐ある

べき撃手として紀の角宿禰を命じて其意りを正さるゝ其國人大に畏れ其王辰斯といふを殺してその罪を悔ひかなしむが故より其王の兄枕流王と云るが子阿花と云を立て百濟王となし給ふ此時の事かとよ王仁と云へる博士論語等の書を持して來朝し絹を織工人系綿とつみ縫者までことごとく添て奉るなり應神の孫嗣仁德天皇の孫宇新羅重ねて日本の命を違背するの情ありけるが田道として是を討伐す此時高麗もすこしく野心の意あるより日本の才藝を計り見んとや思ひけん鐵にて認めたる楯板同的を奉る天皇これを察し給へばすなわち彼國の使者を内裏へ召れ盾八宿禰と云ふ強弓の者よ仰せて鏡の的を射通さしむかば使者大に恐れて舌を捲くまた此御宇は百濟より酒の君と云人來りて鵬鷹の鳥を取る術を教たる鷹狩の始なり同き二十七代繼體天皇の御宇筑紫岩村と云者ありて謀反を起し肥前肥後豊前豊後を押領し三韓の貢物と中途に押へて奪ひ取る天皇は大臣金村とよれを議り鹿鹿火と云人を大將とし岩井を誅殺せしめ近江の毛野と云ふ者を三韓へつがひし政を行はしむ毛野三韓に至りて勅詔を宣るときは高き所より登つて是を宣へわたせば三韓の諸臣の庭に在て是を承るこの御代は百濟より五經の博士段揚爾といへる者を指遣せり同き廿九代宣化天皇は時百濟國より使者ありて新羅より兵を起し任那の國を攻め百濟まで寇し來り援の兵を賜へと請ふとこれより依りて大伴の狭手彦を大將軍を命じ太勢の兵士をつかひ給る狭手

彦の大臣金村が子なりけり狭手彦勅命を應じて任那と平げ百濟を救ひ助けて軍功を立たりけり狭手彦が妾然浦佐用姫が夫の別れを悲んで高山の巖よりけ登り漕行船の影見ゆるより領巾ふる袖と返してまねきしも此時の事を聞えける同欽明天皇の在位の時新羅より任那百濟を攻るより日本より是を救ひしむ其使者の一人膳の臣巴提使と云者あり百濟へ趣ける路より深害に遇ぬるが故より海邊に一宿したるより召具したる童子を虎のため喰殺さる巴提使これを大に怒り虎のそでを行きし足のとを追たづね山中に入りたりしと遂よかの兒を喰ふ虎を見出しかゝつて是を捕んとす虎の怒りの相ををし口をひらいて進み來るを巴提使左の手にてやがて虎の舌ととり右の手にて刀ととりそのまゝ虎を引とらへ刺殺し其皮を剥たくりて日本國に歸せ朝りかくて百濟王使者を獻じて佛經佛具諸道の博士を奉る同御宇二十三年高麗新羅のやゝもすれ日本の下知は背て貢獻の備ざる故紀男麻呂河邊の臣等をつかひして討伐せらるるの軍の大將擡となつて我國兵をはづかしむるよりつて大伴の狭手彦を重てつかひさるゝ百濟王の兩國の約をなさず日本の命令を用ひけるより狭手彦の百濟王とも謀を合せしかば狭手彦が軍大に勝利を得て高麗王は王宮まで攻入たり高麗王はわづらゝ免れ出て逃れ出て狭手彦が兵ども高麗の寶物をも奪ひ取てこれと天皇に獻上し大臣稻目も贈りけり今度新羅へつかひさるゝ官軍の中は伊企儼といへる者過て新羅

の軍を擒となる彼軍將伊企儼を責て降參せよとて嚇し罵れど伊企儼これを肯らハず新羅人力と拔てこれが首と斬んずと駭し伊企儼が醫を日本の方へ向けさせ日本の將我尻をくらへと云へ言たらハ命助くべし云ハずんバ忽ち此刀よて斬らんと罵る伊企儼この時大音響げ新羅王我髀をくへと叫ぶる敵兵大に怒つて遂に伊企儼を殺されけるその後新羅王もまた日本へ順ひける同三十四代推古天皇の御宇境部の臣は勅あつて高麗を攻撃しむる高麗王力つきて邦の内城池を獻じて降を納る同三十八代齊明天皇の重祚の御證号を皇極天王と奉りし此御宇在位六年は百濟國の使者來りて言上をけるハ去る六月は新羅の兵大唐の軍をまねいて百濟國を擊破り君臣みな生捕られずで亡國に至れりされども百濟王の宗族福信といへる者殘兵を借り集め一端新羅の兵をば追ひ退けたり願くハ貴國ハ人質としてあるところの扶餘王子豊璋これ(百濟の王子なり)を返し玉のふが再び國を興さんと請ひたりける天皇これを許容し玉ハ豊璋を送り返して百濟王となさんとしました加勢ともつかひざるべき用意とし即ち兵船を造り武器を調へ玉ふべき爲としてまづ難波まで行幸あり皇太子中の大兄と攝政とし諸國の軍を召集めらる備中國下の郡の一郷より人數二万を出しけれハ其國を號して二万の郷とい名付たり明年の春すで玉ハ船を進發あり伊豫泊り土佐に至り玉ハ其所の社ありその神木を切取て假りの内裏を造り玉ふをとがめ玉ふ神の崇りよ新造の御殿忽ち

くづれて死たる者もまた多し同き年ハ七月ハ天皇も又朝倉の宮ハ崩御ある同三十九代天智天皇ハ御宇即位の年將軍阿曇比羅夫河邊の百枝等ハ大將として百濟を救へんため兵糧武器を贈り玉へ同く九月百濟王の王子豊璋を免しつかひし秦朴市田來津等ハ五千の兵を指添へて送り遣りざる福信もまた中途まで出迎へて豊璋を百濟王奉請じ百濟王と仰で日本の下知を受たりける

新羅國興廢并朝鮮號鷄林と事

爰ハ新羅國ハ中興の始祖朴赫居世と云者ハ漢の宣帝五鳳元年日本の崇神天皇の四十一年ハ當つて一方國を建る事ありその先祖何れの國何如なる氏の人なるをもあらず不思議の出生たる者あり朝鮮すで漢の武帝のためハ亡されそれ國を四郡となすより朝鮮舊國の遺民もことごとく分離して東海れ不とりなる山谷れ間ハ居所をうまへて聚り居る遂ハ村里をなしその數ハ所ハ分ちたり一ハこれを開川の揚山里と云ふ二ハ尖山の高墟村三ハ帶山の珍支村四ハ茂山の大樹村五ハ金山の加里六ハ明活高村とぞ稱じけるこれを辰韓ハ六部とせり有るとき事なるハ高城村の里の長蘇伐公と云る者遙かハ揚山の麓を見れば羅井林と云る處の方角ハ馬の嘶ぐ聲を怪しくも聞ふるうなこハよかいてその聲をまると尋ね行て見てあれハ馬の形ハあらずして大なる卵と一ツ拾ひたり常に替れる卵よて何鳥の種とも見ゆず乃ちこれを打わりて見てあれば其中より

つくしき嬰男兒ぞ出たりける蘇伐公は是を愛して抱きとりて家よかへり養育をなしたりければ此
 兒程なく成長し總角姿となりけり六部の者とも是に驚き如何さまよその行末を思量するも惟
 者ならず是と國の君にとりたて尊敬せし所の繁榮疑ひあるべからずと六部の村長評定してつひ
 は是兒を守り立て韓國の主人とせりそれ歳いまだ十三の幼年の時を聞へける乃ち尊號を進めて居
 西于と云ふ是長韓の風俗も王と唱ふる辭なりのを國を徐羅伐と名付其姓を朴と云ふ是ハ卵を剖て
 破し其形の朴ハ朝鮮瓠を呼んで朴と云似たるをもつてあり其妃をハ閼英と云ふ此女もまた髮生
 まして閼英井の龍の子あると以て如何も名付たり其生質美色あるを以て立て妃となしたるあり寔
 は此女賢徳の行ありて内を治むる道正しく宮中の婢に至るまで恩愛の深きよなづいてければ内外
 これを悦んで二聖の御代と仰さける斯て國を享くること六十年及びける其子南解ハ國を譲り是
 を二代の朴南解と云ふ此時よあたつて南解が在位五年の春昔脱解と云ふ者を南解が婿とせる此者
 舊ハ本多那國と云ふ處の者あり其國ハ日本より東北の方二千里も當れるなりその國の王の女妻一
 ツの卵を生産せしを國王これを不祥として速に棄さしむ其妻我産る恩愛の引くところより卵子と
 捨るよ忍びざれども夫の命のそむきがたきよ卵を以て卵とつゝも寶物を多く中み滿て是を積み入
 封じ海に浮めて流し去り八重の鹽路の雲霞行衛もまらず放ちざる者もこの積朝の風夕べの浪も漂

泊て行程は遂よよる瀬の定るよや金官國の磯邊よよるを海濱の漁人とも是を取あげ卵を見てこれ
 ハ何なる水怪ぞや此程まきり風波惡ふして漁どりの無りしハ是が故とありけるかと早く捨よ
 きて元の如くよ封をなしおそれて沖へ衝き出す其よりこの積再び轉りたよよひて辰韓の阿珍浦口
 といふ所の蛋女の老嫗是を見付て積と開きたりけるに其中よ美なる男兒の微笑して有けるを老嫗
 ハよろこんで遂よこれをやしなひたつるも程なく成人するよまたかへ身の長九尺よあまり其骨清
 く秀てハ凡人とハ更よ見へざりける其智識大よすぐれたり曾よりこの兒の姓名のまればされハ嫗が
 始て積をとり上る時この兒とも鳴鶴あり則ちこれよよりて鶴の字の聲と形と借省れ昔氏と名
 乗せたりまた其積を解の義をとりその名と脱解と呼んたりける生計のなき儘よ漁釣の業を仕な
 らつて老嫗とやしなひしが常よ怠る色も亦く嫗のある時よの兒に向ひ偏が骨相を見るよ凡人よ殊
 れて類ひまれなる者と知る克く學文をつとめて功名を立らば大よ立身すべきありかまへて其
 身を阻かよ持べからずと教訓せれば脱解遂よ學文と専らよ勤めたる中よも地理の吉凶も通玄なり
 爰に揚山の瓠公といへるが宅地を見るよ其吉祥の地なるをかんがへ此地を借りて居住せり瓠公ハ
 もと日本人と聞えたり其後よ南解王ハ脱解が賢徳あるを聞よりその愛寵女と以て脱解を婿よどり
 南解が死せるとき遺言して向後ハ此國を繼ん者朴昔の三姓の内何れよても年齒の長きたらん者を

登せて主人となすべしと定めたりとれより朴昔の二姓互に國を受繼たり第三代脱解が世を知る時一夜金城の西始林の間は當り鶏の鳴聲ありけるを怪しみて瓠公よ命じて見せしむれば小さき黄金色の積木の梢よりかり其下は白き鶏の鳴けるあり瓠公は急ぎ馳せ回りて脱解を告げば則ち人をつかひしこの積をひらき見其中は奇麗なる小男兒ありければ脱解大よよろこび天より授くる嗣の子なりとて其金積より出たる因をかたどり乃ちこの兒の姓を起て金氏とし自己の養子とすまた鶏の吉祥あれは始林を改め鷄林となし是よりして朝鮮の一名ふの唱ひける斯て新羅の國主是よりまた三姓互に受繼で朴昔金氏の家を起つされども朴昔の二姓の中昔は退轉し第十六代奈勿が時よりして全く金氏の國となる其後廿二代の主金光智證が世たる新羅群臣奏していはく始祖國業を始め給へしより以來國號一は定まらず或ハ新羅或ハ新羅とすかろの中を臣等以て勘ればその新と唱ふるハ徳これ新なるの義ありまた羅を云者ハこれ符籙は器にして鳥獸を網羅してともべきものたれば其如く四方の國の聚民を日々は新なる徳をもつて我國は網羅して聚むるの意よかなへハ是より長く國號となすべしと評議一は定まりこれよりして新羅國王と稱じける

高句麗 始興の事

漢の昭帝建昭二年は嘗つて高句麗の高朱蒙と云る者始て立て國をなす其根元ハ何如なる者ぞと考ふるおこハよりさき扶餘王解夫婁と云る者年齡すでよ老よ至れど子の無き事を悲んで山川の神を祭りて嗣の子を求むるよある時扶餘王鯀淵と云ふ所を過るとてその淵に傍よて乗たる馬の足を止めて策うてぎも動かざるよ必づぎあたりを見れば珍らしき大石あり彼馬をきりよ此石よ向り對して涙をながす扶餘王いよ怪んでその石を轉しのけ見てあれば金色の蛙形ある小兒一人出たり王よろこんで抱き取これぞ寔に天の授くる端相たりとて乃ち己が子となし養育するやどに日を経て成長たりければ立てこれを太子とすその家の長臣阿蘭弗と云る者扶餘王よ告るやう昨夜不思議の夢を見たり天帝我よのたまふやう正に我子孫をして愛よ國を立しむ備ハ早く東海のはとりに行宜き地を見立べし加葉原と云地あり其所土壤ゆたかき地厚し五穀よよろしき所なれば早く都をうつせとの話げたぞかありと云ふこハよりて扶餘王もその教よまゝあつてつひは彼所よ都を選したれば扶餘の舊都よ何ともなく人あつて出來り自ら天帝の子と名乗り其名を解慕漱と云へりしが此所を去たがへて自然に愛の君となる東扶餘の解夫婁と云るよ及んで金蛙これハ嗣と云る金蛙ある時出て遊ぶよ大白山の南優湯水と云所よて一人の女子を得る金蛙ハ女よ對して備の如何なる者の女なるぞと問ければ女こ答へて我のよも河伯の女其名を柳花と云へり或時諸弟よ出遊ふよ解慕漱と云る者の我を誘き熊心山下鴨綠至れ中よ入て我とともよ私す彼者其後再び來

何くとも行方なし父母我媒なふして人にまたがふ罪を悪んで遂に愛よへなかせられたりと語
 るを金蛙是を異あることと思ひければ彼をとらへて家より一室の中に住しめて外に出さずその
 成行をうかひたりある時この女朝日の影も照されて是より思はず妊娠し鐵卵の如きものを生産
 ずその中より奇なる男子を出したり骨相もとより凡人のやうもなしすでも七歳よかよぶ時自
 ら木を曲て弓となし竹を隠て矢を造り是をとつて物を射るよ中よりすとふことなし扶徐國の俗
 の言よよく弓射るを朱蒙と呼ふ今此男子よく弓射るを不め稱し遂にこれが名を呼んで朱蒙と名づ
 く金蛙が子ども七人ありその技藝をくふるよ一人として朱蒙及へる者いなし金蛙が嫡子素
 をはしめ相謀りてこれをひそか殺さんとそ朱蒙が母これを知りぬれば密に朱蒙に向ひ國人汝を
 害せんとす早く愛を去るべしと教へければ朱蒙の母の意よまうせて烏伊摩離陝父と云る三人の者
 どもを伴ひ東扶餘の地をのがれ出滝瀧水と云へる河岸に至れども渡りをなすべきよふもなし朱蒙
 とときよ祝言し我の是天帝の子よして河伯の外甥たり今日難をのがれて愛よ來るを何を急よ救りさ
 るぞと罵れば忽ち河流浪動じ多の魚龍あつまりて橋をなし四人の者を渡りけり其後より追手の至
 ると云どもすでも朱蒙が渡るを見ておのゝあどへかへりけりその後朱蒙の卒本扶餘沸流水の邊
 までを手よ入つひに愛よ國を立て居城を定め高句麗と國を號し自己の姓を高氏と稱す是よりして

近郡を斬りまたがへ大威猛をふるひしが位よ立つこと十九年よして薨すれば龍山といふところよ
 葬り是を東明聖王と云第二代を琉璃王と號しける

百濟始祖興の事

百濟の始祖高麗祚が立てること漢成帝鴻禧三年に當り新羅の始祖が四十年高句麗の琉璃王の三年
 なり高句麗の高朱蒙が扶餘の難を逃れ去り卒本扶餘に至りて卒本王男子なふして女子のみ三人
 ありけるが朱蒙が平人よあつざること察する故第二の女を妻となし朱蒙を立て繼となす其妻二
 人の子よ生めり長子を沸流と名付次子よ温祚と云朱蒙が嫡子類利といへるが既よ高句麗の王とな
 る時卒本よて生れし二人の子類利がためよ殺されん事を悪んで烏干馬黎の氏ある者以上十人の臣
 を召つれ南よ逃れ去つて二人ともよ國をひらきしかど沸流が國の衰へ温祚が方よ大み榮ふ乃ち慰
 禮と云ふ所よ城をなすその後よ國號よ百濟と號したり彼の十人の臣下とも何れも補國の臣とあり
 是を稱すとかや百濟と高句麗の所の系圖一よ出たるなり其後孫三十代統慈王が時よ至て唐のため
 よ亡さるゝとき唐の百濟の故地よ分つて熊津馬韓東明金連德安五所の都督を置て各其下の州縣を
 統しめ其中の棟梁を撰んで是よ軍令の本とあしける

唐新羅二兵亡百濟を事

爰は新羅の太宗王六年百濟の義慈五十九年と當つて百濟國の王城はハさまハの物化あやしき事
 を示すハ此國の亡ぶべき前兆と云後ハハ思ひ合せけるこれよりさき年々ハ新羅百濟兩國の争ひあ
 りれどもやハもすれば新羅ハ軍よハくして百濟の勝となれば新羅これと憂ひくるしハ諸臣と議して
 唐朝ハ使をつかりし援兵を請ひたりけり此時唐ハ高宗顯慶四年の事ありけりハの年も暮明る三月
 唐ハ左武衛大將軍蘇定方等ハ命あつて百濟國を伐しめらる先だつて新羅より來りて唐ハ宿衛たる
 金仁問を道路險易の案内たらしむ其土地の要害と答ふることを繪圖ハ向ふが如くなる故高宗帝大ハ
 悦び遂に三軍を調へてそれ備と定めらる定方を神丘道行軍大總官となし仁問を副大總官とあし左
 驍衛將軍龍伯英龐孝公右武衛將軍馮士貴等をして水陸十三萬の人數ハて百濟を伐まめたりまた新
 羅王ハ勅ありこれが援兵たるべき旨と蒙り同く夏六月ハハ新羅王自ら兵に將として唐軍を助た
 んとす乃ち南川停と云處ハ軍を次して唐兵ハ相圖をこハハ待居り既ハ蘇定方等兵を引て萊州と
 云ふ處より海と渡つて出來る船艦千里の浪を斷ち旌旗万天の雲を起して既ハ德物島と云ふ所ハ軍
 だてすと聞えければ新羅王ハ大ハよろこび其太子法敏大將軍金庾信將軍眞珠天存等を迎ひのため
 の使者とし兵船一百艘の楫楫を早めて定方が軍ハ會しけり定方ときハ法敏ハ對して云我軍ハ海よ
 り伐べし太子ハ陸より攻め期するハ來る七月十日と以て直ハ義慈王が都城を擣んとす互ハ禮をハ

り約と定めて進み擊はざる百濟の軍兵出迎ひ戰ふといハハハ其軍遂ハ利をうしなひ白江戾峴など
 一ハ百濟一國の要害第一の所もうち破られて城内の上下大ハ騒動ハ及ぶ階伯將軍あんと云ふ者
 もの大ハ戰つて討死とこれハよつて唐軍新羅の兵も大ハ百濟界内ハ亂れ入て義慈王其子孝
 泰等を始めとし其外の大將軍士八十八人百姓万二千余人引連還りけり

日本勢百濟を救ふ事

斯て我國ハ宿直たる百濟國の王子璋豊をその臣福信が百濟の亡國を相續せんと願ふハより望み
 まかせてかへされける是日本ハ天智天皇即位の歳の明年なりまた天皇より福信ハ軍の助ハ賜ふと
 云ハハ征矢十萬系五百斤布千端草皮千張稻種三千石とぞ聞えける今年大唐并新羅より高麗をハ攻
 撃により高麗より日本ハ加勢と請ふハつき高麗ハも又加勢と數多つかりさるハハ大唐の大將任
 那相ハ陣中ハ病死をなし同しく總官龐孝泰ハ嶺南ハ水戰の士を率ひて蛇水といふ所の上ハ軍立を
 なす高句麗の權臣蘇文といハ者大將となつて唐の兵をむかひ擊龐孝泰が軍兵大に戰ひやぶれて蘇
 文が軍ハ逼られその子弟十三人ともハ潔よく戰つて討死としたりける唐大將蘇定方ハ既ハ高麗
 の兵壞まで圍むといハハハ龍孝器が討死して高麗の兵勢さかんなるより一軍の敵せざると悟り
 兵と收めて引回すこハハ百濟を救ふの日本勢兵士兵糧をどハハ數万の軍ハて新羅をうつよし聞

えければ福信の大よよろこび浮屠道琛とも兵を起し周留城と撃て出豊璋を日本の船よりむかひ来て百濟王を仰ぎける是も仍て百濟國の打もらされ西北部よりみまゝ兵を起し來つて日本勢も相應しまばく戦ひをすしへけるが途は新羅の兵を退け勝軍したりける其後福信の道琛と殺しその人数もあひせてこれを保つといへとも扶餘豊璋がちから制するも及ばずつひは其中悪くあり扶餘王權柄を相争ひ福信密に豊璋を殺さんとを巧めるある人これを豊璋に告げ去らするも豊璋は自ら新任とする臣下をも召し具し福信がかもひもよらざるところへ押寄彼を生捕て斬たりける此時日本より指越す軍兵も百濟も着岸の折から新羅國の兵と唐の熊津惣管孫仁師等百濟の周圍城を寄來りて扶餘豊璋を攻むる時なりける此時新羅王等も舟師をひきひて熊津江より同じく周留城におし寄る中途よして日本の兵船も出合たれば兩陣則ち舟軍ととのへ白江口といふ所おして戦ひをまじへたりされ共新羅の軍兵も目もあまる大軍を合すると四度よ及べと我軍もな戦ひまくるも新羅の兵勝はこつて我兵船四百余艘と暫時のほどやき立れば餘煙天をかそめ蒼天とやくろと驚かるまた討死せし者どもの尸の海水ふうかんで白波の紅も變じけり日本の大將軍朴布田來津味方の逃るゝ船どもも下知して楫をめぐらし楫をとめて大に呼び聲をまじへて敵兵數十人暫時の間に討取りたり勇猛精神の其有さまはながら群羊の猛虎も遇ふが如くなり唐新の

兩兵とも此勢ひも勞易し進み兼て見えければ日本兵軍のつゝける味方のあらざれば其身一人を以て萬千の兵も當りたたくしてつひは朴布田來津の討れまけり事すでもかくの如くなりければ豊璋今も獨身よてのがれ出て高句麗も落行けり百濟國の王子忠勝忠志等はその部下の人衆と引て唐の軍も降參すれば我軍の殘兵も新羅の軍もくだれるも又多かりけり新羅の大將我軍の降人も對して之新羅よりあんちが國との海を隔て講和をなして聘問交通も嘗て他の意趣を構へずまかるも何ぞ百濟を救ふて我とはかれる今汝が命我掌握のうちよあれどもこれを殺すも忍びず早々かへりてこの趣を汝が國の王も語れといふてかへしけり日本の兵士どもも豊璋破れて走る上り誰ら味方とあすべきやうなくみなく軍と加へしけり百濟の者ども此時日本へ逃れ來るも多かりける其中男女四百余人を近江の國なる神前郡も移し置れまた東國へ二千余人を分されけり其後唐朝より劉德高といへる者を日本へ來らしむれり我朝より守君の大石坂部の積等を遣唐使として渡海せしめ大唐の高宗皇帝も對面して歸りたりけるかくてぞ日本も異國の意趣とけまばらく無事よな成よける

高句麗滅亡の事

高句麗の朱蒙始て國とひらくの後第二代と琉璃王類利といへりそれより子孫うけつぎ第廿六代を

ば榮留王と稱號す其得昏愚暗弱にして政を自らせず賊臣蘇文ふ打まかせたるより彼すでも國を奪はんとするに至りて榮留俄よこれを心づき其力をも討らず弱きを以てみだり強を制せんとしてければかへつて彼がため殺さるゝの本意なかりける次第なり第二十八代寶藏が位よ立いたる是又蘇文が立るところなれば君位又居の名れよして一國の政事權柄全く下に移りて國民ともよ蘇文が民となる彼が凶惡日々まさり行き我まゝのきわめよ唐帝の使臣を囚へて中國の命よ違へば爰よおめて唐の太宗憤怒の餘り彼が弑逆の罪を鳴して自ら六軍の兵士を盛んよして是を討伐し給へども勝利なくして一端軍をかへし給ふなりまかりといふども兵家は所謂小國の大國よ克るゝ是ぞ後の禍ひたりと斯を以て諭すれば高勾麗のあやうきこと實よ且暮よあるかなと意ある輩のみなく眉を皺めけり太宗皇帝のうらみの意猶もつてましければ頻り諸大將よ命あつて高勾麗を討伐あれども其利を全く得王のさざるよよつての自ら再び是を討せんと思召ければ未だ時節の至らざるにやかのづから其事遅々よ及ぶところ高勾麗の國事年々衰退の世あつて萬の政よな非なるの上よあまつさへ蘇文既よ死たりけるつひよ其家の内みだれ蘇文が子ども欲を爭ひ嫡子男生其弟男建男産等と相和せずす互よ害せんとするよ至れば男生はやく唐よ降りて高勾麗よ討伐し玉の我等導引せんと請ふ此時唐は高宗の時なりしが則ち李世實契必何力の英將とも命せられ兵をあげて討まめ給ふ此時契必何力先鋒たり平壤城よ押よせたり季世實が兵これよ續ひて打入しが遂よ高勾麗王寶藏と獲となす男建の事急にのぞんで自殺すれども未だ死するよ及ばざるを季世實が軍よ執へらる王寶藏が子は福男徳男其外大臣男建等二十余萬をことごとく獲とし唐朝よかへりけり定よ唐の高宗中材の人にして最も太宗よ及ぶべきよあらず季世實又壯年の武畧思よして老後よ勇氣の益れるよいあらざれども時運の至ると至らざる所の有ゆゑとこそ聞けり高勾麗の始祖東明王漢元帝建昭元年甲申中卒本扶餘よ都を定め瑠璃王が癸亥年都を國內城に移し其後九都平壤長安城等の所々よ都を定む爰よ於て唐は高宗擡章元年よして高勾麗の亡びたり凡二十八王よして熾星七百五年なり實よ我日本の天智天皇の在位七年よ當り夫高勾麗は本檀君が朝鮮の地をひらきし都の墟よして其後箕子が封城の所たり漢の時よ分けたりしを堯樂浪地半よあたる中華の東北の隅の向ふと聞ゆ往日箕子八條の禁戒を立て禮義をもつて治道となす猶末の世よ風俗のこりて其民正直よして婦人の貞信ありて淫をこのます此仁賢は化なるかな其天性柔順よして南北西に夷よ最も異よ聞えけり

新羅滅亡并高麗始祖王建が事

新羅王第三十代文武王といへる者英雄の器量あり發明よして智勇ある者なればよく先人た業よ受

つぎ唐朝の意をかたむけ唐兵を請ふて百濟の地を亡し高句麗の敵を滅し始て三韓一統の封を得る。れは高句麗の餘黨を納れ優げ百濟の古地より繁榮の土地となりぬる處に中頃國は内亂起り科と唐の朝廷より蒙り一端爵位までを削らるゝといへとも再びこれとかへし賜り其後世々相續し第五十代に至りける此時の新羅王は眞聖王と號し女子にて國を受つきたるが其行ひ正しからず唐の則天皇皇后も超過したりし淫女として其志惡なれば國民大に困窮し四方に盜賊おこり戰闘所々も隙なきを爰に弓裔といへる者其時を窺ひ北京といふ所にて返逆を企てたり弓裔は其先祖新羅王四十六代憲安王の庶子より分れたり弓裔初め生るゝ時屋上より白氣おこり天よりつめて虹の如くありけるを日官のため奏せられすて惡祥ありとて殺さるべかりしを乳母かなしんで深くかくして養育したりしが八九歳にして僧とありしも壯年の後至れば僧律の戒行をもつゝしまず行跡惡しき者なり爰に國の一揆おこつて盜賊をばゝ起るに乘じ竹州の賊の魁箕菴が下屬しければ後よいととも一方によりすまふまたこゝに加恩懸の甄萱といへる者も謀反して武珍州といふ所を兵を聚めたり弓裔甄萱ととも王號を僭して國を盜むに意ありしも後高麗の大祖のため平けたる既ち眞聖王が國亡んとして一人の英雄出づ其名を王建とぞいひける元は松嶽郡の人にして父を王隆と號しける王建が生れし時異僧來つて此子の凡人あらざる事を其父に教戒せしが異人の云し

よ違はず初生のときよりさまゝの奇瑞をば示すのみならず幼きより聰明世に聞えその形骸龍顔なるの異なるよ又其意寛厚仁者たるのこれを定めて亂民を助け世を濟ふべき人ならんと意をよせぬ者なし王建初に弓裔が幕下よりありしが弓裔これに鐵圓郡の大守となす其後威望大に加り人心を歸し順ふところ爰にあらば部下の諸將王建とすゝめ王號を稱して國を高麗と號しけるこの時中國の後梁は太宗貞明年我が本朝醍醐天皇延喜年中に當つて新羅國景明王が二年に王號を建るの歳にして其後新羅の五十五代敬順王が在位八年にして終に重器を高麗の王建に讓つて降参をなしたりけるこゝに高麗王在位十七年にして中國後唐の昭宗が元年我が本朝の朱雀院承平四年と聞えけりそも新羅の始祖赫居世漢の宣帝も鳳元年申甲を以て辰韓の土を都を定め國を徐伐羅と號し朴昔金の三姓相傳へ知證王癸未の年國を定め新羅と號し太宗王の庚申百濟の地を合せ文武王戊辰の年高句麗まで一統すべきの唐の封と受定めて敬順が高麗に降となすまで朴氏十王昔氏八王金氏三十七にして年々かぞふる事九百九十二年王世五十五王にして新羅國は亡びよけり

高麗眞聖王季成桂位と竊む事

高麗の大祖全く新羅の亂國を平げ三韓の舊地を一統し世をつたふること爰に三十二王ともよ四百

七十五年の歳をへたるも其後權臣季世桂が爲る其國を奪はれたり第三十一代恭愍王が本姓其始め
 令名世上に聞ゆといへども中年よまつて其志しいつまかくじけ我意とふるまふところより親族大
 臣と輕んじ嫌つて是をうごんじ偏り議人を信用するの理は戻れる心とあつて邪僧遍照が妖惡ある
 を正直の人なりと心實と思ひまどふて是は政事を與ふれば遍照もこれをよき時至るの幸と速
 還俗し其名を辛屯とあらため國の政事を意まらせて遂に一國に政權其身を歸する事十五六年の
 間なりしが其子孫辛偶辛昌父子に至て高麗の神宮を竊み王氏の族こゝもつぎ國又亡ぶるに至る
 護王一人たまゝ諸大將れおし戴くより一たんの統と保つて暫く其世をなそといへども天命こ
 ゝ絶べきの時節よやきハマりけん日と政道みだりがはしく遂に國を李成桂がため奪はれて王
 氏の國の敗亡せり此年大明の太祖皇帝洪武二十五年なり同じく三十年もわたりつて國號を舊きま回
 りて再び朝鮮といへる是我が本朝の天子百一代後小松院應永年中足利義滿公の治世李成桂こ
 ゝよ於て大明へ朝貢の使を通じ年號正朔といたるまでみあ一は大明の制法も承け順ふかくて我朝
 近頃打つゝいて翻譯諸國も起り反逆逃亡の輩其身を寄すべき所なき者一は族徒黨を引つれて大
 船を多く海上に乗れり浮め往來の鐵船商船の寶物をかすめ奪ふて年月を送り或は大明朝鮮の津嶋
 々と見立勝手によからん方よ押入て亂防よ及ばされども弓矢を携へ兵甲を着たれば漁人農夫の云

ふよおよばす官人といへども混りよ是を防ぐよ及ばす大明朝鮮大よくるまみ使書を發せうつた
 へ歎くといへども亡名流涙の士のあそどころ一は我國の預り知る儀よあらすと答へらる且又國內
 近年靜謐あらねば朝鮮より貢獻の怠り

豊臣秀吉公天下御成敗の事

爰よ本朝人王一百七代 正親助院の御宇よ當つて豊臣秀吉公の惟任日向守光秀を誅戮し玉ふ後の
 天下の權柄自ら其身を歸し官爵すて人臣の極めに至り今歲天正十三年七月十一日關白職よ
 任じ玉ふの實よ以て往古より我朝よのためし少き事なり其汚祝として今日參内の儀式供奉の
 大名奇羅をかざり任官の歴々榮耀をあらはすとて今日よとまれりと雑色下部に至るまで晴
 と盡ぬ者もなし禁裏仙洞女御更衣女房達攝家百官のやよ及ばす諸司役人の末々に至るまで品々
 の賜りもの寶の山と崩をが如くなるの語るよ言葉もなかるべし爰よ於て秀吉公の前田德善院立以
 淺野彈正少弼長政増田右衛門尉長盛石田治部少輔三成長東大藏大輔正家を以て五奉行と定め國家
 の政を司らしめ給へける中も淺野彈正長政れ妻の秀吉の御臺所と服替の姉妹たるがゆへ最
 も親しみ深くして評議相談の事あるごとく内外を論せず長政これを預り聞すと云ふとなし立以
 また信忠の推擧し給ふ人よして長束のその始め丹羽五郎左衛門尉長秀よつかへたりし人なれども

其評論何事も尋常は類ひあらず智才秀し者ゆゑに此度の列は扱んでらる増田長盛石田三成兩人の人もより秀吉公の家は伺候して年久しく事つる者なれば此列は加へるなり殊に長政の其性豪氣にして膽魂人はずぐれ物ごとの利害は能あきらかなる者なればとて此職は居れける秀吉重ねて令を下し宣ふやう玄以の京洛の所司代とし洛外の神社佛閣僧俗の雜事何より是を掌つて裁許せよ長東大藏の天下の年貢軍役の事と司せざる長政長盛三成の諸の評定を吟味せよ萬一不善の事をかまへ民百姓を勞困せしむるの政をなすべからず小事あらば二人よて相討るともこれ可なり郡國の政事の相談をば速に評議をなすべし公議遲滞のことあらんは是民の困窮する本たるべし龍獄訴訟と決断せば慎んで聽さばき富ると愛し貧者と輕んずべからずと理世安民の政と諸奉行に仰付するればおのゝ此議と承り恭で退出せられける

橋 康廣朝鮮に到る事

其歳も既し暮明れば天正十四年よりなりけりある時秀吉公老臣近從の人々を召され仰出されけるやう吾威風すでは海内は加へり日本六十餘州はわけてはすでは麻か草木もなきは未だ朝鮮の嘉祝の使來らず殊に代々吾國の聘使のみ彼國に至ると雖とも彼が返禮をなさざる何事ぞや其上又朝鮮は往古より日本附屬の國なるは如此の終たらく畢竟を察するは是我國に輕し慢ると云

者よあらざるやそれと付ては先一日通信使と求めて彼國の意趣を探るべしとて橋の康廣は仰付られて朝鮮に遣はさる今年天正十四年の明皇の萬曆丙戌の年と聞えけり是より先き足利家天下と知給ふて殆こよ二百餘年あり往日明の洪武年中より當り朝鮮より隣國舊好を修むる使者としてその役を相勤むる申叔舟といへる者幾度り日本は渡海を志し我國の風俗勇武は有さまとも能暗したりし者なりけるが叔舟すでは死せんとする時よのぞんで朝鮮王成宗の叔舟か方は使者とつかひし何よても言を遺すべきの意あらば國の爲一言を述べし必ず遠慮を以てすさでやある事なかれと命あれば叔舟答て奏するやう願ひくを國家と日本と長く不和なるの意を起し給ふべからず終に其解りの儀有ならば必ず國の害とあるべきに處なりと云しを成宗も彼が異見を感悟し給へけるよや茲に於て副提學李亨元書狀官金新と云ふ者をして舊交を修ん爲遣し對馬の國まで到るといへども渡海風水の悪きによつて正使すでは疾を生じ書を成宗も奉じ回らん事を乞願ふ成宗もまた彼が意に任せて赦さるれば青物書狀をばこれを以て對馬の國主に致しすよめて兩使は是よりやめて歸國と赦されたり其後絶て日本へ使を通ずる事おかりしなり只日本の信使來れり禮よよつて應接はかりよして事畢れりと聞えたりとも我朝に記よよつて此事と考ふるは京都將軍源義政公は長祿二年まで朝鮮の來朝使の時々來れる事の見へたれどもそれより以來絶て此事所見

あしされば其後打續て本朝大に戰國となり左ながら打亂れたる碁の如くなる故に此時の朝鮮の使も風水の難儀を言を寄せて身の危きとのがれ中途より歸れると知られたりそれより後足利家滅亡し今や秀吉公天下と渾一に成給ふよりすて十餘年よ至れるあり此間日本の商賈人幾人か朝鮮に往來する者ありと雖も我國の法令嚴密あるを刑罰をつしんで本朝の時世も遷り代つて當世すては秀吉公天下の權柄を取玉ふと云とも嘗て以て泄さねばこれよよつて朝鮮の君臣の猶今も源氏足利に世たりとばかり思ふ處へ秀吉公の信使として橋の康廣着岸すれは始て豊臣秀吉の世と成る事を知るなり康廣時年五十五ありの男の其容貌大にたくましく髪髻すては斑白きが過るところの旅館馬驛に至つて宿する所の家屋を吟味し村里の中の廣き宅なるを求め本陣旅宿と定め其威を嚴重なると示しける又自己の寛大とふるまひ倨傲れる様態に往日朝鮮に至れる所の日本使もあらねば所々の郷民以外の外も仰天せり夫朝鮮國は古よりの作法として日本よりの使者たるその王城まで至り過るの路すぢとすすては使の來ると聞より早く境内に歩兵を發し槍を執て左右に道を立て夾みて行列を通らしむ是をもつてかの國の軍威を示す風儀なりとかされば此度康廣が打て通る一路も各出合せ立ならんで槍をとり間々に隊の頭と見えたる者多くの人數と下知しすいと云の討取と云ぬ計の顔色なり康廣の元來かゝる事異あるとも思ひぬ手

の者どもも下知をなし左右に眼をくばつて靜に馬を乗すゝめとて仁同と云所より到り付く時其路邊の鎗とる者を急度睨んで馬とひかへてうらうらと打笑ひ汝が輩の持ところ槍の竿はあはだ短しそれが人と衝くやく立んやさても油斷なる抱へやうやと高聲に物いへば人歩とも物言の通せぬゆゑ何言とわきまへねども康廣が眼つきを冷しきと高聲に笑ふとの其様は肝つぶしめされかへりて居たりしが左右に立てる已が達と舌とまきたる顔色そかくてまゝとも過通り程なく尙州に着たりけり此所は牧守宋應洞と云る者の康廣が馳走れたため待うけの旅館まで綺羅びやかき賞飾立さまの禮應美をつくし其酒宴の樂器を連ね舞歌の子女衆に列座しさまの興を促せり衣裝と花をかざりて桃李の色をあらそひ顔色も笑をふくんで夜月のかけ媚をなすまことに齒牙の春色といかゝる事とや云ひつらん康廣の應洞が已に兩鬢を霜ふりて翁さびたる顔色あるよかゝる色ともてあるぶを見るより傍なる通事も云合め應洞も告させける御覽の如く我等老衰も及べること年齢より抜群も見えぬの數年干戈の内よあつて多くの心勞をなす故なりと存するよ又應君のつねく如此安樂の中よわいしすすされば何の憂もあるまじきよ見せば兩鬢全く白くありけこと心得がたき一事なりと難じたるの應洞が色慾を淫することを少し諷言したるとい聞けりそれより王城に到着朝鮮王よ書と奉じをいりぬれば其後禮曹判官の所よして朝鮮王より饗宴と賜

ハリける酒すでも耐なるの時及んで康廣ハ腰付ハ瓢箪より席上ハ胡椒と多くとり散してこれを
 甜み食ふを見一座ありつる妓女ども康廣ハ隣國他家の人ぞとて遠慮の心すこしもあく皆々これ
 を争ひて奪ひ合はるゝさらハ男女の禮義もたへ興さめたる有さま放埒なりし事どもなり康廣す
 に旅館よかへりて通事の者ハ向ひ打ち嗟いて語りけるハ汝が國早く亡びん氣の毒さよそれ男女の
 禮あつて隔つるハこれ人道のくゝりたり然るハ今爾が國のやうを見るハ上ハあゝるも下ある者も一
 様ハ色慾のみだりとつとめとなし綱紀の立ぬ所あれば滅びずして何をか待ん自己が云ふところ儲
 目ハあらじと云けるを後よぞ思ひしられたり康廣すでも歸國の趣きを告て返翰を請ふと雖ども
 秀吉の來書ハ辭甚だ倨りて今天下我一握の中ハ歸する等の語あると見朝鮮王これを不快ハ懷ふ
 故但其書を報し通信のことよおいてハ水路はるかよしてつねハ使を遣しかたしと云をもつて聘
 使の事をバゆるさず康廣かへりて右の趣きを報すれば秀吉公大ハ怒り給ひて遂ハ康廣を誅し其刑
 一族まで及へりとかや秀吉公康廣が罪科として誅すへきハあらざるを何の故あつて其罪一門
 ハ及ぶよやと其意趣をさつするハ康廣か兄康年ハ足利家の時代より幾回か朝鮮國の遣使として往
 來し彼國の職名までをも受たりし者の末なれば多くハ今その述る所の語の中ハも朝鮮國ハ荷擔す
 るの下心の有けるよやまた秀吉公の心中ハ往々ハ朝鮮へ軍を出さんハ謀慮のある折柄又若康廣か

彼國ハ爲反問もなりぬべきハ我國の大なる妨けたる事なりとさてそ切てハ捨られ去ハ深き意と聞
 えける

重て被遣二兩使于朝鮮一事

秀吉公既ハ橋康廣を誅殺あつて後再び對馬大守 平 義智柳川豊前守調信并ハ禪僧玄蘇(號仙巢)
 と差添られ重ねて朝鮮國よつかハし通信使渡海あるへき旨と催促せられける此義智ハ宗宗慶か子
 孫とし代々此島の領主たり朝鮮順路の海道として彼國の近隣たれば土地風俗海陸の案内まで能そ
 らんじたる故を以て此度の使節と承るあり殊ハ義智ハ秀吉公の家臣小西攝津守か婿たれば秀吉公
 の腹心を明け示さるゝの一人あり又義智いまた年少たりと雖も勇悍他ハすぐれ殊ハ當時權臣の一
 家よつらなり秀吉公の目見せ能よつけ諸人これを畏服すれば柳川調信といへども凡て義智が指圖
 を承る處とこそ聞えける兩使ハ早く朝鮮の王城ハ打入りたりければ東平館よこれと宿させてさま
 々ハ禮應せりかくて朝鮮王其意趣を尋問るゝハ義智答て幾回も貴國通信の使を邀ふるハ外あし
 今度の義智調信兩人とも通使を誘引せずんば本國よかへるべからずといふ是よおめて彼國の
 諸臣胥集つて評議となして云日本の兩人ハ誠して其實ハ兩國の隣好を求むるハ意ありや又他ハ陰
 謀を構ふるや否を先見よとて其職一ハ定まれば乃ち旅館賓客の役人よ云せける是より數年前倭人

来りて全羅道ぜんらどうをなす竹島たけしまと損そんじ其その砌かたり朝鮮國ちょうせんこくの邊將へんしょう李り太源たいげんを殺ころせり且ま上のうへ日本にっぽんの生口まがしを獲とりて
 聞きく朝鮮ちょうせんの邊へ限かぎ沙さ乙おつ昔せき同どうといへる者もの國內こくないと逃にげ口くちして日本にっぽんの地ち入いりや、もすれば倭わの海賊かいぞくを導みち引ひ
 て寇あだをなすより朝鮮王ちょうせんわうの愠うらみ深こほく此事このことある處ところなりまかれバ今の謀いまはかり日本にっぽんに在ある處ところの朝鮮ちょうせんの叛はん
 民みんを擒とらえし送りかへされなバ通信つうしんの求もとめ早速まよそくに叶あふべきと餘所よそながら物語ものごとなごしめける義智ぎち明あきら
 てそれより易やすき望のぞみなるべけれどて早速まよそく平調信へいぢょうしんと日本にっぽんへかへつしめ未だ數月すうげつならざるも悉ことごとく叛民はんみん
 の日本にっぽんの地ちありける者もの十四人じゅうしにんまで生捕いけとりて朝鮮ちょうせんの王城わうじょうへ来る朝鮮王ちょうせんわうの仁政にせい殿でん出御いづつぎなし大兵威たいへいゐ
 をうなへ沙乙昔同等せきおつせきどうどうを擒とらえながら庭上ていじやうに引ひ引ひすへ委細あまこに彼者かのか共ともの罪惡ざいごをせめ問とふ其その白狀はくじやう明あきらり發はつ
 する上のうへ外ほかより再び詰問せつもんことあらずしてそれより城外じやうぐわいの常つねに刑罰けいばつをあすの地ち引ひ出だし斬罪せんざいして捨畢すてせ
 るこゝよおめて義智ぎちの馬うま一匹ひとひきを賜たまひ其後そののちまた義智調信ぎちぢょうしん等の遣使けんしと殿内でんないよして饗宴きやうえんあり其
 よろこびを盡つくされけり此時このとき衆議しゆぎ紛々まごまごとして通信使つうしんしを日本にっぽんに渡海たかせしむべきの義ぎ一決いつけつせず相國さうこく柳成りゅうせい
 龍知事りゆうちじ邊協へんけう等ら強つよて啓あきらめて使つかいをつかひし報答ほうたふし給たまはん事ことのよろしかるべき旨めいを奏そうす其その第一だいいち外ほかに
 和睦わくぼくの義ぎをとのへ内うちに彼國かのくにの動靜どうせいを窺うかがひ見みんこと是失計しつけいよあらじと諫ことごとるも朝議てうぎ始はじめて一ひと人定さだめ
 り朝鮮王ちょうせんわうの柳成りゅうせい龍等りゅうどうらうを命めいじて日本にっぽんへの使つかいすべき器量きりやうの者をえよましむ時とき大臣だいじん兼かね知ち黃允吉わういんきち司成しせい金
 誠せい一等いどうを扱あんでたり黃允吉わういんきちを上使じやうしとし金誠きんせい一ひと副使ふくしとなど典冊てんさく辭箴じせんを以もつて書狀しよじやう官くわんとなし庚寅年かういんねん



柳成

三月つひは義智等とおなじく朝鮮の湊を船出してはるり漕向ふ此度義智朝鮮の國王へ土産として孔雀二羽をらび鳥銃鎗刀の類を獻じたり夫我朝は鐵砲の術ある初を尋ねるは後奈良院の御宇天文八年八月に南蠻より渡海の商船惡風は漂泊されて大隅國種子嶋は吹よせらる浙濱の漁人とも相集りて何國の者ぞと尋ねけれどもその言語通ぜねば解すへきやらのなき處は船中は大明國の儒生便船したる五峯便と云る者船より出で筆執つて委細と書すよりこそ其變船たるをば知たるなり島主兵部時時撓是と痛はり暫く旅館に宿せしめてさまくは響應しける船長半良叔舎時撓が其情の厚きを感じ船中の寶たる寶物多く時撓は進む中は此鐵砲あるを取出し藥をこめ火を刺て目當をして放つて見すれば忽ち火雷の如き響きあり臭き煙雲を衝て外り其玉丸の當る處は金石と雖も打碎き劈穿すと云ふとなきと軍用第一の重寶たるものなりとて時撓はこれを與へ其秘術藥方までことごとく傳授したりけり當世は見るところの短筒種か嶋と云る鐵砲は是なり時撓はよ嶋津義久は送れば義久この器をこしらへ將軍家へ奉り其術を根來寺の杉の坊に傳授せしを始としそれより次第は妙用を工夫し來つて大小鐵銅の筒は云ふ及す火矢筒松樹紙ともつて張れる筒までもその術諸國よくわしく成りぬ實は武用その技を盡せる時世となるもとより武道さかんなる我國は風俗ゆゑと聞けり義智又此物を朝鮮へも送りし故彼國始て鐵砲あると知れりとなり

朝鮮の三使來朝の事

かくて朝鮮國の通信使の三人と宗對馬守義智と柳川調信僧玄蘇等と同じく四月二十九日より釜山
浦へ船を發し對馬の國に至り着ぬ此所より留ると一日また船を發しすへて水行四十餘里にして壹岐
の嶋に到着しそれより長門國那古耶などと歴過ぎ同七月二十二日に至りて京都洛陽の地より到着す
それより五條堀川本國寺中を旅館と定め暫く逗留の儀をなさしむ此時に當つて秀吉公は相州小田
原北條氏政追討の爲として彼國へ發向をし給ふかば留守たれを涉歸京を待はどすでは數月を経た
りげり程なく凱歌し給ふと雖ども又託するは城官修治の事ありとて己は五月を経て後朝鮮使御
對面有るべきの由を仰出されたり三使の者ハ聚樂亭へ參上し朝鮮國王の書奉す其帖は曰く

朝鮮國王李昭 奉書

日本國王之殿下

春侯和煦動靜佳勝遠傳

大王一統六十餘州雖欲速講信修睦以敦隣好恐道路溼晦使三臣行
李有淹滯之憂歎是以多年思而止矣今令與貴介遣黃允吉金誠一
許歲之三使以致賀辭自今以往隣好出于他上幸甚仍不與土宜錄

在別幅庶幾笑留餘順序珍畜不宣

萬曆十八年三月 日

朝鮮國 李昭

偕又朝鮮國より關白秀吉公へ獻上の音物別幅は書する處は品々朝鮮國の馬二疋大鷹子十五連鞍子
二面并諸馬具二通黑麻布三十疋白綿紬五十匹青斜皮十張人參百斤豹皮二十五張虎皮十五張彩花
氈十枚紅綿紬十匹清蜜十一壹豹皮心兒皮邊海松子六碩はと聞えけり秀吉公既は對面の儀をり乃
ち返翰を遣はる其文は曰

近歲本朝分崩離折兵革不止故予發憤不遑數年宇內既清夷矣夫
我固窺屬繩樞之周餘也然慈母夢日輸入懷中而吾以降時有相士
曰日之所照臨莫不砥屬後來其有蓋世之氣不可疑焉故吾常自負
一旦乘時運而龍飛東畧西征南伐北討大功之速成也誠如大陽一
升萬物皆無不照焉吾想人生不滿百豈壹體于一方以費日乎是故
吾促大兵將入大明而使一劍霜滿四百州之天唯是之願耳若然則
必以貴國爲前鋒也其必勿遺失吾出軍于大明之時爾與貴國一結交
隣之好而已

秀吉公より朝鮮に上副使共に銀四百兩を賜ふ其外書狀通事官以上各々差あつて参暇賜はりければ今日京都へ發し歸國よこそ趣さける

棄君讓産并逝去の事

明れば天正十九年正月元日秀吉公今日参内の儀式華をかざり路次の警衛嚴重に執行のせ給ふて公事の御祝事をいりければ東西南北の諸大名聚樂城に相集りて年頭の慶申上る去年相州小田原一戦は北條氏政頭を授るの後天下統一統はけ代とよさまり吹風杖をあらさず長閑ある春よ立回り京洛伏見大坂の間に万馬の往來日々路頭を去りあらず目出度御代の瑞祥ぞ喜ばざる者もなし秀吉公まばく諸大名近従の弟宅に御駕をまげられ茶の會遊樂さまの觀をつくして觀樂を極め給ふ中にも技曲をつかせ給へ南都四座の猿樂をも召聚めてその家々の秘曲を盡させ上覽あるころ目出度けれ又去年の夏秀吉公の愛させ給ふ女中の腹に男子出來させ給ふあり此女の淺井備前守長政が女あり秀吉公御齡五十は逾給ふまで未だ一處の御子も出來給へぬ適々儲給ひたる御子をましてや男子よさへかひしませば其折節の御祝大方あらざれば諸大名の在京あるに申せよ及す國々より若君の出來させ給ふ慶賀のためとて参勤に望められ或は遠路の使者飛脚毎日引もきらすさいめさわたり京中の貴賤の往來はよきやかありし事どもなり即ち御名を始に棄君と名付給ふ

があまり寵愛の意より八幡太郎殿と名をかへさせ給ふて掌中の珊瑚優曇華の花よりも猶珍布もてなし給ひける目出度中其年も暮れ今年も九月中半に成よけるかゝる所も八幡太郎殿いかる故ともなく俄に病つかせ給へば秀吉公と初めまぬとせ内外の人々手は汗を握りて如何あらんと云るほど次第は赤氣色重らせ給ふを諸方の名醫自己々が良方の覺えを盡し御祈し師の丹誠を抽んづるといへども終に良醫の術もたへ神佛の加護の驗もあきまや今此世のかざりとなつて女中の歎き諸臣の探動云ばかりなく哀れなり中に就て秀吉公の御伴悲歎の涙の袂のなかの間なじ情愛常と思ひ焦れ慘怛の色肝を乾かす近従の輩其哀情を示さんとて髪を斷り若君の姿もこれる人もあり秀吉公の愛顧の御意斯ても思ふ事もありやと清水寺に參詣ありて彼所へ滞留し給ふと三日までに至りける音羽山の松の風籠の響きよ音とあるは曉に夢打さめ寐られぬまゝと思より却て若君の哀を引出し種とこころなれ何と思ひ意もなく秀吉公つくつくと寐られぬ枕をそべたてし思ひつけ給ひけるやうさても往古より中華の軍兵來つて我國を侵せると幾度と云事なし然れども本朝より外國を伐しこと神功皇后の三韓を征伐し給ふの外いまだ聞ざることなり今我身賤の民間より奮起り位人官の極めに至り六十州を掌の中へ握れる身となれば何不足の事もなく一生の愛なきの地も座し起臥老の安心をこそ樂むべしと思ひつる甲斐もあらず方々今掌中も珠くだけて

ハ再びかへる光きく枝上ハ花散て遂ニ染ふる色を不見されば世間のありさまと熟と案ずるハ幼年
 の泉中の夢曉 知らぬ別れとなり餘算ハ風前の燈 暮とも頼まぬ憂ハ沈んで既ハ此生と盛んとす
 大丈夫豈辭々として歎き死するとあらんや秀次と以て帝都の守護を盡し日本國中の事を掌しめ
 我ハ將ニ大明國に入て皇帝とうちなつて老の爵情を晴さん何の子細かあるべき其上去年書翰と
 朝鮮ニ馳せて略此事を通ずと雖ども彼國未だ有無の沙汰なし是又罪せずんば有るべからず我れ思
 ふニ先大明をば打すて置朝鮮と征伐して朝鮮我が意よししたがハ彼が兵と先手として軍を進めん
 ん從ずんことをく攻夷ぐべし直ニ我が鋒先を以て大明入らんハ手間どる事あるべからず
 と思案し給へ早々聚樂城ニ還らせ給ふハひとへ邪慢の天狗どもよき折を窺ひ秀吉公の心中ハ入
 かりて障碍とあすぞ聞えける

秀吉公朝鮮征伐思立の事

諸も秀吉公清水寺より歸城あつて近従の人ニ仰せ付られ早々大老中老五奉行の者共ハ云ふ及ば
 ず其外 諸の老功ある大將ども末々の輩ニ至るまでことごとく相詰べし評議せん事ありと觸
 渡すべきの上意あれば是ハ何如ある珍事と各々驚き早速この趣を述べたりけり此時ハ
 大槻現徳川公前田利家浮田秀家毛利輝元小早川隆景これを天下の大老となし生駒雅樂頭中村式部

少輔一氏堀尾帯刀吉晴を以て中老と定められたり五奉行ハなを前々定めおかるが如くなり時々
 つさず在京の諸大名役人まで登城あり何事をか仰出さる事やらんと思をこまして仕候ある程なく
 秀吉公ハ出座あつて上意有けるハ日本すでは我手ハ入て天下一統の世となる事一ツハ面々の軍功
 ある故かそれつひてハ此國ハ中納言ハ渡し(三好中納言秀次秀吉公の甥なり)攝政 關白とも
 ハ天機をうかいつて彼ハ讓り京都の守護とし我大明に打渡りて彼所をうちしたがひて隠居所とせ
 んとおもふが故兼て去年朝鮮の使もこの義をすでは云つかハすのところ其返答もいまだ是非の
 沙汰ハおよばずよかる時ハ彼國の意あり是を征伐せずんば有べからずことよハ我とて老屈を
 催したれば事遅々ハおよぶ時ハその願ハ中途よして空しからんハ口おしき次第なるハし是よよつ
 て俄ハおもひ立ところなりニツハ日本ハ小國ゆへハのハ舊功の輩ハ爵祿を與へんと欲しても
 我意ハ叶ハざれば我ハ武功の太刀先よて大國の山も川もこ我手ハ入れ功作ある者どもハ我意の
 如く知行をも所持させん事ハなんばうとろよき老のなぐさみ頃日の鬱鬱をばらさんと此上ハ有
 べからずとおもひ立が故諸老中どもハ中談せんため召よせしなりハのハ何とおもふと異見あ
 らば遠慮なく申さるべしと上意ある大老の面々より五奉行業ハいたるまでおもひもよらぬ珍事を
 承り當座ハ何と返答申さんよふなくアツト斗にて互ハ目と目と見合せをばよく言葉と出す人

もなし實は數百年來日本の大亂となつて東西の國の終まで年々の戰闘は父は離れ子を殺す百姓の
 賦役ばかり立られ人馬非理の勞困よつて安き間なき苦ありしもやうやく去年の秋よりこそ暫く
 太平のささしを顯し民も公家も安樂の氣も移らんとする時又大軍を動じてまらぬ行衛の風波と云
 のびて見も聞もせぬ人の國へ怨みも起らぬ兵戈を動じおもむかんとこの妻子の歎き父母の情まで
 一々おもひつゞくるは誰一人の意も宜しとおもふべき満座の人々さしうつむひて居たる許なり
 斯ての上の仰の傍接撥問扱の仕たる舛お見ゆる處と徳川公まづかよ仰出されて是はめつゞしき
 沙汰にも座座かな一段々かるべうおぼへ候とある秀吉公の顔色うるはしく見へたるは是もつゞ
 ひて高列を出て中ける旨あるに加藤主計頭清正なり高聲はりあげて儲も其昔 神功皇后の三
 韓を攻給ひしより朝鮮の我國の大同前の定にして此方の下知もつき貢物をも怠りあふ年々持參の
 等なるもそれさへ近代の其沙汰と取失ひもつき仕形も候あまつさへは尋のかもむきの傍返事ま
 で遅々よおよぶ事その科宥免さされがたき事勿論の義もて候あり殊も八幡殿の傍返善も高麗
 へは人数をつかひされ面々の手柄次第は知行を下され武士の意と悦せ給はんは是も過たる傍
 法事へはまじ彌事の決する時ハ清正身不肖よいへど先手の免蒙り生ながら高麗王を引とつへ
 對定乞を仕らせ日本への年貢諸役をつとめさせそれより大明の案内は驅立て分捕高名仕らん

子細なき事よいとさきり切つてせは秀吉公の大は傍機げんよくて備がやす通り聊か吾ころよ違
 ふ事なしと即時は人数割備定めの評定を仰出されけるとなり

朝鮮征伐船造の事

五奉行の人々のすでよ如此備定め仰出され有うへは是と今さらとめやすとも事止むべき義
 よあらねば諸大名は觸渡して早くは支度をなさしむるよえくべからずと一々次第は觸つかりし城
 内には是を召集めて此儀とかく決定せり第一は漂茫たる海路を大軍の押渡らん船楫惡ふしてハ
 叶べからずと船奉行九鬼大隅守嘉隆を伊勢の浦邊つかりし大いなる軍船數百艘造らしむその
 第一は尤大いなるを日本丸と號して是を秀吉公の召さるべきは座船の領とぞ聞えたりその外四
 國中國九州の船たよりよき國々の大名も各渡海は仕度のよめ大船多く作り立て兵糧米と備へ
 軍兵と催促して人々打立べき用意の外今更餘事なかりける時秀吉公重ねて仰いださるゝハ來
 年正月先陣の兵どもはやく例山よすみ三三月よ至つて諸軍ことごとく渡海すべし我まさま旅
 館を肥前名護屋よつくり其所よ居て軍旅の指圖よかめて如此の便りよからんか又東國は兵士高山
 谷馬土よのみ達者よして舟軍よ不勝手なれば是をば名護屋よ屯め置その國は遠近よはかり兵の
 多少よ出さすべし其また方角の近からんところの常の軍役なかばを出すべし遠くして勝手のよか

ふぬ其兵三が一或の五分よして其一を出して何れもまさよ此法を守るべし又南海四國九州の兵
つねは舟軍になれたらん者共の皆々朝鮮は押わたりて軍功をばげますへしと約束法度と定めて
又京都の警衛大坂の番手まで其人數を定め置れけり

秀吉公書を琉球國へ遣と事

秀吉公のこゝよ於て今度朝鮮征伐のあつんとすることを琉球國にも告知らせ其威風とめめさんとて
一書をきたしめ鳴津兵庫頭より仰付られて贈り遣さる其趣は曰

吾勃興于蓬姿二順武威之運六十餘州既入二穀中故殊域遐方來庭者
不レ少吾今將征大明是天所授也鼓爾琉球未レ通二聘帛吾欲遣兵征之
而原田孫七郎以南舶之有利故屢往來于琉球比日俾近臣達中告吾上
曰速赴琉球說本朝征明國之旨則其來亨不可疑焉是故余暫宥之
來春出師之日速可來謁若怠而不至則其必遣大兵燒其城郭一塵二其
島民可運于掌上

と認めて是を贈りければころは琉球の君臣この書を得て大に驚き早速は官人鄭禮と云者を使と
し大明國へこの旨を告げ訟ふ福建巡撫使趙參魯といへる者の吹嘘よりて日本入寇とる支度の

専らなる由傳へ承る所ありと委曲より子細のやうとせせば又江右の閩人許謙といふ者近年薩摩
の國に在て醫を業として居たりけり又同郷朱均といへる者是も薩摩に國に居たりしが密に相議し
て福建の守りたる大明の臣より右の旨を告げやりける大明帝は敢て是等を恐るべき事ともせず唯海邊
の兵士を令して軍船をとのへたる用心の事ばかりなり琉球よりも日本へ返書も贈らずしてさて
止みたりける

朝鮮大明へ急援を告る事

茲歲大明國萬曆辛卯の日本天正十九年は當れり然れば去年朝鮮より我國へ指遣とところの來使
黃允吉金誠一が等此春に至りて歸國なす兩使のすでは來朝して日本はありし時彼國のもてなしの
弊より始め秀吉公の風度諸臣のやうすまてくわしく是を述おわつて再び誠一中やう我等まさよ
歸國せんとするに當りて彼國の答書を裁せず先兩人の者の回り去るべし後より答書をやらんと云
ひし其時我等重ねてやけるやうの使臣として國書を奉じ來りながら若其返書を受ずして歸參いた
しなば是君命を弑葬に委るよ同じからんの條是非とも乞受て回らんとせしを允吉若や強て此
事と請なば秀吉が意は逆つて長く彼國を押留られなかと俄は我等とそめて海界の濱まで到り
回りて相待とさ答書始めて到來せりされども其ことを禮なく人を慢るの弊多くありし故再三押返

してこれと改めせさだる處あり倍又其經來る所々の國主どもの贈り與ふる品々の音物とハ金銀一
 全く此を退けて少しも受納ることなしと語る是より先黃允吉とて釜山より泊るとき一使を馳
 て王城へ其量見と述て曰く日本の様と窺ひしよかならず兵禍ちかきよ起り來りしハんか早くは用
 心の事あるべしこれよよつて先だつて注進よ及べりと訟へしよより今日當着の時早々此議を相謀
 らんとて朝鮮王自ら兩使を召て尋問る允吉が對ふる處全く前よ述るが如し誠一よ再び此議を尋ね
 らるよ誠一が答へハ大よ相違し何をもつて兵事の禍ひあらんと云事を允吉ハ見申や臣ハ且て存
 じ別つことなし允吉諷りよ人の心と騷動せしむるよ至るかど云ふ諸の議者あるひハ允吉と主とし
 て是を取るもありまた誠一と是なりといへる者もあつて一座紛々れ説やまざりける時よ柳相誠一
 よ向ひ君が言黃使と相違す萬一兵起りて油斷あらば君是といかんとかせんと云ふ誠一重ねて吾と
 云へども豈よく倭人の終よ變動あるまじきといふ事の見定めハなければもたゞ黃が言のはなハだ
 重くやと聞て朝廷も野外も以の外よ驚きまよひしよ心落付申さすためかくハ答へしハなり強て兵禍
 のあるまじきといハ肯ひよくき事ありといふまかのみならず倭より來れる返書よ兵と率て超て大明
 へ入らんの語あり柳相議して此言只よ黙すべきよあらず早く使臣ともつて天朝(大朝を指)へ奏聞
 すべしといへハ或ハ又云恐らくハ此言と皇朝よ申さんとき我國の私よ倭國よ通ぜしことを尤も罪

せられんか一よこれを諱かくして告ざるがましならんといふ柳相時にかしかへして夫事よ因て隣
 國よ往來を事古へより民と保つハ仁徳より免れざるの例ありむかし成化の間よも日本より我よ
 たよよりて貢物を中國よ求むる時即ち其質よ盡して奏聞せしよ勅あつて此旨を諭さる前例すよ然
 るときハ獨り今日のみの科よあらず今これを諱隠て奏聞せざらんこと大義に於てよあらざるあり
 況や倭人實よ順を犯すの謀ことあつて他國より是よ奏聞し天朝反つて我國ハ同謀あるが故よ以て
 隠諱ると疑われんハ其罪なかり通信の類よあらじと強てやし請たるよ朝鮮王も此議よ同し遂よ
 金應南と云る者と使とし馳て此議を大明國よ奏聞し時よ福建の人許謙俊陳申等倭人れたためよ擒へ
 くれ彼國よありけるも蓋よ此事を大明國よ告げやり又琉球國の世子まきりに使を遣して此事よ奏
 する砌なるよ朝鮮國の使のみ未だ大明よ至らざる故よ以て大明帝ハ扱ハ朝鮮日本と一ツよなつて
 大明ハ二心ありけるやと議論區々なる中よ許國會と云へるものハ先立て大明より朝鮮へ使節とし
 て來る者なるが衆臣の論を止めて曰く朝鮮國の本朝へ至誠なるりならず倭人ともよ叛くよあつ
 じまばらく待て見給へと云こと未だ久しからずして應南等が至るよ付て許公も大よよろこぶのみ
 か朝議も始めて定りけり

朝鮮國日本の軍兵をおそれ英雄と選む事

朝鮮王倭人の難あらん事を憂ふるが故朝廷は日々集會して評議を定め其國邊の武事を煥燦とする輩
 とららむは金匪といへる者をすゝめて慶尙の監司となし李光を全羅の監司とし尹先覺を以て忠清
 監司と定めて三道の巡見をなさしめ所々の城地の修理を加へ兵具器械と備へ設く三道の中慶尙
 道の城と築くこと尤多かりけり永川滄道三嘉大丘星州釜山東萊普州尙州の如き左右の兵營とあ
 し或ハ新築もあれバ或ハ古き増修もあり時昇平すでも久しふして中外ともに安きも狎
 れ民間また勞役をもつて憚りあやむの時あれば所々の普譚召とて往來の人歩驅立るを無益
 の事勞困するやうのみ人々覺えて國家は大事と思ふわきまへなく怨みの聲路も載たり前代典
 籍李魯と云ふ者柳相と書を贈りて城と築くの良謀は非ざる事と言ふそけうへ曰く三嘉の地前も鼎
 津に遙かなる水を隔てたれば倭人よも飛でんこゝより渡るまじ船おくバ何を以てか克至らん何れ
 爲よか浪は版築して民歩を勞するは至るやと云ふ夫萬里の滄溟だも障へ隔つる事なく超來らん
 倭賊とたゞ一帯の江水を以て渡ること叶ふべからずと決して頼めるかろかさ一時評論すべて如
 此なるこそうたてけれ又弘文館の書劄と奉りて委曲に謀計を論せし其説を用ひずして西南の築
 ける所みな其地形は勢ひも叶わすたゞ瀾大の地を撰んで大勢をいゝを以て専とす晉州城の如
 きハ本幸ひも其地險も據て守りをなすべき事あるも其古城の小なると嫌つて新東面の地に移し

て下つて平地よこれを築けり其後倭軍の此城よ入る事やそく城と保つよ至らざるこそ残念なれま
 た軍政の本たる大將と擇むよありまた大將の要たるハ軍事に組練人を以て附屬せんころよかるへ
 し斯るとれ計策とバ百よ一ツも擧せざる事こそ思かあれ爰よ井邑監李舜臣もとより膽勇謀略のあ
 る者なればとて擢んでられ全羅道水軍節度使よなされける舜臣騎射は鍛練なる者ある故造山の萬
 戸となつて巡察使鄭彦信が幕下よあり鹿屯嶋の屯田たるとき一日大霧暗く暴雨頻りよ至ると
 するを見軍柵中け兵士ども盡く田畝に出て刈たる禾を取り收めて留主よハ僅十人のこり居る時節
 よのぞんで俄ハ胡人の騎馬を連れて襲來るを舜臣ハはやく柵門を閉かため自ら柳葉箭とみつとり
 柵内よりさしとり引つめ散々射立れば何かハもつてたまるへき賊數十騎をやよハ馬より射
 倒しけり胡虜是も驚いて忽ち退さ去る舜臣夫より大門をひらかせ只一騎にて馬駈出し大よ呼
 んで是と逐ふ虜どもこれハ乱れ立て盡く奔去るハ全く舜臣力なり然れども誰あつてこれを朝廷
 へ推擧る者なふしてろれより十四年小官ハ隠れしを今度倭賊の急あるゆえ召出さるハと聞えけ
 り時ハ朝鮮ハ朝廷に武將多しといへども惟申立と李鎰ハ二人のみ最も名ある輩なりまた慶尙右兵
 使曹大坤己ハ其年老よ至れるのみあらず勇氣の劣れる男あれバ柳相請ふて李鎰をもつてこれハ代
 給ふハ旨を中とぞ云ふとも曹判書洪汝諤が強て曰く名將ハ當ハ京都ハ在しむべし李鎰と遠所よ

離ち遣るべからずと柳相重ねてすべての事其議もあづかるを以て責しとせり況や兵を治め敵と防
 ぐの道をや最もみたりと辨すべからず一朝よして變あらばこれを遣すんばあるべからず同じくこ
 れを遣るならば早く遣らんよ及べからずあらかしめ備ひて變のおこるを待んことを能らんずれ其
 上又祖宗より已來鎮管れ法あつて諸道の兵を以て所々の鎮府に附屬せしめ鎮管もある所の總大將
 の下知を請しむ慶尙道を以て是を言へば金海大丘尙州慶州安東晋州これを六鎮の場所とす一所敵
 兵ある時ハ六鎮これと救ふたどへば一鎮たましく利を失するといへども他の鎮次第に兵を嚴よし
 て堅く守るときハことごとく靡き立て奔り潰ゆるに至るべからず此法當今名のみよして實ハ昔の
 如くよあらず一ハ驚急の事あらば必遠近諷りよ動じ將なきの軍を以て原野の内よ聚め將帥を干
 里の外よ待んハ其れ勝利あるべからず早く古への法よよつて名將れ武功あるを撰んで所々よ分つ
 て軍心總聞どころあらしめ給へと云ども此議を行なれず明れば壬辰の春申立李鑑の二將と分
 ちつかハし邊の備ひの懈を巡見せしめ李諱ハ忠清全羅道よ往き申立ハ京畿黃海道よ行しめらる點
 檢とるとあるの事ハ弓矢槍刀の事のみなり申立素より殘暴の名ある者よして至る所の人と殺し威
 を立て我意と震ふよより所々れ守令たゞこれを畏るハのみなれば人歩を發し道路を治め馳走變應
 の事のみと専らよ勤めとし其他の備ひ禦ぎれ長き策よあつてハ聊もなかりけり程なく二將ハ巡

見し終りて立回るかて四月も一日よあれば立ハ柳相の宅よ來りて私しの雜談よおよべる時柳相
 これよ問ふて曰く倭兵のこよ到り來らんことさあれ早晚の時よか變あらん且又今日賊の勢ハ
 難易如何とかするや事與らば貴公此任よ當るべきの人たり其謀いづれよ出んと思ひ給ふぞと問
 けるよ申立はなけだ是を輕じ何の憂とぞるよ足らんやさのこ心を勞し給ふべからずと云ふ柳相重
 ねて左よあらず往ハ倭兵但に短兵を頼みとせしが今ハ鳥銃長技とぞれり輕くし見らるべから
 ず其上我國家久しく昇平の安樂よ住して士卒の意おそれて弱なり事急なるよ至つてハ土の如く崩
 れ死れ如く解ん時一旦よハれを支へ防ぐハ難かトん若戰闘數年を経て後人々兵を習ひ法を知ら
 ん時ハあるべからずその初めよ於て吾甚だ此義と憂よ思へりといへども申立かつて省悟す維ハ鳥
 銃ありとて豈よよくすべて當らんやと云すてハ其座を立さりけり申立初め穩城府使の官よありし
 時胡虜來りて鍾城を圍むよ立馳往て纔よ十騎餘の兵にて胡虜ハ大勢と突撃てこれを破るの功によ
 つて申立が將の量あると進め舉られしものなるが先日趙括が秦の兵と輕んじ事に臨んで悞るハの
 意のなかりしよ是又克も似たるかな如此の量見ハ事の過を引出すべきかと譏者ハ眉と皺めける

朝鮮よ到る人懸着當の事

同天正十九年の豊臣秀吉公朝鮮よ渡海すべき人數又ハ名護屋よ屯むべき軍兵を分ち定め諸軍

の手分をなし玉ふ時、秀吉公仰出さるゝ此度朝鮮發向の先手のこと、兼て主計頭が望む所といへども、高麗渡海の船路を、筋不案内にして、最も衆を誤るの事、至らんか、これよつて一の先手、小西攝津守行長、又相定る所なりと上意あれば、加藤清正も其意、畏りて、隨ひけるゆゑ、二の先手、ハ定りけり一の先手、小西攝津守行長、其兵七千、宗對馬守義智、其勢五千、松浦式部卿、法印、鎮信、三千有馬修理、太夫、二千、大村新八郎、一千、宇久大和守、七百人、以上、一百八十七百人、を右の先手と相定む、加藤主計頭、清正、一萬人、鍋嶋加賀守直茂、其兵一萬二千人、相良宮内大輔、八百人、此手合せて、二萬二千八百人を一手として、是ぞ左の一手なり、主計頭圖と取て、一日替り、日晝を隔て、先陣を勤むへきの仰付られたり、黒田甲斐守長政、その兵五千人、羽柴豊後守大友義統、六千人、合せて一萬一千人、是三番の相備たり、嶋津兵庫頭、義弘、その兵一萬人、毛利豐岐守、二千人、高橋九郎、二千人、秋月三郎、伊藤民部、太輔、島津、又七郎、かの一千人、合せて一萬七千人、をもつて、四番とす、五番より、福島左衛門大輔、正則、四千八百人、戸田民部少輔、三千九百人、長曾我部土佐守元親、三千六百人、合せて一萬二千三百人、六番より、蜂須賀阿波守、七千二百人、人生駒雅、樂頭、五千八合一萬二千七百人、七番より、小早川左衛門、隆景、一萬人、立花左近將監、宗茂、二千五百人、久留米侍、從、千五百人、高橋主膳、正五百人、築紫上野介、九百人、合一萬五千七百人、八番より、毛利右馬頭輝元、その兵二万人、一列とす、都合十四萬二百人の、著當なり、さて、又海路の人々より、九鬼大隅守、一千五

百人、藤堂佐渡守、高虎、二千人、脇坂中務、少輔、千五百人、加藤左馬頭、善明、七百五十人、來島出雲守、七百人、菅平右衛門、二百五十人、桑山藤太、一千人、同小傳次、一千人、堀内安房守、八百五十人、杉若傳三郎、六百五十人、都合十五萬四千人、海陸分て、押出とべき、海軍法を定めらるゝ、天正二十年壬辰年、號と、改まつて、文祿元年三月十日、に、海軍出しと聞へたり、渡海の面々、相守るべき、數ヶ條を以て、諸手大將、み觸わたさせ給ふなり、既に四國九州、伊勢、紀伊、國の兵船、の順をもつて、乗出すべき、仰出されあり、と、や、徳川公、其兵一萬五千人、大和中納言、秀俊の子、其兵一萬、前田利家、その兵八千、徳川秀康、其兵五千、織田常真、信、剃髮して、其兵千五百、上杉景勝、其兵五千、蒲生氏郷、其兵二千、佐竹義宣、其兵三千、伊達政宗、の兵千五百、最上義光、其兵一千、森右近大夫、忠政、其兵二千、丹羽五郎、左衛門、長重、其兵八百、木下勝俊、其兵千四百、北の庄、某、六百、人、同、舍弟、美作守、村上、周防守、二千人、溝口、伯耆守、千三百、人、木下、宮内、少輔、百五十、人、水野、下野守、千人、青木、紀伊守、千人、津宮、彌三郎、三百、人、秋田、太郎、百二十、人、津輕、右京亮、五十、人、南部、大膳、大夫、本、田、伊勢守、那須、太郎、日根野、織部、北條、美作守、伊藤、長門守、凡て、外様の、大名、其勢、六萬、六千、餘、人、なり、扱、又、近、從、手廻り、の人々、より、富田、左近、金、森、飛、騨、守、蜂、屋、大膳、大夫、戸田、武藏守、奥山、佐渡守、池田、備中守、小出、信、濃守、津田、長門守、仙石、越前守、木下、右衛門、大夫、上田、左太郎、山崎、左馬允、稻葉、兵、庫助、市橋、下總、赤松、大總、介、羽柴、下總守、大嶋、雲、八、伊藤、彌、吉野、村、肥後守、木下、右衛門、舟越、五郎、右衛門、宮木、藤、左衛門、橋本、伊賀守、鈴木

孫市生熊源介羽柴三吉長東大藏少輔古田織部山崎右京進藤田左衛門權佐中江式部大輔生駒修理亮
 同主殿佐溝口大炊助川尻肥前守池田彌右衛門大鹽與一木下左京矢部豊後守有馬玄番助寺澤志摩守
 寺西筑後守同次郎助福原右馬助竹中丹後守長谷川右兵衛尉松岡右京進松下右兵衛氏家志摩守同内
 膳正寺西右兵衛尉服部土佐守間島彦太郎彦馬廻り彦扨從組彦使番弓鉄砲の物頭諸役人彦中間以下
 に至つて凡て五千七百餘人の是彦手廻りと聞えたり又別六万の人数を分て遊兵と定置給ふとて
 朝鮮渡海の兵十五万二千餘人とも云或ハ十三万餘人とも云まこと多しとやせども大明より
 の援兵の多からん時其手當となさんためとこそ知られたり

秀吉公筑紫御進發の事

今年文祿元年壬辰三月より秀吉公肥前名護屋へおもむき給ふよし相極るすで去年より彼所
 御狩屋の普請等を近習外様の差別なく一所くを分つて其もよりよき大名小名も仰付られしかば
 大勢の人数を以て本丸二の丸樓門矢倉の中すよ及ばず奥の局山里の敷寄屋築山遣水所々の番所
 まで木石を携み工匠を揃へて奇羅をみかける間所大小五六十處の造作を數月も經ざるよ出來せし
 ろバ別別あき者ども云けるは是ひとへ太閤の器量の廣きと又彦威風の強きを以て流石武功の
 人々まで畏れ仰ぐがゆゑよより何事もあれ彦意又叶わぬ事のあきと見よとのしる者もあれば

また適く多き人の中よは是非の理り知りたる人の異域よ兵を弄んでよしあき民と怨鬼とあしそ
 れさへあるよ大兵を興す國の費の大方ならぬがゆゑを以て百姓の云よ及ばず大名も近年困窮なる
 よ一朝の驕とて飯屋の普請の結構の何事ぞやと謗れる者も多かりける斯て三月に至りては秀吉公
 の彦備段々お打起べきよ極まれれば諸老臣一やうよ大將軍名護屋よ彦在陣あるあれば定めて大明朝
 鮮をかきらす書翰の遣取も多かるんよ文才の者あくんバ叶ふべからず一兩輩其者をえらんで召具
 せられんかご申せば秀吉公聞召我大明朝鮮れ人をして今よりの其文字と抛たせて悉く吾國のいろ
 はをえらしむるよ何の難き事があるん何無益の徒を携へんやと宣へば老臣といへども再び此旨を
 強て進むるとの叫さるゆゑ其後の言をうへす者もなし秀吉公其夜思案し給へけん翌日則ち相國寺
 の僧承兌南禪寺の僧靈山東福寺の僧永哲等を促してどもよ名護屋よおもむき給ふ同月二十六日よ
 秀吉公京を出て備押あらんとす京洛の町人百姓よ至るまで今日の行粧を見物すべき旨御免あれば
 其通路たる小路く町屋の肆店寺社の門外人ならずといふ所なし天晴奇代の見物やと遠國往を坂
 々よりも親と携さへ子を抱き京洛の縁とよとめて相集る男女の數大凡二三萬と聞わける

秀吉公所々神社御參詣の事

其夜の秀吉公攝津國茨木よ至りて後彦馬を進め給ふ同四月秀吉公ハ安藝の廣島よ到り着せ給ひま

ふ一兩日御逗留まし、嚴島明神詣で社頭海邊の眺望さま、の奇なる詠め、旅館の情を
 なぐさめ給へ夫より進んで長門の國へ入り給ふ。仲哀天皇神功皇后の社は參詣ありて太閤不肖
 の身ながら神功の跡をつがため此度三韓征伐の事思立ところあり可畏も、辱も百代の末とい
 へども神徳は冥加あらせ給へ我國の武功大にして今度朝鮮の申とよ及ばず大明國の果までも和光
 の影あまねかるべしと祈らせ給へ夫よりまた赤間が關のぞんで阿彌陀寺へ立寄せ給へ。安徳
 天皇の御影并平家は二門の畫像を一覽あるよ古し、よ今までの旅客風僧意ある輩の詠感した
 る詩歌どものよきも悪きも其側よひつしと貼付てあるを見給へ、寺僧の出て其故事と語りてあぐ
 さめ奉るよ秀吉公大に悦び給へ寺僧は物多く賜われれば俄に徳つけ見えよける夫よりつひは肥前
 名護屋は着て飯の御殿に入給ふ新造といへどもかのづからある海山の景を取用ひ磯邊の松岩根の
 小篠此山里遷し來つて苦むせる谷かげの茶店までわざとなすぬ風興は一會を促せり軍の勢をな
 ぐさめ給へん便りまでとのへたる京洛の城とでもさらけにけりらぬ趣きを去る頃清正が申上しよ
 かりゆねとて秀吉公の御氣色殊はよろしき見えければ上下これに安堵をなすかくて秀吉公此所は
 傍座わつて朝鮮日本兩海邊は屯りなりし軍兵すては四十八万人の米穀并舟子馬の脚原まで一ツ
 湯邊のなまやうは其たより直に水邊にせ給へる見日本始り、如此の英雄の出たことを末代

いざさらで上古より例しすくなき事どもいざさらかさりし人のなし

渡海の諸將軍評定并逆風は逢ふ事

去程は文祿元年三月初め日本の諸將は朝鮮國へ押渡るとして同十二日名護屋をへ辰の刻に船出
 の約速相きわめたりす、其日となりしかば小西撫津守とはじめとして其外諸手の大船ども紐手
 よまたがひ其列を相追ふて纜をとぎ、數船艘の帆柱を押立て帆をあぐる聲のすさまじき、諸手の船
 より放しかくる石火矢のひびき、只百千の雲雷の二度も落かゝる如くあり、既に濤を漕はなれ、蒼海
 の浪路はるるよ漂々と前後左右と見渡せばさまゝの船印は家々の紋付たる旌旗風よひるがへり
 慢幕浪と照して、吉野龍田の花紅葉をさながら水は浸すが如し、渡らば錦の中やたえんと讀たり
 し流の末の海へ入るやと異まるかくて順風はまかせけるまゝ、香岐國風本といふ所まで時刻と移
 さず押付夫より多くの船と揃へ對馬國へ漕渡らんとするほど、風かひり船を出すべきやうなく十
 日餘りのいかりをも起さず、此時は海路の諸將九鬼大隅守嘉隆が方集りて軍中の約速をなす時、
 大田小源吾毛利兵橋竹中源助、堀彌五郎毛利民部大夫、秀吉公より軍中の目付として付られし人
 々あり、諸將各々誓詞を以て其約速と衆士に示せしと衆議一決しければ、やがて誓詞の前書を定む
 其々條よ

一 船中の軍評定の儀最も其中のよろしきところ有るを擇んで用ゆべき事
 二 諸船何れも依らず危難のぞむ事あらば急可相救の事
 三 敵謀珍布手立あらば互にこれと申談すべき事
 四 忠節は淺深依怙最負をもつて偏頗の義あるべからず直に申述べべき事
 五 他人の軍忠を盗みて以て我功となす事堅く禁すべき事
 六 諸手より一將ごとく謀船二艘づゝ出すべき事
 七 名護屋御本陣へ注進の義これある者必御目付衆の指圖とらけ其意をまかすべき事
 右の條々奉行衆宛どころよして靈神を誓ひ血判と調ひ連判となしおつて福原右馬助申けるの評議相とのひ互に目出度事ありさらば酒をばじめ船祝ひせんとて折二合樽三荷出したれば九鬼是を聞て最もまかるべしとて湯漬などいとおみ肴をさそくとのへ盃盤狼籍として酒宴もとて盡ぬれば佐渡守の千秋樂と謠ひをさめ其日の會の終りける

小西行長拔懸附藤堂佐渡守唐嶋を放火の事
 諸軍すては壹岐の風本に至つて數日逗留すといへども逆風は逢がゆえおのゝ氣をせき意もだへけれども如何とも詮方なくて風待して居たる處へ行長の思らく海灣もしおたやかならば諸將の船

みを發すべしまか老人も先だつて速に朝鮮に入らんといふと思ひ定め其夜の夜半ばかりよひをかよ縦ととき手勢をまとひ宗義智が人数と共に押出して對馬豊崎に馳たりけり翌朝となりければ逆風やうやくと静りたれば諸手の船ども早く馳んと錠を上るよ至つて清正長政等行長が船の見えざるよおどろきさらば船共を押出せとて我先よ進み行と五六里も過つらんと思ふ時また逆風も吹もどされて是非なく風本よかへりけり行長が一手のみ難なく豊嶋に着岸しそれより心の鶏林の地も馳るといへども狂風みだりも強くして船漕出さんやうもなし行長の清正等がすてよ至るべきことを慮りければ大風を凌ひて進み行釜山海へと漕よせける斯て諸手は面々加藤清正を始として黒田鍋島小早川島津福島其外の諸將で段々の兵船共或は熊川に押入或は釜山浦につかんとて海上一面に押渡りけりこゝも藤堂佐渡守高虎の意はやき者なりければ他人も先をせられては口惜き次第なるべしとて唐島を心かけ夜半ばかりよひをかよ船を乗出し手勢わづかよ五百人を引分たりすては唐島表に着ければ朝鮮より指置たる番船の揃へたるを目かけ一拍子も船漕よせひたしとて乗うつる藤堂が運や強かりけん爰元も漕うかべたるの敵船の氣を奪はん爲の見せ船のかざりれみなりければかゝしき人数をも乗ざるゆえ意やすく時の間も百艘あまりの船を乗取り高虎は此勢ひも唐島浦へ漕付て島の人衆を放火して敵の首首ばかり討取り手勢をたらす陸へ

上り陣取ける味方の諸將の放火の火煙は驚き抜がけの者ありけりや急ぎ船を漕つけて味方の勇士をばげませよと船手の勢に申お及ばず数千の兵船我おとどじと乗出し逃行敵は番船どもを乗りけく奪ひ取る既其數百余艘よおよびける七人の目付もろとも諸手の大將の唐島は打あがりて暫く休息したりける七人の内より今日の取合と早速名護屋へ早船をもつて注進ある諸將すでも唐嶋又打上り一所を會合して今日の働きの藤堂が手一番なりと評議し重ねて朝鮮へ向ふべきやう如何せんと列座相談の半なるは加藤左馬助嘉明をつと立て雪隠は行体ももてなし我手は腐せる若殿原を一人招きて只今向ふ見えたる番船を乗取べし早々手船の足はやくんを二十艘ばかり用意せよとて我陣船を走らせ其身は何となき体よもてなし本の座よついたりける

加藤左馬助番船を乗取事

斯りければ左馬助が手の船の中より輕く乗出す早船二三十艘中よも伴圍右衛門直行の眞先よ乗出し水主よ下知して眞一文字は漕出すついで左馬助が切なる權七をばじめとして我劣らじと乘進む左馬助兼て相圖の事なれば早く其座と立上り船場をさして駈出しやがて船は乗移り飛が如くよ敵船の方へ乗かくる七人の目付をばじめ諸將はこれを見るよりあれ見給へ左馬助が軍法よ背いて危く一人抜がけするの若も仕損する事あれば味方のものゝ氣落とある早くこれをどいぬよと七人

は目付其外諸將の中よりも端舟をもつてこれを止め兼て抜がけすべからずと惣大將の仰よて約諾ありし甲斐なく正なふこそ見ぬいへ早し此元へ歸られよ一列に上よて約したるよ一人かゝりて克はづなれば誰かおくれいんと船はしらせて禁すれば左馬助使に向ひ仰尤よいなりまかしあがら我手の若輩はやりとぞ我等が下知も請中さすは軍法をすでよやふり得ばなかく人をして止めたる分よて合點いたす事ならず扱を我等自身よ是を止めにはまる追付をれへ罷りうへるべし抜がけの意いさゝか以ていひすと云捨てせり立て船と漕付る殊よさきより天氣はれ風なみこのころよし二里ばかり澳よかきあらべたる朝鮮の番船四十餘艘責り立て斤候船と相定め日本人の來るを待かけさせ夫より一里ばかり引下り大船數千艘幾重ともおく八重に鹽路を乗切て待かけたるハ數十里の海上よすべて蒼白の浪もなく紅錦紫縹の船やかた粧ひ立たる色のみなりかゝる大勢の真中へ味力わづかの小勢よてかゝらんやういなければども左馬助の不敵者よだしぬかれ諸將の船共口惜と思へる猛風よ浪を動じ我劣らじと手船くへ乗うつるより聲々よ水主ども後るゝな權取いかよと騒ぎわめくの偏よ雷鳴の如くよて物の分ちも聞えばこそ其間よ左馬助が船をも早朝鮮の斤候船の乗浮めたる真中へ猶豫會釋もなく衝かゝれば四十餘艘の番人ども弓弩鐵砲をそろへて一度よ打立ればなかく手易く乗うつらんやうもなく流石よ勇める者共も少し思惟よわゝるを

見て左馬助が與力ありける伴國右衛門直行水主とはげまし朝鮮國へ近寄とひとしく鎖の先よかざのつきたると敵船へ投込小縁へかけて力よまかせて手ぐり寄大太刀を振かざし敵兵二人と海中へ切ておとし其まゝ敵船へ飛乗當ると幸ひ切廻る左馬助の是を見て直行打すなつてけつと自ら水主を云かりつけ無二無三と敵船へ乗かけすでお向ふへ飛越んとす左馬助が同船も有つる小姓從主を討せて叶ふまじと左馬助が脇の下をつくとぬけ敵船へ乗うつる意の剛は見えつれども待設ける敵の中へ飛込よ何かのつてたまるべきやがて爰まで討れける左馬助是を見るより南無三寶といふまゝと鎗かつとり朝鮮船へ乗込左右に當り火花を散して戦ひば姪の權七つゝいて駈入伯父と姪と二人つれ前後は敵をとりに亂戦す主人先だつて如此に働くを見るより其手の兵士誰か一人臆すべき我先よと乗入つて斬るをも突をも少しもひるます我先よと兵船も取付おもひつゝは戦ひ乗入り朝鮮の兵防ぎかねて十艘ばかり乗取られ残る三十艘の船艦を回し後陣の同勢へ逃入たり跡は残りし日本の諸大將左馬助だしぬかれ無念におもひ我もつと手船も乗我よ人と罵る聲おびたいしく左馬助の乗取たる番船も綱大をつけて十艘ばかりの船を漕戻させける諸大將是と見ていよゝゝ氣をもみ一同水主とはげまし朝鮮勢數百艘までひかへたるを乗取るべしとて船をはやめ波おし切て押寄る脇坂中務安治久留嶋出雲守戸田民部少輔藤堂佐渡守高虎峰須賀阿波守が輩

眞一文字は押かゝる左馬助の元來藤堂脇坂とその中不和ある事故評議の時も口論せし事なれば今諸大將の見る前まで脇坂等も勝る功名を顯さんと第一ばんは乗浮べたる番船へ一文字は押かゝる朝鮮勢の先刻の敗軍と憤りて居たる事なれば左馬助が船と乗取ると相かゝりに漕向ふ弓銃砲も射立る事さあが雨の如し左馬助怒り罵り船とおしつけける時萩作左衛門打かざを以て引かけて乗入らんとおしけれども敵兵是を切拂ふて半弓と射かけしかり矢二筋三筋あたつて其身自由ならず左馬助も扱がけの若殿原を止める体にて乗出したる事なれば帷子一重は濫手拭ひて鉢巻したるばかりなれば矢三筋あたつて船を踏はづし海へ落入けるが元より早業よて落さずに船の艦へ取つき浮きぬえづみぬたゝよふところを左衛門左馬助が帯とつかんで船中へ引上置き敵船へ飛こみ一番乗萩作左衛門と名乗ける左馬助起上りものゝしやといふまゝと續て二番も乗入たり川村權七戸田三郎四郎宮川三郎左衛門土方長兵衛中嶋勝右衛門東勘兵衛數與左衛門も飛入て勇を振つて戦ふほどは敵船三艘乗取ける左馬助が乗移りし船は三五人の敵のこもて外は兵一人も見へざれば何方へ逃失けんぞ踏板を上見れば敵の船底へまのび入半弓を引そバめ待かけたり何れもすべさやうなく猶居けると左馬助眼をいからしてそこ退ひへ我入らんとすゝみ入る是を見るより土方長兵衛眞先も飛入しかつゝいてゝなゝゝ切て入當るをさいわひ切廻る敵兵叶はしと海へ



八十
飛入も有るひの討るも有左馬助も左りの股と射ぬかれて血の流るゝと瀧の如しされとも是と
こともせず猶敵船へ漕付んと下知して居たるところへ鍋島信濃守勝繁一番乗つけ來り扱も命去
らず左馬殿かきと大音も舉げれば左馬助よつこと笑ひ今日の働さいかゝ見給ひしやの自慢して立
たる有さま夜乃羅殺の怒るが如しかゝる所へ脇坂も乗付しかば兼て下知なる脇坂なれば左馬助大
音あげて嘉明が乗取たる明船多く浮座いとぎ乗移將軍へ注進し給へ油断ばしま給ふを脇坂ど
のと呼りければ安治物をもいわず怒りもだへ討死して左馬助も見せよ兵共と敵船の中へ面も
ふらず走り入る久留島出雲守通安の水主も下知して脇坂も先たゝんと乘來り朝鮮船へ乗りかづく
か其まゝ身をふとらして敵中へ乗入忽ち敵六七人と海中へ切こみ命を羽毛の輕きよ比し義と金銀
の重きよなぞとへ戦ひける此時藤堂蜂須賀等れ面々味方をはげまし攻戦ふといへども大船を乗廻
し半弓と射かくる事繁くなかゝ近づくと出來ずかの船を引かへしける故敵の勝よりの日本
船へ乗付く責たりける久留島もつゝ味方もあらざれば命かざりと戦ふといへども敵船より射
出す矢の數えれず其身もあたりてつぬみ此所にて討死す脇坂も今の最期とおもひ死力と出して戦
ふといへども敵の矢先よ射すくめられ雲時隣隣居るを見て朝鮮勢得たりや應と無二無三も責立る
脇坂が兵共散々となつて逃散たり安治今のはまでなりと甲をぬぎ太刀を抜船にたゝ腰にかけ近寄

敵を切拂へ〜自害せんとなしけるを家老が子引立てて、よて討死あらんまかるべからず一
ト先陸へ上らせ給へ某等變りて討死仕るべしと諫め無理も抱き上げて陸の方へ漕戻す安治無念の
涙となかせど詮方なく引かへす朝鮮の兵共勝よのつて日本勢と追まぐる扱久留嶋出雲守が弟村上
彦右衛門の外船も有て戦ひ居しか兄の討死と聞より涙をながし今の生て何かせん討死して追付ん
と家人とはけませ敵中へ眞一文字乗入ば敵船より射出す矢の霰れ如くなか〜面を向くへきやう
のなけれど主従とも討死と覺悟ときめし事すこしもひるまど敵へ船漕付耐を削りて挑み戦ふ
剛よばやれども敵より射る矢よかの〜深手と負既よ斯よと見へけるところよ左馬助はるかよ是
を見て角切角の三文字の船じるし久留嶋が一門なるべしあれ討すあを自身漕付打かきをもつて
かけとめ是と救ふて攻た〜かふ此時島津義弘手勢と下知して敵船と乗取事なかれ只眞中と乗りく
かなたこなたへ乗わけよ必ず船よあたるべからずと米幣とつてかけまはる嶋津が手の者大將の下
知よまたがつて右に往き左に往き南北よ突衝て一所よこれを聚らせじとなしければ大船のとりま
はし元來思ふ儘ならねば輕き船よせびらかされて大よ飽んで戦ひつかれ今日の軍は是までと湊の
方へ押かへせば日本勢も終日の戦ひよ將卒ともよ勞れしかば元の陣所へ漕戻し扱七人の横目衆將
軍へ注進とべしとて今日の次第をまた〜め此度の軍功左馬助第一番なりと注進す秀吉公聞召藤堂

が唐島へ押寄せたる功を感じ左馬助が比類なき働きを賞し脇坂が粉骨あるをそれ／＼褒感せらるゝの趣をかゝせて下されしかばかの／＼勇みすゝみ中も脇坂の一身の不覺家の取理なればすては切腹とやなすべきと志きり憤りふるを七人の目付れ人を強て押へ上の意もまたがへ給ひこれ忠なりと諫めし所へ如此の感帖と賜るゆへ辱きこと心胸を徹して其志金石の思ひとあり彌命を塵芥と比せんとぞ勇みける

小西行长釜山浦の城を攻落す事

かくて小西行长はすて海上の狂風をおし切て卯月十三日釜山浦に至りしかば士卒に下知して物の具つけさせ自分眞先馬を打乗駈上る宗對馬守とはしめ有馬松浦五嶋大村の面々甲の緒をしめ色めき渡つて我劣らじと先をあととひおめき叫ぶ有さまのいかなる強敵といへども面をむくべきとの見へざりける朝鮮よて日本人大軍よて寄せ来る旨先達て聞へければ李雄孟明伯と大將として剛兵二万餘騎よて釜山浦をかため居たりしか此有さまと見て倭勢すてよ寄たりとて上と下へと騒動し海陸にかりかさなつてひしめきたり小西行长是を見て大音揚て下知しける渡せや人々後を見するな馬の足たゞ船より乗移れ海中よて弓鏑砲放すべからず甲の鉢とたたむけて前輪もひらみて鎧とよく／＼ゆり合せよ人よも馬よも力を添よ味方渡らば敵半弓をあつめて射んづらん

敵の射るとも射かへすな相ためして鎧を射らるゝと曳／＼聲あげて押上る行長の眞先も進んで采幣と振つて手勢七千餘騎駈上る宗對馬守をはじめとして松浦大村の兵士一千二千騎むれ／＼乗連／＼二万餘りれ軍勢揃へな踏立驟たて、驚地よあつて上かける李雄孟明伯騎射の兵二万餘り矢ぶすま作つて雨の降る如くさん／＼射る柳川信重是を見て家老豊前守と唯二人横さままくり立て挑み戦ふ有馬修理太夫の自身母衣とりけ大くわ形の甲を着し黒の駒の太くたくましき打乗て孟明伯勢本陣へおめいて馬を乗入たり有馬柳川が兵士何かのもつて猶豫すべき一文字も駈破らんと捲立て切て入朝鮮勢死力を出して防ぎ戦ふといへども日本勢急よもみ立しかの副將たる李雲一をはじめ能兵共七八人忽ち討死しければ朝鮮勢叶のじと引退くを遁とまゑと日本勢へ地けふりを立追うけたり朝鮮の兵二千七百餘人討れしかの町中へ引入かねたりしところよ孟明伯が勇兵八百人面をふらずどつとかへし釜山浦の町口碧巖寺の樓門を楯と取て火出る程戦ひけるこれよつて朝鮮勢もくらき命を助かりて釜山浦の城へ逃入り門のくわんぬきをさしうためたり行長の手合の軍よ打勝て城外の町家を焼立小高きところよ打上り暫く息と休めけるが行長采幣と振て城へ駈りけるぞ一方と明三方より攻付よと下知すれば先手よ備ひし比々左近右衛門小西若狭守急よかゝり太鼓を打立ければ大手よりの松浦法印をはじめ有馬大村の面々三千五百餘人弓鉄砲をつる

べかけ息もつかせず攻たりける扱行長後の高山に登り上より城中を見ろし數千挺の鉄砲をもつて雨の降る如く打かくれば城中より朝鮮人みちくたる事なれば玉一ツも二人三人ッ、討れ上を下へと騷動す大手の大村五島松浦の人々鬨を作りておめき叫んで攻ける故城中防ぎかねて見へたる折柄大手の門際の塀より行長が弟小西主殿助種長の十六ふしの繪鶴と金の切裂のさし物をさし一番は乗上り大音あげ一番乗り小西主殿助なり後陣の人々見たるかと呼はる二番に五島半右衛門太田喜太夫二番乗と呼り乗込バ續ひて同勢我先よと乱れ入城兵の今の叶はじと西門より逃出んとせし時行長七千餘騎を下知して山上より落しかけ勇をふるつて捲り立しかば大將李雄の馬も鞭をうつて熊川さして落て行孟明伯の大音上國家士卒を養ふ今日の爲なり身もつて國に任する者豈此難を見て逃んやと士卒をばげまし踏とまつて戦ふところよ小西が家人吉川三太夫馳あらんで馬上あがら無手と組しが両馬が間々堂と落まばしが程のねぢ合といへども孟明伯大力よて三太夫と取て押へ首かさ切て立たるどころよ小西與左衛門駈來り後より孟明伯が首を討落と朝鮮の兵は是を見て何かのこらへ戦ふへき右往左往と逃散を追かけ追詰首を取事三千五百七十三級生捕二百十二人なりこよて釜山海の口一番は破れ近邊の老若男女おそれ悲しみお思くよ離散する事只風よ木の葉の散る如く其騷動大かたならず行長の手合の軍は打勝て沁地よしと大は歡ひ

暫時人馬の息と休め扱生捕の狄靴を呼出し近邊の事を尋ねけるよ通辭共申けるは是より三十里乾よあはつて東萊と申城是あり李元翌兄弟と牛翼といふ大將一万五千餘騎よてかためいといふ行長聞て宗對馬守有馬修理太夫よ向つて今日ハ粉骨をつくして比類なき働きを以て大功ととぐる上ハ今夜のこよて休足すべきあれども釜山浦の城破れぬと聞へば東萊よても聞おじして居るべし日數を経なば敵よも防ぎれ備ひとなすべし此圖をぬかさ急ぎ東萊を攻取名譽とあらんさん多くの首を日本へ渡し將軍の汚感よ預からんいかよと有ければ宗有馬も此義まかるべしと同まければ急ぎ家人どもへ觸てその用意せよとて兵糧とつかひ馬よもの飼し日もやうく未のはじめよ成にけり諸人勇み進みて軍馬をはやめ急さし故日本道六里なれば二時半よ打て東萊よかし寄ける此城よも朝鮮人二万二千餘騎よて守りしよ小西行長七千餘騎つゞ勢五千餘騎三方へわかれて攻かゝる釜山浦に戦と聞ておそれ居し事なれば大將牛翼一番は落行ゆえ李元翌兄弟も續て城を落たりける行長が舍弟小西主殿助長種ならびよ木戸作左衛門敷重手勢を引連追かけたり朝鮮の兵共攻立よれて右往左往よ乱だれて逃散ける主殿助作左衛門敵を討こと九百七十五人討取つぬよ東萊とも乗取ける行長心地よき合戦を両度して則ちこよ陣を取大鑓をたきて人馬の息を休めける行長の通辭を呼んで是より何れの所よ敵あるやと尋ねけるよ通辭の答て曰く是より都への両道よ分

る城もあまたい中よもこれを去る事五百四十五里にして忠州といへる名城有て嶮第一の要害
て牧使の王僧林と成允門兄弟并は防禦使の權應珠右兵使は金應瑞京畿道都躰察使は柳成龍を大將
として軍兵七万餘騎よてこもり兵糧なども十分よ入かき王城よても此城と頼と任由道の程の九日
路御座いと云ける故さらば此所と陣所として後陣の續くをまつて押行べしとて東萊ふ陣を取て後
陣につゞくを待たりける

浮田秀家抜がけして小西を救へんとする事 附 加藤清正熊川よ着事

小西行長の物軍よ先達て釜山浦東萊は兩城を攻落し其勢ひ破竹の如く猛威と振ふ事あたうも項羽
が感陽よ入よ似たり扱また備前宰相秀家の第八番の備よ有けるが小西が先陣よ居たりしが抜がけ
せしを心元なくおもひれ家老戸川肥後守長船紀伊守明石掃部等呼てゆされけるハ小西攝津守抜
懸なし敵地へ打入しあれば若討死なす時ハ日本勢の弱みとなりまた不便の次第なれば我是より兵
と進めて行長を助くべしと有けれバ戸川長船明石の人々承り攝州事ハ君の傍寄せ子よて他よ異な
る義なれば加勢尤まかるべしと云ける故船奉行と呼て密よ此みなとを忍び出釜山海へ急ぐべ
しと軍法を定め卯月十四日の晩景よ壹岐の風本を出帆して對馬に國をば横よ見て九十六里の渡り
を打過て卯月十六日の東雲よ釜山浦へぞ着よける小西が郎等結城彌平次吉田平内此城を守り居た

りしが急ぎ出向ひは渡海目出度奉存る旨や上る時秀家云やう先攝州の働らきのやうすを具よ語り
い得連有のまよ語らせ聞て秀家感涙と流し比類なき働き當表第一の功名たるべし我等加勢よ渡
海の旨と飛脚をもつてやつらへすべしと有ける故急ぎ使を仕立東萊へぞつかへしける其文よ曰く

我等行列と破り渡海いたしは義手前心元なく存今朝着岸せしめは釜山海にて比類なき
働らきは手柄誠よ
御當家無二の忠節よい明日其表へ參着せしむべき間万端や

談べくい恐々謹言

四月十六日

小西攝津守殿

備前宰相秀家

小西攝津守行長の此書を披見しなめならず歡び喜悅の眉をひらき誠よ千騎万騎の加勢より大よ
力を得たりとていよく猛勢と振ひける去程に加藤主計頭清正ハ小西行長よ先と越されし事を無
念よかもひ行長が進し跡より進まんも心うき事よかもひ四月十三日ハ釜山浦の外洋より熊川
へ船をつけ陸路よ登つて行長が軍功の大あるとを聞より彌大よ怒つて今日より以後他人をして先
鋒となさしむべうらず我一人是をなさんのみといふ清正ハ餘りよ急ぎて押わたるが故馬を乗たる
後船よもいまた着岸せざるよよつて馬よ乗らざる侍とも五十人余りにおよぶゆゑ爰よ後船をや待

へき又驚馬ありとも尋ね求めて是を馳せて乗べきやと評議區々なるところに船頭ももの中やうな
 かく、昨今の風波よて、五七日の間、後船も漕を出い、んと存もよらざる義、一向、先へは
 急ぎあらんこそよかるべけれといふよつてさらば、むべし去ながら侍とも歩行よて、叶ふべか
 りずとて在々所々へ打入て馬とつて乗んとする、所の者荷物を付て自らも打乗て退つると見へて
 馬一疋もなかりけり所々、有もれ、の絆を捨たる牛のみなる、見て是を取來り、歩行の達者ならぬ者
 は、是に乗て急げともはかの行ぬぞ氣の毒なり、奉輩中の若殿原口のわろきが集りて、時の座與のやう
 は笑つていふ方々の今日の鉢たらく、騎馬の人と、中されまじ、騎牛衆とや、中さん何時も馬乗よりハ
 氣遣なく、後まさがりて、座とらん、左禮言、うしろいふといへともはじめ、此方も聞て、行ける
 が餘り、穢言のそきぬれば、牛乗とも腹を立てて、各、初めよりさま、のゆなぶりを左禮言とのみ
 存せしが、實お我々を嘲らるゝとこそ聞へたれ、誠は左様、おもひれな、いで牛に乗たるか、遅きや馬
 は乗たるが、早きや乗くらべ、致すべしと、既、動靜、および、あんとなしける、よより家の老臣、これを聞
 付、悪言云たる者共、牛に乗たる者の方へ、託言させやう、無事よ、ごんたりける

加藤清正慶州と攻落す事

加藤主計頭清正ハ小西又先を取られし事を、心うくおもひ、如何もして、敵、出合、小西、又まさる功名



なして此無念を散ぜん軍馬を急がせ七八十里の道を四月十三日の暮合ふ熊川を出同十四日辰の刻に至り爰て見渡せば家數三三万軒もあらんとおぼへたる地も山城郭雲よそびえて見へければ熊川にて生捕し朝鮮人又問ば慶州と申てむかし高麗の王建が住し古都なりといふ清正小踊りして大に歡びさらば攻落すへしと押行ところ慶州の東五町余り二里三りつゞきたる松原あり其所は旗百なされ程ひるかへりて勢のはぎ四五万もあらんとおぼへたる敵扣へたるが今清正が押來るを見て備と出してかゝり來る清正朝鮮人又問は彼者答へて是は此口の番手とて五人の大將とて權標李福男高彦伯鄭紀龍撲殿長の五人の兵といはんといふ清正の先手加藤清左衛庄林隼人備と出して弓鉄砲を打かけ戦ひをはじむ鍋島加賀守直重が先備鍋島十左衛門同平五郎五千余騎にて左りの川を渡り松原に橋を過て町口へ押入らんと馬煙りと立て駈來り敵を右に見て押廻さんとあしける時朝鮮の高彦伯の無双の剛將なれば手勢一万余騎を下知して鍋島勢もかけ合せ半月を雨の如くも射りけ咄と喚て突かゝる鍋島平五郎成澄駈立られ五町ばかり敗走す朝鮮勢も乘て追かけ來る清正が左りの先手加藤右馬允九鬼四郎兵衛廣高等弓鉄砲をもつて陰よとち陽も開きて矢種玉藥をおしまず雨の降如く散々も射れども朝鮮人の馬上の達者の兵なれば討さず射れども事ともせず眞黒くなつて押くる此時加藤清兵衛あかねの切裂のさし物にて馬より飛下り十文字の手鎗

を引さげ眞先は駈出し、驛地に突かゝり人馬のきらいなく翌横まかけ立勇を振ふて力戦す此給先も廻る者の人馬とも助るの稀なりけり庄林隼人は見て丹頂の立鶴の書たる白七子の陣羽織を着しかす毛の馬は打乗手勢二十騎ばかりを眞丸は備ひ群がり立たる敵中へ會釋もあらず諸鎧を合せ一文字は駈つける朝鮮方二方へさつと別れて半弓を雨の降如く射かくるさへも庄林隼人の大剛の兵なれば少しも恐れず高彦伯を討んと心ざし東西は駈通り戦ひける程は既も間近くあるとひとしく隼人の馬をおさらせ馳かゝり高彦伯は無手と組で兩馬が間も倒と落上を下へともみ合ける扱また山口與物右衛門大木土佐守加藤與惣衛門三千余騎一度どつと駈入るゝ大將清正なよかへもつてこらゆべき采幣をおさめ大長刀を取て先手討とな續けや者共とて自ら眞先は敵中へかけ入れれば旗本は兵千余騎主と討せじと喚てこそいかゝりける流るゝ血の池をさし喚く聲は天地をひゝかし攻戦ひける庄林隼人のつゝぬゝ高彦伯と取ておさへ首と取てさし上しうゝ加藤清兵衛も馬引よせ兩人とてお打乗て清正の旗本勢へ馳加へる扱清正は鄭紀龍が勢と駈合戦ひしが日本無双の清正は何かへもつて敵とべき終は打崩され右往左往は散乱と相良宮内少輔も八百余騎もて權標が手を切崩し直は清正が手へ馳加へり逃ると追ふて進みける鍋島が先手も是も氣を得て取てかへしけるが加賀守も旗本をおし立黒煙をあげて進みける慶州の町口まで撲殿長李福男一万計の勢とも

つて踏とゞまり弓の兵數十人を家の上へ登せ兩方より矢尻を揃へ散々に射る加藤與兵衛門吉村吉右衛門二千余騎面もふらず進とつゝ鐵砲を先も立て打とくめ色めくとまると得たりや應と加藤與兵衛門只一人眞先は駈出鎗を一番鎗と名乗て攻戦ふ大將かくの如くあれは此手の兵士何りの少しも猶豫すべき鏖をかたむけ一度もどつと突かゝる互ひも喚く聲天地もひゞき地煙りと立て桃み戦ふ清正馬上も立あがり大音あげ清正跡もつゝくぞ引な人々進めや面々と鎗おつとりてたゞき立眼と怒らし下知しける主計頭ははげまされ死を一罌も輕んじ曳や聲を出しても立しかば一万余騎の朝鮮人突立られて大手の門際まで七八丁のあひだ足をもちためず突立られ我先よと城へ逃入り上を下へとかへし騒動あし橋より落る者數をまらず清正が兵どもつゝぬゝ城へ攻入しかば撲殿長李福男も防ぐも及ばず這々城へ逃入門をも閉ず狭間配りもせず周章して居ける時清正良の角楯へ雨の降る如く火矢を射かけたり折節風はげしく吹うけたれば忽ち楯へ火うつり所々へもへつき炎雲をまき東西へ焼ひろがりければ城中の兵共この何とせんと戦ふ兵一人もなく唯身をのがれんと先を争ひ西門より逃出る事さながら堤の切れて氷の出るが如し大將の駿馬も乗りたれば乗ぬけくゝ浴たりしが鄭記龍の追かけられて險阻をつたひ左りの山を志し落けると相良が家老犬鐘兵部少輔おしあつて引組兩馬が間も落重なり上と下へと組合けるが鄭記龍大力もて兵部の下も組

まかれけるが兵部もえれ者一尺ばかりの正宗の脇差をぬき鄙記龍が鎧のすき間を力まかせてきたるかよさしければ何かのもつてたまるべき了得の鄙記龍の眼くらとすこし力のゆるむところを兵部の得たりと下よりはねかへし鄙記龍が首を取てさし上たり討取る首級をかぞふるよ一千二百五十二あり城中城外の家は火移り三万軒よ余る家数一日一夜は残らず炎上してけれは清正の惣軍をよとめ山よそふて陣と取りて人馬の息を休めける即秀吉公へ此おもむきを注進せし上へさとして箕部金太夫よ命じ合戦のあつましと認め鍋島加賀守相良宮内少輔等と連印をなし家人庄林喜右衛門と使となして日本へ行しむ庄林喜右衛門の急ぎ支度をととのひ注進状を箱よねさめ是を自ら首にかけ両三人の供人と連釜山海へ出早船よ打乗波おし切て船を急がせける波風の難く肥前の國へ着しかバ夫より京都よさして馳登るところよ筑前國姓か濱よて秀吉公名古屋へかし出し給ふよ行途則ち途中ながら供れは御衆よ附て清正の注進状をさし上るところよ小西攝津守行長方よりも小西平左衛門を使として釜山浦東萊兩城よ乗取りの旨や上げけれは秀吉公此注進状よ傍覽あつては感悅淺からず兩人の使の者どもよの羽織一ツ宛下され小西攝津守此度釜山海東萊兩所の働き比類なき次第なりとて御感状よ定俊の傍太刀栗毛の馬一疋相添へ下し賜りけり清正よの大躰の傍書なり扱清正の慶州より密陽大岳よ經て全義館へ打出忠清道を平かしよかして王城へ

攻入らんと士卒をばげまし道よ急ぎて馳たりける

是より黒田長政金海稷山を攻後藤又兵衛伯子顔と討取の働き栗山備後一番乗りの功名また加藤清正小西行長先陣争ひ清正龍津といへる大川を越る條の次よくはし

黒田長政金海稷山城を攻とる事

諸黒田甲斐守長政の加藤小西があとを踏て進みし事故珍らしき戦ひも出合す將士とも無念よおもひいかよもして敵を破つて功名を顯さんとおもふて進み行ところよ東ぬきよ北よあたつて金海城と云ところ有朝鮮の兵馬使伯子顔といへるを大將として多くの敵兵こもるよし聞えけれは大金よ歡び手兵二万人討金海城へかし寄る先手の栗山備後利安なり此栗山のかくれなき勇將あれは金海城へ寄るとひとしく町々を破り風よより火をかけたりしかば城中より是を見て伯子顔兵を引て突て出日本勢を退散さんと力を尽して挑み戦ふ栗山が勢の中より村上彦右衛門と名乗りて一番の鎧よ入朝鮮人を四方へ突倒し八方へ追なびけ攻戦ふ故朝鮮勢四度路よなつて見へける時大將伯子顔大よ怒り東西にあたりて血戦し士卒よ下知して人數をよとめ城中へ引入らんと栗山が兵の附入にせんとあよつといて押入を伯子顔の此所を破られては叫あひじと一世の勇をよつて力戦と栗山備後の真先よ進み大太刀をさし鬪敵中へわつて入千變万化の手をくだき勇戦す此時後藤

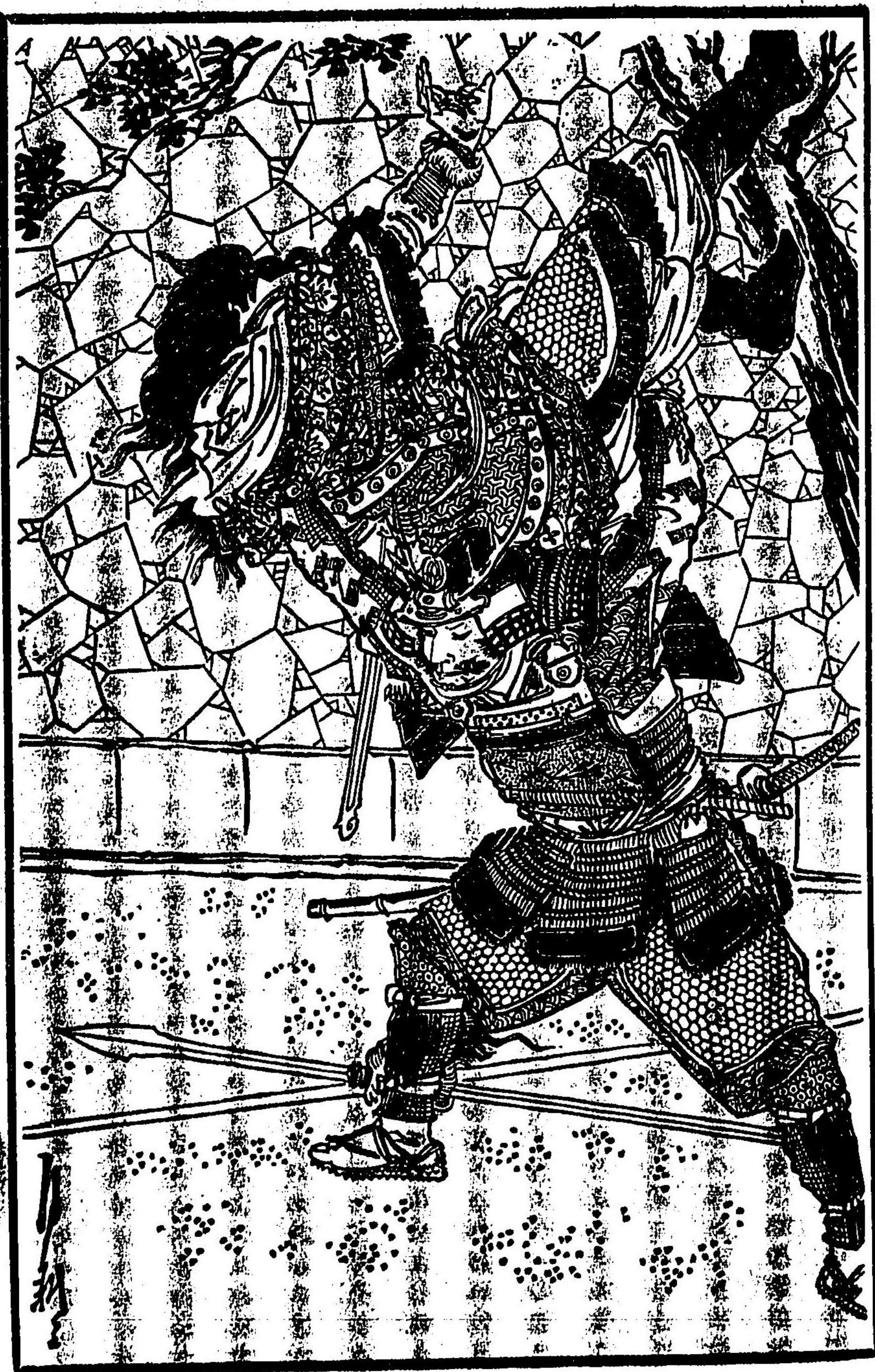
又兵衛基次の長政の旗本は有しが先手の戦ひいかがあつんと只一騎にて駈來りて戦ひの有さまを見て居たりしが今栗山一番は城中へ乗入を見て何か少しもこらゆべき一文字に馬を駈て城中へ駈入當るを幸ひ捲立て攻付る城將伯子顔のとも叶はざるとおもひよき敵とさしちがひ討死せんと覺悟をなし死ものくるひは打廻る基次此有さまを見て此敵を討て旗本への土産よせんと伯子顔と目がけて進みよる伯子顔も基次が武者振と見て馬を寄せ組んとす基次も得物投捨無手と組しが忽ち両馬が間を堂と落上を下へともみ合しが基次面倒なりと惣身力腕を入ヤツト聲をかけ伯子顔を引かつき力よまかせて投出せばあはれむべし伯子顔のかたはらなる石は當りて脇腹と強く打ければその儘息のたへたりける此有さまは朝鮮人かどろき恐れ右往左往に散亂す黒田勢の城中ふこも入即時は城中へ火とかけ焼たてける敵を討こと大將伯子顔をはじめ一千四十三人首と取たりける今日栗山備後粉骨をつくして此城を攻落しけるは栗山が兜の杵杷の葉の立物の両方へ矢三筋射立られ打かけたれば其有さまゆしくぞ見へたりける扱討取ところの首どもの鼻をそき酒よひたし日本へ渡しければ秀吉公感有て清正行長同やう首數至來大慶と思召との抄書を下されける長政の金海と陣と取人馬の息を休め扱後藤又兵衛村上彦右衛門を呼てやされけるは其方ども手勢と引て船に乗川上へはたつき川の近邊なる在るを放火しいと有ければ兩人共命を請四百斗

の勢を卒し船は乗り川上へ至りて所を放火しけるは川の西一ツの砦の城見へたり通辭と呼出し所の者も問へば稷山といへる城なりといふ金海城の落人もみな此城へ逃入いと云ければ後藤村上下知して鉄砲の兵を退手へさし尾筋を取切落行先をふさきて攻たりければ敵兵は東西へ逃南北へ通れ落行ける敵を討事七百餘人黒田勢は大勇み此勇氣にぬけざるうち都へ打入働くべしと清正行長があとを追ふて王城へと急ぎける

小西行長忠州を攻落す事

扱も小西行長の東萊は陣して居たりしが加藤清正黒田長政大友義統島津義弘等とはじめ日本の諸大將大かた渡海せしよし聞へければ行長おもふやう後陣の勢至りて打こみれ軍のさのみ功名なるまじ急ぎ忠州城と攻落し大功をたてんと五月二日の午の刻は東萊を打立夜を日よつぬで急ぎけるはさよ五百四十里(六丁一里)を五日よかして同月六日の夜丑の刻は忠州城へ着よけり此城は忠州府をさる事三十里なり是の東萊を押來る日本人の府中へかし入らん事と恐れて要害の地なれば此所は城と加まへたり頃五月六日の事なれば月宵より入目ざしもえれぬ闇夜なれば案内者を先よ立汗馬の鞭を加へし程は鶏のなく聲聞ゆるころ城の東門よかし寄先手わけをぞまたりける宗對馬守其勢五千餘騎城の巽の田の中をまはり南の山よつきて細道有けると通りて南の木戸へ向ふ松

浦重信法印三千餘騎よて城の長うづぞちの小川おがよを渡り葛蒲林くわふばやしを五町ほぞ渡り城の北門きたもんにつく此城朝鮮ちしやんれ
 都みやこをさる事わづか百八十里なれば若王城わかしわじやうより後卷うしろまきあらんかどて有馬修理ありましゆり大夫治郷ちやうじやう大村新八郎おほむらにんぱち豊成とよなり
 五島若狭守ごとうわかさのりやう近政ちかまさの人々三千餘騎よて城の西門さいもんより十町ばかり押出し府中ふちゆうよ向つて備そなひたり行長ゆきながの
 手勢てしやう七千餘騎大手おほてへむかふ扱諸手さくしよて一度いちども関せきを作り太鼓たいこを打貝うちかいとふき立鉄砲てつぱうを打かけ攻せうかゝる城中
 よの七万餘の兵へいあれば大勢おほしやうをたのみ又釜山浦かまつかいより道の遠とほきとたのとしていさゝか油斷あぶらだんして居た
 れば此音このねよおどろき如何いかんせんと東西とうざいよさまよひ騒さわぎ親おやとも子こをも願ねがひ我先われまへよと逃のがれ行大將ゆきだうしやう王僧林わうそうりん
 并ならぶ柳成りゆうせい龍念りゆうねん應陽おうやう成允せいゆん門等もんとう鎧よろいばかりよて防戦ぼうせんしこゝを破やぶられての後日人ごにっじんよ面おもてを合あはせられと七頭しちだう入い
 倒たうして戦いくさふといへども城中じやうちゆうの男女なんによ上うへを下したへと騒動さわどうし防戦ぼうせんの妨ままたげとなりて見みへたりける小西こさいが兵日
 比ひ左近ささ右衛門ゑもんの赤あかたんくの輪わぬけのさし物ものよて櫓やぐらの上うへへ乗のり上あがり大音だいによ日比左近ひびささ右衛門ゑもん一番いちばん乗のりぞ
 つゞけや〜と名乗なをりつゝ飛とびこもしかば小西こさいが兵共へいども我劣われせうと乗のり入いけるよよつて三さんの丸まるを心乗取こころをりた
 り朝鮮勢ちしやんせいのちもひ〜よ落行おちゆきける中なかより成允せいゆん門もんが弟成あにせ義川ぎせん柳成りゆうせい龍りゆうが嫡子ちやくし柳延りゆうえん等らう邊兵へんべい五六千ごふせんをばげ
 まし取とてかへし得物えものを以もつて防よせぎ戦いくさふ有ありさま勇ゆう々々しく見みへたりける行長ゆきながのまの皮かわの鎧よろいよ銀ぎんよて駕か
 せ裾金物すそかねものを打うたるよ草摺くさすりながよゆりさげ鉞やぶがた打うたる唐からの頭かぶの兜かぶとを着きし銀ぎんの天月てんげつ出いしたる母衣はろを
 かけ將軍しやうじんより賜たまはりたる大黒おほくろの馬うまよ白泡しろあはよかませ陣頭ぢんづうよ進まり勝負しやうぶいかよと見て居ゐたりしがさつと



必づき伊賀のまのびれ百人の内二十人計と呼出し搦手へ廻し風上より火をかけたければ其煙城中に乱れ入はのふを吹かけたれば城兵何かの以てたまるべき色めき立て騒動す行長の自ら馬印を振てすいや此圖をぬかすな進めくと下知をなし惣軍一度は大浪のげきする如く攻かゝる成義門柳延等心の剛まはやれども崩れ立たる味方あれば今の戦ふ力なく成義門の自ら劔を廻し我いやしくも國の臣として任をあづかるは只今のためなりとて四方八面を駈めぐり死ものぐるひも戦ひけるどころよ小西が兵士竹内喜兵衛馳かゝりつゝかゝ切伏成義門を討取ける柳延是を見て最早是までなり敵の手も死せん事無念なりとて劔を取直し自害して死たりける従弟なりける柳石虎蘇源も一方を打破りて落たりけるが大村新八が勢も退かけられ二人とも討れたり残る將士ののみを皇城さして落よける收使王僧林の大敵の中を切ぬけ普州城へぞ入よける小西が手へ討取首數都合九千二百十三とを聞へける味方よも手負死人數百人と記したり扱又加藤主計頭清正の蜜陽大丘府をかして全義館へ出忠州府に至るよ此所もみな明のきたれば殘居たる朝鮮人を生捕て尋ねけるは是より奥へ日本勢打入たるやと問けるよいまだ一人も通らずと答へける清正左あらば此所は陣取後陣を待べしとて忠州府を兩日逗留せられけるよ同じく八日の晩景よ小西行長が一組忠州城を出府中よ來清正と一手よなる小西が勢ども道く乱妨なして取しと見へて木綿布なぞ數千反牛馬よおの

せて來りしを清正見て大に怒り大眼をもつて小西をはつたと白眼人多き中よりえらみ出され異國の先手を命ぜられし貴殿の軍勢かゝる見ぐるしき有さまや有べき都へ入らば絳羅錦繡はいふよふよばず金銀財寶充滿たるべしかゝる木綿布などよ心とかけける兵士よて此後の道の妨げとなりて戦ひの程もおもひやたるゝなり楚の項羽が鉅鹿に戦ひし船をまづめ釜瓶を破り家財とやき士卒よ必死をまめしてこそ戦ひ勝つて王離を擒とまたりと史記よも見へていへば今征伐のはじめみかく乱妨と先だてたらん其だもつてまかるべうらす残らず焼捨られよと云ければ行長も理よつめられ汗を流して赤面し二万計の兵共道々奔ひ來りし品を山の如く積置一時は焼捨ければ小西が士卒の折角はまで持來りて焼捨るゝのみならず清正も笑われしを無念よかもひそしめ者こそなかりける叔清正行長の忠州府を陣を取て後陣のつゝくを待ところよ黒田長政をはじめ後陣の面々かひくよ忠州よ着しける此時すでは朝鮮の平安黃海忠清の三道も破れ慶尙全羅の二道も危き事且夕よあり朝鮮八ヶ道の貴賤老若上を下へと騒動し過半落うせければ慶尙全羅の二道も兵の籠る城とて十分一もなかりける日本の諸將此二道へ軍を進めなば驍のすして味方のものと成へきを日本勢のまづ王城と取べしとて忠州よりひつ押進みける

朝鮮王都を落る事

扱また朝鮮の都めての所々より注進あつて平安黃海忠清の三道も破れぬ日本勢の鋒先つよくあかしく敵しがたしと聞へければ京都の民間我先よと落行けるお同ぞく朝鮮の王宮も惟よ京都を開くべきよ評議まぢくよして大臣と始としてとだりよ慌つるばかりなり是より先理馬金應壽首相某等密々よ相談し京都を落て王都を西よ幸あるべしと定め置その事いまだ外朝に誰も知るものあかりしを都承旨李恒福等柳左相成龍が忠州の軍破れて歸りしよしを聞て成龍が方へ來り首相某國をあやまると如此あり請ふらくは一族の衆中ととも奏聞し此京城を棄給へ他所へ臨幸あるべきの失策なることを諫め奉らんと云はば領府事金貴榮等中は於て憤り諸大臣ととも進んで請ふらくは京城を固く守りて倭賊と防がんと謀り給へ京城を捨んとす等へ全く是小人なりかまへて其言を執たまふべからずと皆一口に諫め奉る王李沿の一旦彼等か意とあだめんと宗廟社稷こよ有朕これをすて、將よ何方よ往んや心安くおもふべしとなだめらるゝよ諸大臣一同よ有難しとて退出せり此時よ京城を警衛すべき人なければ里民をかり立て諸役所の小奉行人或は醫官巫祝の輩よまでを相集め城堞を分ち守らしむそれさへ物人數三萬餘よ過ざれば城を守る人兵の僅よ七千よの足らざりける元より烏合の集り勢闘戦よ心なく間どうかゝひ何とぞして城中を逃れ出んとおもふばかりの者共なり其中よ官軍の歴々上士といへる輩の此等が隊長となつて有ながらそ

の下奉行と云合せ金銀をいだと兵卒あれバひそかよこれを放ちやるもまた多かりける軍政の懈り弛べること如此なる時節にあたり滿城の騒動大かたあらずして去バしも座となら者もなし扱五月八日の初昏よあつて諸の宰官大臣を召集め倭賊の寄來ると急なれば一先京都出てひらいて重ねて寇を退げんと朝鮮王李昭の宮の東廂よ出玉へて地に座せられ燈燭と張りて陰謀ある一族の人々よ河源君河陵君侍座たり時よ大臣某申すやう事勢すでよこよ至れり恐れながら車駕暫く平讓よ出て幸ましく其後大明の天朝へ兵軍を請ひ給へまかして國郡を收め給はんよ何の子細かひんといふ掌令權依の進み出大音聲よ呼ひるやう京城を固く守るの外量見あかるべし若京城をほひりきあらんと失策よ其詞はなはだかまびすし其時柳成龍これを靜めて危亂の間云ども君臣の禮なんぞ亂らん汝が体よかかろす暫く退て啓すべし俠呼ひつて重ねてのしり左相もまた此言を出すやまかろバ公もななく京城よ棄べき同意よやと云柳相云やう權依が言はなはだ以て忠義ありまかしあがら事勢よ於てまからざるのを得ずまばらく京都よ開きあるべきかど其よつめて諸王子達を諸道へ分ち遣し人數をもてる諸將の欽めと定めて事急なるよかよんで召集め王事よ勤め給ふべし世子のまた汚瀆よまたがつて汚行啓あるべしと奏するよ評議はじめて定りけりこよあめて臨海君の威鏡道よ行給へ領府事金貴榮漆溪君尹卓然よままたがふ順

和君の江原道よゆくべし長溪君 黃廷或 護軍黃赫同知季既等これよまたがふ赫が娘の順和れ夫人たり李既のまた原州の人たるゆえ同じく是を遣られける時よ柳相の留將として城よのこれば首將をはじめ宰臣數十人汚瀆の汚供なれど柳左相成龍よ汚供の命も出ざるを政院より啓して今度の汚供よ柳成龍なくんばあるべからずと申すよ是も汚供と定りけり内醫趙英旋政院の吏申徳麟が等十餘人の者共一度に呼ひつて大音聲よ京都を棄べからずとまバしハ鳴も靜まらずかゝる所へ又々所々より注進あつて日本の軍勢あひひ人数まして都へ責入よし聞へけれバ宮中また騒ぎあひの庭内の衛士ども何はまか盡く散ぢぬれば更漏も鳴さずところよの燈燭も無しし故やうやくよ宣傳の官廳より火炬をもとめて汚瀆を出さんとあすよ禁軍方々へ奔りうくれ供奉よ備ふる人もなし上下みだり騒ぎ立て一向よ逃げまぢひバ或ハ人よ衝仆され或ハ人と踏仆し互よ人々争ひてみだりがはしき言りなり羽林衛の池貴壽といへる者汚瀆の前よ過るを柳左相是とよめて汝が輩多年朝恩よ浴する身ながら危急の時よ至り忽ち君よ忠ある心を忘却するやと議よ以て是よ責れバ貴壽聞て大よ感ぢ取て力を盡さらんやと答へしがその邊をうけ走り同類二人よ呼來り供奉よ備ひたりすでよ汚瀆も景福宮の前よ過るよ市街の両邊の男女の哭聲あびたゞしきハ聞よたへざる哀れさなり承文院の書員官李守謙といへる者柳左相が馬の鞋とひかへ院中の文書をバ

當に何とかいたすべしと問ふ其きびしく關したる秘すべき書のみ取り來れと答ふる守謙の涙が
 たりと馳かへるは駕の程なく敦義門といへると出て沙峴といたるころはひまの既と東方も明なん
 とするよ後の方とかへり見れば城中の南大門の内大倉の有方と火煙おこつて燒あがり煙のすでも
 空まあがれり是なんいまだ倭兵の放火するよりあつて大倉は秘すべき物と倭兵の手は渡すべから
 ずと守謙等自燒するところをあらはれる沙峴と越えて石橋に至れる時雨稍く降來る京畿監權等
 も追付て涉供よまたがふ碧蹄驛に至れる頃雨をきり降りければ供奉の上下一行は沾濡て行をす
 くむべきやうあかりしかばかくての叶ふべからずとてまばゆく驛舎よ入て休息すれどなかく雨
 の晴べきやうなけれをまた涉駕をすゝめらるゝよ是より衆官跡よとまり都城よ還りけるも多
 かりければその中よ侍從臺官の官人のすべあるもの共も打まじわつて心くよ逃出るゆへ供奉の
 族次第くよ減少するこそうたてけれ扱また順和君も江原道へと落給へし是も同じく供奉の
 士一人二人と遁れ行今やうやく十餘人のみなればかくて道の程もおぼつかなしとて道をかへ
 て臨沂君の落給へし咸鏡道へと落給へける

加藤清正小西行長先陣を争ふ事

偕も日本の諸將の忠州よ會して是より朝鮮の都へ責人べき評議をしける時清正進み出て是より以
 後我必ず先陣ならんといふ行長あざ笑つて云朝鮮國は先陣の已よ日本にて大將軍秀吉公の決定よ
 て我等是を承るところなり今若私よこれを改めんとせば秀吉公は捷を破るよ同じ我決して相
 きたがふ事と得ずといふ清正重ねて云法令たとへ然りと云ふとも惟前陣のその武勇次第よ任すべ
 きか行長怒つてまさを清正我と汝と武勇よ於て何ぞ劣るべき此度の先陣汝が云ところの武勇よ
 よつてなとなすべなして見給へと既よ兩將眼の色かいつて憤氣をなす兩手の諸士左右よ詰よせ下
 知あらば討てろらんと言を握り手ぐすね引て眼をくぱりて待ちけたりすや事の出来ぬと見つ
 れば黒田鍋島が輩ら兩方にわかれて是を制し松浦福島長曾我部毛利立花の諸將左右よ和談をなさ
 しめたり島津が輩よ決して是非とも先陣の太閤の決定められ行長よ定めかいて他人の争
 ふべき事よあらずまかりと云ながら行長すでも所々の城を扱とられたる上は其手柄振群ありま
 かれバ今王城よ入るの功よかめて他よゆづるともかたきよあらずこれよよつて我々の存するよ
 ハ清正行長の兩將相分れ兩道より兵を進め可ならんかと道理を告て取あつかへバ行長これよ心
 服し此義最なる事我等あんぞ違背よさんさらば各々よまかせ申す先これより王城よ至るよ二
 ツの道あり一ツハ驪州といふところを越ゆその道江と渡り楊根と云ところより龍津といふ大河
 を渡り京都れ東よ出る道あり一ツハまた竹山龍仁といふところを経て漢江に南よ出るありまた金

海より進むは星州茂溪縣より江と渡り知禮金山に所々を過ぎ忠清道永同なんといふ所をまぎ京都より向ふ道もあり何れなりとも清正の量見次第いたし中さんあれと南大門の道遠く東大門の道すこし近けれと大河の津ありて行難し南の路すぢの遠しといへども川なふして平地なり兎も角よもその意はまかせ給へといふ

一説は南大門に向ふ行程近ふして河あり東大門に向ふ道路すこしく遠くして平土といふまかしながら彼國の記は述るところ南方江邊より出て河津なし東方より出る道江を渡り津を渡るとある故に彼書はまたがつて東南道をうへて記す

鍋島直茂等も行長がいへるを聞て此義まかるべしと有ける故清正も氣色をなをし我いたし其行程の近き方と進むべしといふよ々將諸も歡び扱こそ清正の東大門と相定る（一説は南大門に向ふといへども右河ある説と用ひて東とす）こゝよかめて清正の京城案内のためよとて通事一人を宗對馬守義智に請受らる義智は行長の婿たる故荷撥の意ありけるよや遂に京都の道をもまらぬ刺へ言葉のともりて其言語さへたしかあらぬ男をつかひす其名をば徳右衛門とぞ呼ける中流舟と失は一瓠も千金に價あるたとへてこの徳右衛門も通事なきよのまざるべしとて此者と先立て朝鮮の王城としてを駒を早めける

王城途中郡縣を陷る事

既日本諸將二手よわかつて王城を責入る家々の旗馬印大旗小旗雲とともよひるがへり鉄砲のひびきの雷聲なりよ相聞ゆ日本勢の過るところの或は十里或は五六十里を見立その險阻は據順て陣營とかまへ堀と柵をふりまひし兵とをくめて番兵を置ぬその取得たる土地の通路と敵より奔ひ隔てられしがためなり清正の一手の過るところ金山といへるの要害堅固の所とて城郭を築て加藤與左衛門といふ者其兵三千の外組頭三人相そへ彼是五千の人数と籠置その他は諸將もかのくすぎ來るところよ番手の兵とをくめかかずといふとなし夜よもなれば火を擧て無爲なることをめめす或の事あらば寬急よよつて約束の數を分ちて事を辨ふ是を軍法と號する相圖の火飛脚かへりよと云ことなりとてお主計頭が人数の先手より龍津の南岸よ着たりけり此要害を固めたる朝鮮の大將の江原道の助防將元豪といふ者なるが纒は數百の人数よもつて此所と守りけるまよと敵の大軍よの對すべきにんすよのあふねども偏に龍津の要害を頼むをかりの意なり元豪こゝよ謀を設け津口の船とも一隻ものこす近里水村を借集め凡て船を北岸よわつめたるの敵またやすく津を渡せまじきの謀計なりまた多く人数に備ひたる体を見せ敵の氣を奪んとや思ひけん藪よ多く人形と作らせ甲冑を着せ弓をもたせ矢をばげさせ或は多く旌旗を指し上げ木の梢屋梁の陰より

所々に是とひるがへずのまよ多勢の有さまあり主計頭が先手の兵此有様を遙見て大に驚きまた此津を越て行へば舟一隻もあらざるゆへいかゞ入きとおもひ飽んで清正の旗本へ使番とはしらせ先手の諸隊の先高明の所陣ととりて清正の來れると待居たり

一 流し小西行長口論の意趣とふくむが故木戸作左衛門日比左近右衛門が輩と並し清正より先へ廻し舟盡く纜と切て流すといふまた一説よ此所の防將元家ハ胸は甲兵の機ある者故この所を防がんとため南は岸近邊の船ども駆拂つて北岸へ引付たると有何れが是なるか諸記ののく一決なしされど凡そ敵を防ぐへき用心よの舟を燒き野を消す此らハ兵の常談たれば則ち本文よあらはしぬ後觀の者の校正をまつ

加藤清正龍津と越る事

すでに清正の旗本程あくらう着すれば清正近習手廻りの人数少々召ぐし自ら見物よ出られ川の体を臨るゝに夥しき有さまや其面凡十四五町よあまりて川幅廣きが碧流白浪と賑らし湍の音の高きことどうく活々と鳴り人の耳を驚す底深ふして石を泳すたとへ舟ありとも渡やすからず北の岸よハ数千艘の舟とも大小ひつしとならべ纜で川端よ臨んで敵渡らば防ぎ矢射べき料と見へ其かすまらぬ軍兵ども宵の星をかゝやかし弓よ矢をさし加へて扣へたりその間ハ旌いさゝまた白雲と

色を競ひ川風よ翻したるのまよ王城ハ堅固一防ぎをすべき處とぞ見たりける清正はじめ此道よ向へると近きをもつて意とし半日なりとも王城を人より先よ乗取べき量見なるよおもひの外の行路の難よてすゝみがたきゆえよ大よその意せししくなり先手の兵よ下知して近邊に在家よ込入民家よこぼち官舎を破り材木葺葺をあつめからげく大筏よ紐せ天晴早き渡りの具と我先よと打乗り中流よ漕出すところよれもひの外よ水勢つよくしていまだ半ばも渡らざるよ盡く水のためよ押され一ツの筏よ乗たる兵士數十人河伯の廚を富しけるハ是非なかりける事をもなり已よ敵の筏よて渡りをなすと見るより北岸より射出す矢ハさながら雨より猶繁ければとても漫りよ渡りをなすこと叫ぶべからずと懸れる筏を引かへし其日ハこゝよむなしき日をぞ費しけるかゝる處よ江原道の巡察使より羽檄と飛せ元家を促しすよ王城も虛城と成るとも叶ふべからざるの防ぎなり早く本道よりへるべしといひたるよぞ元家もその夜ハそらよ河邊を去つて本道よかへりける借も加藤清正ハよしなきところよ押とめられいたつらよ數日をおくり其意の急速なる憤怒とさきりよ止むべからず終宵是とおもひなやむが故よ潜よ河上の体をうかゝふよ炬火の光り立消て深行まゝ影黒く夜ハはかゝと明おけり清正これと遙見如何さまよも敵陣ハ變ありて守りを引拂ひたるよやあるらんと意づき再び近從の士よ召具し水邊よ立出北岸のやうを察とるよ河務の晴間を

見れば守りの兵陣をつらね旗の影さながらもとの如くなるよ不思議や河瀬に集る鴨鳥の類南岸よ向ふ一ツもかくさしもよ多き守兵共の弓矢をとつて水濱に臨めるをすこしもおどろく景色なく北岸よ近よつて遊ぎ泳れると見て清正も直茂もいよあやしみながら渡りおければ如何んともそよぎやうあさところよ紀伊國の住人貴志佐助と云もの進み出某遊きて敵の動靜をうかひ参りいんといふ清正歡びとくくと申されければ貴志の鎧ぬきとて川へ飛入遊ぎけるよ水勢つよくして息切ておしながされ浮ぬまづみぬ見えけるが三町ほど下へ流れつき半死半生よして此方の岸へもどりける清正身をもんで怒りけれど詮方なし其時越中國となみの住人曾根平兵衛が嫡子よて生年拾八才なる孫六といへる者進み出云やう某およきて渡しやさん本國砥並川は是より水勢つよくい得とも幼年の時より遊ぎ越古主川田豊前守の上杉景勝の家老よて越後春日山へ折る参り申し時某十三の時より従ひ参り越中越後のさかい川山姥の出たる姫はや川四拾八瀬なども遊さこし得ばこれはどの川越後よてい溝も同やうありと鎧をぬき捨て下帯許に太刀を背にかひ川へ飛入逆巻水を事ともせず一文字よ向ふ北岸よ遊さつき大ある家よ走り入て見れば一人もあければ捨置たる飯などをかものまよ食し小船一艘よ打乗此方の岸へ漕もどしければ清正大に歡び是見よや人々上杉家中の武勇のたしをその心がけの深き事よとて即座よ五百石の墨附よ肩白の具足

兜一縮よ名ざりといへる名馬よ青貝の鞍おいて孫六よ與へける扱かの小船に數人打乗向ふへ渡り數十艘の船を取來つて一万餘の勢よ渡しければ鍋嶋相良の人よもつゝいて川を渡しける此時加藤家代名の勇士木村又藏進み出某敵地のやうと物見仕つらんと黒毛の馬よ打またがり眞一文字よ乗出しまばらくして馳戻りて云やう都の最早間ちかくい數万軒の家よ相見へ其中玉城とおぼしき所ハ少し高くして煙見へい丑寅れ方の山よハ小西殿の旗おびたしく見えいと云ければ清正大よ歡び先手の者共急げよと自らも母衣の者阿波伊兵衛嶋川九兵衛祐筆の下川兵太夫を召具し案内よハ木村又藏を先に立小西よ先をせられぬ内ともみよもんで馳ふりける

小西行長朝鮮の都城よ入る事

爰よ朝鮮王城の都元師金命元ハ濟川亭といふ所よ人數を揃へて日本勢を防がんと待居たるよ日本の兵すよ間近く寄來ると聞しが敢て合戦すべき志もむなしくあり悉く軍器火砲弓矢まで江の中よ没溺せしめて其身ハ衣服をかへて行衛もまれず逃れ行よ其下司なる従事官ハ沈友正一人のみ是が下知よまたがハず猶も城中よ回り入り守城ハ大將李陽元よまたがつて寄來る倭賊を防んとまたりしよ李陽元もすよ漢江の手の防守も其軍自ら散じ潰へぬと聞より此城ハ守るべからざることを察し是も同じく城を出て揚州として落行けるかくて行長が兵士ども王城よ到り着ていかさま

にも手痛き一戦もあるべきかと各々高名を意がけ我先にと攻寄る實は他の府城との事かいつて關門半く鎖し石垣高く聳へたり門の高さの十餘丈敢てたやすく攀登るべきやうもなし行長も門外は暫く馬をひかへて仰き見るのとなれば諸備とも馬蹄をとめて大將の下知を待ところ案内のため召捕し生口の中そやうなか〜此門より入せ給はん事關ひつかずして叶ふべからず此門より東に當りて水門あり其廣さ方五尺鉄の透し有これと推切て入給ひたやとく傍人數入べと教へければ行長大に歡びこれを屈竟の入場なれさるば其水門を打やぶれと云へども人歩共いまだ駈つかず大鎧なんぞも折ふしなかりしと木戸作右衛門が才覺よて足輕に下知を加へ鉄砲の臺をも脱させ其筒とよき手子棒となし大勢に門扇を立並び一聲をえいといふて推はなせばさしも丈夫に構へたる水門ありといへども一同又ぐら〜とこち放ちけるのいさましくこそ見えたりける其勢ひを抜さず行長馬上に下知を加へ眞先に乗こめば諸備たれが残るべき我先に高名せんと撃入けるおもひけ外矢一筋だに射出す者なきのさかしまも廣き王城に人といふもの隻字もあし人々不審となし事のやうすを尋ぬる朝鮮王を始め諸臣百姓に至るまで三日以前は西の方へ落行しと聞定め行長の先軍中法令を出し第一軍隊列を混して王宮に入べりす濫は民家に入て寶器金銀を取べからず酒家に入かたく是を飲食すべからず婦女を侵すことなかれと大目と定めて列

をとへの衆を警め儲その後手分となし通く王城の外外まで盡く搜りもとむるよ今の敵一人もあき極まり宮中まで清く吟味し其後手の者どもを四方の門々分ちさびしく是を守らせ後陣の兵將を待居たるの實は勇しき有さまなり

加藤清正都へ入る事

扱また加藤主計頭清正の此度の人より先王城に乗入らんと兵士を急がせ馳たりければ漸く王城にも着ければ清正が先手城門を押ひらいて入らんとす此時小西が兵門内より云けるに當城の小西行長昨日入來り我等も付四門を堅固に相守りて他の人をば禁すべし若諸大將よりの傍通路ならば三五人お漕るべし其外の内へ入は事無用と大將よりの下知を得ばそこを通し申まじ傍用あらば三五人の入あれといふ清正が母衣れ者阿波伊兵衛嶋川九兵衛といへる者早々本陣に立かへりて清正まかくと告る清正大に憤怒して口惜や今度も小西もまた先をせられたりなよし〜今人の乗取たる城に入たるとして何の益かあらんと先城外軍を休息せしめ家臣どもを集め評議しけるの我志し先驅して先に入らんとおもひばこそ秀吉公の制法と我儘云破りたれ我不仕合もふ合て大川は隔られよしなき隙をとり行長も又此度もおくれを取る事我鬱憤大方ならず口惜おもふどころなり何ともつて是と晴さん我こゝも思案するに國王ならび王子の落行たる後を追かけ行

押詰て擒よせんこと安からん併ながら事明日よふよんで其路はるか隔りて追つかんこと叶ふべからずせんところ今夜亥のこく速よ我兵と進めんずるを各々其覺悟をなすべしと云ければ家の軍兵盡く馬よ草飼兵糧をつかふて急よ其仕度をととのひけるまばらくあつて清正の庄林集人助と召て密よ云やう最早手の者ども兵糧をつかひたるや馬の腹とばやしなひたるか庄林管ては意れおもむき亥の刻との承れど疾よ飼足のかためまて總人數調ひ中といふよ鍋嶋も云合せず清正一手れ人數をもつて汗馬よ鞭を加へて追行けるが爰よ幸なることありて折ふし一人の朝鮮通事をとらへ得たりける其名よ倭學通事威廷虎といふ者なり是がことと知るの委曲なること徳右衛門が類ひよあらねばその姓名をたづぬるよ某の元日本の産よて姓の後藤と申し得とも偽りて彼よえたしと命を助りいとすける清正大よよろこびすなりち名を後藤二郎と改め諸事の通詞の手引とひなしたりけるかくて日本の諸將のひひ〜王城へ打入評議しけるに清正のみ國王王子を追かけ行しよしを聞て彼が先立るを打捨置ば彼軍敵中深く入て若不時の難事出来なば却つて味方の落度たるべきと中よも鍋嶋直茂の清正が相備たるよよつて急よつゝいて馬を急がせ跡とまたふて馳たりける小西行長の元より一方の勝手たるよよつて朝鮮王の落行方を聞定め平安道へおもむきける其餘の大名黒田小早川が手の軍兵どもおもひ〜よ打立て押行しし夥しき兵の形勢なり

朝鮮王處を難難の事

朝鮮王李昭のそでよ都城を没落ましく王子達をば道をかへて落し給へて後作罷を急がせ給ふといへども猶降來る雨のやまされば道のほともはかくしくなれば左右よ供奉したる官人ども助けかへて惠陰嶺と過る時其日もすでよ未の刻ばかりよなりよけり雨の猶はげしうして注ぐが如くありしかば宮人達のやう〜に田家の馬を求め乗せられたれども雨の降來るを凄ぐべきやうなき故手よ手よ種々のものを以て面を蒙ふてまよと雨よそばぬれたるの淺間しき有さまなり馬山驛を過るときに田間よ民ども多く出て臨み痛哭し國家今我輩を打捨て何方へか去り給ふ我輩今より何をたのんでか此生涯を立べきぞと號び呼ふそのあひれ云んかたなし臨津といふ渡りよ至り給へども雨のまきりよ強くなり李昭のこれより船よ召され首將軍柳左相成龍あんども舟中よ侍りける既に渡りと過る時其日も暮よか〜つて物の色をも辨へず臨津の南の岸よ王朝より兼てたてかまへたる役所のありしを賊兵の後より追かけ來り材木を取りはあし桴筏なんごよ組れての悪かりなんと恐るれば李昭の左右よ命じ火を放ち盡く焼はらひ給ふ其火光江北まで照し〜かはなかく〜今のためよしてハ明松の光りとあつて落行路のまごひもあく其夜は初更ばかりよの稽く東坡

驛といふ處は著玉ふ坡州の牧使許晉長瑞府使具孝淵等相集りかたの如くおの府の設をまかあひ膳を調進せたりしは警衛扈從の供の上下終日食物をばはかしくえたためねば甚だ以て飢たるゆゑ厨の中は乱れ入り取り奪ふてこれを喰ふ不ぞも殆く膳を闕んとす許晉孝淵諸ともよこれと禁制しとむれども更も耳も聞入らず我がちを喰けるを許晉孝淵かゝる體を見るよりとても此すへ頼みあしとやおもひけんとも打つれ行方さす落行ける五月八日の早朝より李昭不豫は事ありて一日此所より逗留あり日暮て開城に發向あつんとするに京畿は吏卒盡く逃れ散じては供は警衛たるべき武士なかりしりばかくては如何あすべきと諸大臣もあきれ果たるに黄海監司趙仁得たましく本道の兵を率てまさき京都の軍と援んとするに會たれば其郡縣に歸狀を廻し人數を集る時瑞興府使南嶽先づ第一に参りたるが其兵數百人馬五六十疋を引來りければ此人數を警衛として彦駕をすむ司鑰官崔彦俊とて出てややう宮中の嬪妃昨日終日食を斷ち今日もいまだ食をなさねば少し米を得て飢を養ふて行をなすべしといへどもいかにともすべきやうもなきを南嶽が軍兵の持ところの糧大小の米わづか二三斗ばかりのを雜へあつめて奉るやうく是をもつて宮人の飢を養ひ午室招賢站と云ふ處に入し時趙仁得も來朝し帳幕と路邊に設けては驢の人數を待受て觀應をなしたるに百官はじめて食を得て生たる意なり此夕すでは開城府に入せ給ふて南門の中

淨座をすへらる時諫官諸司の輩章狀と奉り今度倭賊の難あつて一防の功もなく忽ち敗亡に至ること日頃より首相某等が朝廷に徒黨をむすび平生の政最もよろしかうすまかる時首相某をはじめ此度國を誤るの罪を正し早く是等を退けらるべしと奏されども猶これと許用なきに諫官は吏の大臣どもまさきりし此事を申請より首相某その官職をやめられければ柳左相成龍首相となり崔興源左相となり尹斗壽右相となされけるに柳相また罪あるを以て官をやめられ倫泓を右相となし崔興源首相よとみ尹斗壽左相よかへりけり

朝鮮王平壤入事

そで五月十日より李昭の其日の午の刻ばかりは南城門の樓に登りて人民と慰諭せらる此日威鏡北道兵使申吉も馳まぬる猶今以て王城へ敵兵の來りし沙汰をかりしかば衆臣とあつて議して京畿をみだり選幸ありしこと失策なりと云ふついで承旨官申傑はかへり至り京畿のやうを窺ひ其形勢を察し見よとの仰をうけ馬を鞭うつて急ぎしが程なくかへり参りて奏聞するやう最早賊兵京城に入來りし留都の將李陽元帥金命元とともよみあを走るこれよつて敵兵一戦もあはずして京城へ三道より打入たり城中は民どもみな先立て散し去るゆゑ是又幸ひは死命よかゝる者もなしと云こよ金命元も既は漢江を逃れ去て李昭のわしと所よ向ひしが漸く臨津まで遁れ來

り爰より奏啓を奉りその軍の狀と申述たりしに重ねて京畿黃海の兵を集めて臨津を守るべきよし命せらる又申吉よ命あつて同じく臨津を防ぎ守り賊兵の西よ下るの道路をどいめて戦ふべしと謀計を示されたり是日車駕開城を發して金郊驛より多駕をやし給ひ同月十二日より與義金澤平山府なんどいへる所と打すぎ其日の鳳山郡より一宿あり夫より黃州を過ぎて十五日申の刻にかり中和なんどいふ所を過ぎて平壤に入給ふまばらく爰をおひします所となし玉ひける

戸川花房白光彦李時禮を討事

かゝる處に全羅道の巡察使李光の本道の兵を率ひ京城に入りて援んとまたりし時車駕すでも西よ遷幸なり京城もはや落城も及んで敵の手は陥ると聞へしうは是非よかよばず全州よがへる處よ李光がすでも戦ひをも爲すして州よかへると其軍中の兵士憤りを懷て不平をねもふ輩も多かりしかば李光もまた其心安からず此議と深く恥思て更軍兵を調へて忠清道の巡察使尹國馨と諸とも軍兵と一ツよ合して進まんぞす慶尙道の巡察使金暉もまた其本道より官軍數十人を率ひて來り會し總軍五万人の兵士とありぬ此兵を率し北斗門の山上に登りて見れば倭の軍兵と籠置たる小城のあるを見すまし勇士白光彦李時禮といへる二人の者をつらひし敵兵を咎せしむ此城に浮田秀家が家臣戸川肥後守花房助十郎と云者五六百人よて籠り居けるを光彦等すでも先鋒を率て山上よ

登つて城壁を拒り近づくと十餘町ばかりよして馬を乗はなち歩立よなつて矢を發すされども戸川花房與力の者よ下知をなし堅く守りて音もせず静まりかへつて出ざりけり光彦等おもふやう此城番手の小城ゆる城兵最も少なければおそれ出ぬものなりと心得たる其意は解る處を日本勢見すまし太刀の切先を揃へて二百ばかりの兵一度よどつと切て出れば光彦大いふ倉皇馬よ打乘して走らんとすれども叫はす既に倭兵の近づくと見て光彦時禮日頃勇士の名あるよや取たりけん踏とよまつて戦ひしが二人とも敵二三人よ手を負せ其身もこよて討れけり朝鮮の諸軍勢二人の勇士敵のためよあへなく討ると聞より兎角和兵の侮りがたしと思ひけん大に震懼れける三巡察使の輩のみな文人よしていまだ兵事よ閑ぬ者どもなりければ軍兵の多しといへどもその號令の一ならず其上また險阻よよつて兵の備を立設くるそよもまらずみだりよ敵を侮り春遊の如くなる其兵行ふんを破れざるべきや其翌日よ至つて戸川花房の二人の傍輩物頭れ面々を集め朝鮮の兵卒其數多しといへともすべて諸方の集り勢と見ゆれば烏合れ兵其志一ならずといふものかことよ昨日味方の働さを見るに付ては其やう察する處定めて慎て心懸せん此方よりかゝつて是を撃ちとさんといへば岡新之丞船越源左衛門松木清藏なんといふ物頭の面々其外若手の侍に國分堂原金田白鳥なんといはじめとし鎗先とならべて突て出我と思はん者あらば出て勝負をささざるうとあめき

號んで呼れば朝鮮の軍將大に破れつれてそのさけぶ聲山を崩そが如くなり軍資器械を打捨たるの足の踏處もなかりけり是か爲人馬の路塞がつて暫く通路を遮ぎれば戸川等下知して盡く一所に集めて焚すたり李光の破れて全羅よかへれば國醫の公州よ走り金眸の慶尙の右道よ引退てやうやく殘兵をぞ聚めける

黒田甲斐守長政武勇の事

借また日本の諸將の手分を定めて押出す中よも小西行長の加藤清正玉城へ入らずして國王王子と追行しと聞しかバ心急がれいかよもして清正より先へ朝鮮王かまたの王子を擒となして清正よ鼻あらせんと兵士を急がせ進み行其日の東坡驛に陣取しあくれバ十一日開城へ發向せんとて小西が先手日比左近右衛門小西若狭守二陣へ大村新八郎宗對馬頭とだんく押行ところよ朝鮮の船大將利統制といふ者開城府川よ待かけ居しが小西が勢の押來ると聞て五千餘騎を下知し小西が先手へ無二無三よ打てかゝる小西が先勢不意と打れて色めくところを利統制半弓を以てさしつめ引つめさんくよ射る日比左近右衛門小西若狭守一ざへもせず射立られ二陣の大村宗が備ひよなだれかゝる宗大村が勢も先陣の敗兵よ引立られ三陣松浦が陣へ崩れかゝる是も同じく味方の勢よかし立られ心ならずも引退く行長の味方の崩るを見て兵よ下知し南の方なる山れふもと陣を取り

戦かいたとなしたる時利統制の小西が先陣を退崩し勝に乗つて追來る折から後陣よ備たる黒田甲斐守の生年二十四才の若武者なればなよかひもつて猶豫すべし先手よ下知して押出しけるよ黒田が先鋒栗山備後黒田美作後藤又兵衛の五千ばかりの兵を眞丸よなして烈風の如くよ馳來り利統制が横合より一文字よ突かゝる利統制少し引色になりたるところへ後藤又兵衛基次と名乗て朝鮮勢の中へ割て入つひて村上彦右衛門義清と呼り敵中へ馳入兩勇士四方へ當りて戦かひば此二人が太刀先よ向ふ者一人として命をたもつ者なく討られければ朝鮮勢忽ち崩れて散乱す利統制も叶はざることを察し元の陣所へ引退く此時黒田長政なかりせば今日の軍難義なるべかりしを長政利統制と追退けし天晴の働さなりかくて行長諸將を會して評議なして利統制を討て後兵を進めんと有ける故諸將もまゐるべしとて其用意をなしけるよ利統制の其日兵よ引て李昭のわいしまず平壤の地へ引退くゆへ平安道に路ひらけたりされども開城府川よ大なる番船數十艘有しかバ先これを攻取べしと有ける時黒田長政云けるよ今日の戦ひよ敵よ一しつつけい得ば某が兵士をつかひし其番船を乗取べしとて即時よ村上彦右衛門義清衣笠久右衛門助則命してさしむける村上衣笠の兩人の東西へ兵よ出し船よとめまたは筏なごころらへ翌十二日の未明よ乗出し數十艘かけあらべたる敵船の真中へ乗込銃砲を打かけひるむところを十文字のうらかきよて引よせく大船二艘

よ乗うつり敵兵あまた討取ければ朝鮮人大よおそれ開城をさして逃行けるこれよつて日本勢諸軍とまとめて進軍を行

加藤清正王子を追かくる事

斯て加藤主計頭清正は朝鮮國の王城を起つてより十三日の道程を過ぎ來り箴鏡道の境なる安邊府城に到着し爰よてまばゆく人馬の息を休めける扱また鍋島直茂は江原府より打出て此所を陥しいで鍋嶋平五郎茂里といへる者を番手よさし置其外所々よ多くの艱難を経過し近郡の敵兵を追討ゆえ清正は後るゝ事曰ふ十日よおよびけるが兵士を急がせ汗馬よ鞭よ加へて馳けるほどよ五月廿五日の午の刻ばかりよ鍋島が先手清正が陣所よ當着すつゝひて直茂も馳着二人の大將對面あつていよ一両手の兵を以て朝鮮王并よ諸王子の行へを探り求めんと同月廿六日両手の兵將を促しうれより廿九日の晩ほごに永興府といふ所よ着たりけり是ぞ俗よ云永橋なり此處よ高札をかゝり臨海君順和君兩王子此道より行啓なり忠義といたくの輩早々人衆を聚會して供奉すべきの旨を書し太子の從臣金貴榮が名をさるす清正へ此高札を取よせて美野邊金太夫といへる士よふれを讀せ大よ喜悅し兩王子のさすれば吾掌の中よ入たるもれよ是より北土地だよつゝかひ虎狼の穴鬼が島まで送給ふとも遁しはせざと笑をふくんで直茂よ此事と談ぜり鍋嶋聞て云けるハ異國の者の謀慮をも

つて敵をやぶるを専といたすなれば計をもつて敵兵を深入させ切所の死地よ陥して伏兵をかまへて我々と討取んと存るかも知らず淺はかよ是等の事を誠とし不覺ばし得給ふなよ其上我等が手の者どもハ王城を出るより十六日の炎熱を侵し來るのみならず所々のせり合手ひどき目よ出合切所あまた越來れば上下れ草臥大かたならず餘り不便の事よて此邊ハ幸ひよ富饒の土地よして百姓も肥米大豆も澤山よ見へたれば若くは逗留せんと存するあり其方も我等が申すところを承引あられ都へ此趣早々注進の後次第よより一先此陣を引かへし給ひなばよろしかるべき謀慮ならんと申されける清正聞て此札を朝鮮人の立たると加州よハ恩召や我等ハさやうよハ存せぬなり即ち天照大神八幡宮の啓示しと存すれば神慮よまかせ押付王子を生捕て見せやさん其内ハ此邊よてゆるゝ休息し給ひと不興氣よ云はち兵士よ下知して打立ける此時清正ハ安城ハ郷民二人を捕へこれより北路の案内せよと云ければ二人の百姓云けるハ此所よ久しく住といへども是より北道の終よ通らずい得ば案内なすべきやうなしと申も一人人口齒あらそひけるを清正大よ腹よ立ち口の利たる奴かなとやがて切て捨させたりけるよ一人の百姓大よかそれ何卒命を助けて給はりいへ實ハ案内よは克存せたる事よなげきける清正大よ打笑ひ左も有べしさらばゆるして案内させよ導引あしく切て捨んと眼といかすしまかり付前よ押立八千の人衆よ纏り出すハ雄々しうりけ

清正克威を戦ひ破る事

鍋島加賀守直茂のこれより二手分つて威府と切きたりひ此所は陣を定めて近きあたりの郡縣
 瑞川などいふ所を制略して人馬をこゝお休めて居たりける清正の彼れ案内の百姓を眞先立谷
 山に地より老里峯といふ所を越嶺の北邊へ出て日々行くと數百里と過るよその勢の速なる
 風雨の來るより猶急あれば向ふところも敵ぞなかりける爰も朝鮮北道兵使韓克威といへる者六
 鎮の兵馬を引卒して追來る敵を防がんとて馳向ふも海汀倉とて海邊運漕の米穀をおさめ置く
 出會たり朝鮮の國內も北方の兵士の騎射の藝は達したるも此所の平衍の地形にして騎を馳す
 るも其驅引の自由なるを得たりや應と左右送ふあらはれ馳出し射出し働けるゆゑ清正が兵士此
 勢ひも對しがたく見へければ清正下知して兵を退け倉をも丈夫なるよき幸の陣屋とて其中に
 入らりけるすでに其日も暮まかれば朝鮮の兵將ども今日の日も暮ぬまばらく兵士の息をやすめ
 明日賊の出るを待て戦はんぞ云けると克威これを聞用ひず軍氣のその勢ひも乘るよまかすと其軍
 を揮て圍を合せて攻立る清正諸手の兵も下知し倉中の米穀を取出し土手のかかりとなし米俵のか
 けを小たくもとりて敵よりいかくる矢石を防となし其下は鳥銃をひつしとあらべ一とよ放ちかく

るも克威が軍兵櫛の齒とあらべたるやうも立つらざりたる中へつるへ打よこめかへく放ちかく
 れの何かのつてたまるべき一ツの玉よて五人三人打斃る克威が兵乱れ立て敗走す克威のやう
 く兵を收めて軍と退け嶺上へ屯とあすすよ其夜も明なるとする時よ再び備ひを立更も雌雄を
 決せんぞとえたりける清正のその夜深更もかよんで潜り木村又藏井上大九郎の兩人は兵をそへ克威
 が陣取し山の麓よつかのし草間も伏兵と置たりけり今朝のことよ山間の霧ふかく物の色目も見え
 ざりけり克威が兵は是をばえらす日本勢は猶山を隔て、倉の邊のみ陣せりと汕断して押出しけ
 るどころも忽ち響く砲の音四面より打立て大い呼んで突出る克威が兵大いおどろき此勢ひも勢易
 し右往左往お散亂し道を求めて逃たりける克威のやうやく逃れて鏡城へ入たるを清正が衆兵遂
 んゆるさず追討けるが其中より黒糸おどしの鎧と着たる武者眞先も馳出し敗將逃る事おかれ齋藤
 立本汝と生捕て當國の案内とさすべきと云ながら近づき來る克威も遁れぬところと覺悟をきひ
 めもつたる劍を取なをし戦はんを志したる時立本はやくも馳つき弓手さしのべ馬上おかろし擧
 めし味方の陣へ投こみける扱また臨海君順和君の兩王子の初め江原道に在せしが日本勢江原道
 入ると聞より道を轉じて金貴榮黃廷 幾黃赫ならびも緘鏡道の監司柳永立等を誘供よて北道よめ
 ぐりたり清正は勝軍の勢ひぬくべからずと密しく王子を追かけ會寧府といふ所まで退詰たりか

る時に至つて頼みかたきの人心よて會寧の吏鞠景仁忽ち意かひり多く同類をかたらひ謀反の色と
顯りし府城の内へ入りかこむ置使と清正の陣へつかひし王子を生捕りて降参すべき旨を云つかり
しける

清正王子を執情ある事

仰會寧府と云ところの朝鮮の王城より北東良の方よりあたり朝鮮の邊境たれば我日本の入丈
が島硫黄が島の如くにして遠流の者も多く入こむ所なれば忠義の分をもまふぬ輩なり今かもしも
よらぬ大軍押来りいまだ見も聞もせざる日本武士の剛勇あるよ恐れをなし鞠景仁をはじめとし不
忠の心を生じ清正が方へ使をつかりし恩賞をもとむかくて清正の此使を得て大に悦び恩賞の汝等
が望むところよまかすべしと答へられければ府城の一揆とも大およろこび重ねて書翰を送りて云
清正直に城へ入りて王子を受取給へ最も大勢の叶ふべからず上下十余人をもつて漕りてすべしと云
かくる清正聞て其日の中は軍中へ觸させ日頃武士の馬と嗜むりかゝる事の爲あるを行列備も
及ばず一騎がけし馳行へし早く驅たらん者が手柄なるべしと云捨其身の秘藏のはね月毛の馬を打
乗り真先は馳出せば誰か一人留るべき我劣らじと馬と飛べせて會寧府中へ入よける其夜の城外に
て夜と明し翌朝卯の刻ばかりは城中へ入らんとす加藤家の老臣諫めて云案内まふぬ異國の城内へ

小勢よて人あらんことを其謀計の遠慮なきとすさんか万一敵大將軍をあざむき王子を餌よして擒
よせん工みかも知るべからず敵兵大將と見えらざることを幸ひ誰よても名代は清正なりと名乗
て王子を受取中さんといふ清正聞て最も汝が中ところ一理なきよもあらず去ながら我一國の大將
たる身として兩國の交りのみならず敵國に王子を生捕る節に望み其信を守らずおそれて其身を陰
し家の子を我ぞと名乗らせんは實は武將の身よどりて恥る所あり其上我日本を出しより戸の朝鮮
國の沙石よ曝さんこと是我覺悟せし處なり今王子を擒よするとして我よ過らぬればとて何ぞ忠義
の立ざる事かあらん何とお辞する事あらんやと早天は城中は案内すれば鞠景仁が輩大に敵の城門
をひらいて清正を内へ入よとつひて加藤家名代の勇臣五十餘人まで込入たり清正は鞠景仁よ
案内させ王子の居給ふ所と取巻美濃部金太夫を以て云せけるは日本の將加藤清正此所まで追かけ
参りよとてものが一奉らすは問唯こなたの陣へ入らせ玉へと有ける時王子の從臣金貴榮出むかへ
日本の大將王子の命を助け奉らば出あるべしもし殺し奉るべくは此方よては自害あるべしと
答ける金太夫聞てその事ハ涉心やすかれ今清正が軍門よ涉入あらば日本國王關白秀吉へ申達し必
ず命よ全ふし其上朝鮮と會盟なして好をむすばん事古しへの如くたるべし此度當國へ軍馬を向
る事唯前年の書翰の返事のなきをどがむるは外他事なしと云ければ王子を始め從臣等悦ぶ事あり

めならずさらば此方へ入給へとて廣き馬場れ如くなる所へ曰とニッ置其上門の戸びととしき東の方を王子の座と定め西の方を壘をしき清正の座所と定め王子出玉へバ金貫榮を始め從臣あまた左右ならびて著座なす清正の例の大兼光の太刀と横たへ二十餘人の勇士と従ひて座よ着の兩王子禮をさし給へば清正も禮拜し拜答の式かいつて供物を兩王子よそなへ奉る諸大臣残らず是をもてなと酒とて三献よおよびける時清正が臣等着と出さんとて立と見て王子の從臣等俄お騒ぎ立すいや王子を殺し奉るぞと心得て半弓取て矢をつがひ清正を目がけ射かけんとす清正おどろきこゝにいかにと制すといへども言語通ぜずあをく近よりけれバ清正きつと心づき傳へ聞異國の印章を興へて約をなすといふ事あり是こそ大事のところありと腰よつけたる巾着より印形を取り出し紙へおして王子の從臣へ一枚づゝ興へけれバ王子をはじめ從臣等大に安堵し半弓と捨て座したりける事危き事どもあり清正戰場へ出る事敷れずといへども今日れ如き危きとよ出合しとなしと語られけるとなりかくて清正の臨海順和の兩王子と受取日本の陣へかへり此時國妃の侍婢等も多からで落人となり給ふが首お一ツ物とろけ面を覆ふよ巾もつてし倭人の追ふに路よあへるを清正が手の者すてよ是を追捕へしとぞたりしよ清正これを制禁し其顔面を見ることがかれ侵し掠め汚すことなとべからすと下知をなし飲食を興へて意のまよ迷れしむ其首よかけたるの

牛の脯と聞へける清正のその驍勇のみならずで情まで深き人なるかと感ぜぬ者の無りけり

清正兀良哈人と合戦の事

清正の既よ兩王子を擒としけれを早速 本朝へ注進をなさんとて足早の者五人とえらみ箕部金太夫よ命じ注進 狀五通書えめ秀吉公のは本陣へおもむかしめけるよ五人の者どもつゝがなく名護屋の陣へ到り淺野彈正少弼長政へ書狀をさし出す淺野長政秀吉公の傍前へ此書狀を披露よおよびける秀吉公此注進を聞召はよろこびましゝ傍前よ伺公せし家康公景勝利家をはじめ老臣の面々へ仰けるの注進 狀を見られいへ朝鮮の王兩子をはじめ從臣等二百餘人を生捕たるより扱も氣味よき清正が働さその戦ひのやうもおもひやらるゝなりと傍喜びあゝめならず傍前よ有ける人々も感ぜぬ者こそあかりける秀吉公自ら筆を取給へては感狀を遊ばされ吉光の脇差あよびよ黄金五千兩そへて清正へ下されけるとおん扱又加藤主計頭清正の王子をはじめ生捕の朝鮮人を引て安邊陣所へかへらんとおしけるところよ兀良哈の夷ども數万人起來ると聞へしかば生捕の者を庄林隼人加藤清兵衛の兩人よ兵六百余人をそへて守らしめ清正の兀良哈の案内のため會率府の降人鞠景仁が徒黨の者ども五百余人を一隊となし南無妙法蓮華經と書たりける笠印を一様に付させて押行ほごよ兀良哈の兵よ出合互よ矛をまじへて合戦ふ兀良哈の夷ども元來勇ある強人

よして驍を馳せ射と放ち少しもひるむ氣色なきを清正の兵士のみなく精兵卓然たる者なれば鉄砲をきびしく下知して打かけさせ火花を散らして攻戦ひいつ勝負あらんとおもへれける時飯田角兵衛といへる清正の勇臣花色おさしの鎧を著し頭あり鹿の角の前立物打たる甲を頂き赤根の陣羽織を着て群集敵の真中へ只馳騎入大手をひろげて駈巡り手當り次第引つかみ投付るゆゑ是れため敵二三人づゝ打倒され狼狽まゐるを味方の兵とつと喚いて突入ゆゑ元良哈人つゝめひやぶれて引退を清正その剛をぬかさず追撃進み行し一城の地は押つめたるころ後深山を堅固よとり前より深深く壘石を高くしてたやすく奇ん氣色もなし清正下知して會寧府の者に手れ者をさしそへ前より攻させ自ら木村又藏をはじめその外日本無双の勇士とまたがひ後の山に打登り高山嶺より凡五六十人よても動じがたき大石を二三人ツゝ力を合せ堀り起しさかより直下しよ墜しかくれは何かのもつてこゝゆべき山下よ多く作りならべたる家ともを片はしより打崩す城兵ども大は騒動するところへ清正得たりと足輕下知し鉄砲をつるべ打よ一度よとつと打ちつゝ續ひて内よ殺り入れれば城兵今の戦ふ力なく右往左往よ逃げ走り手に立者もなかりければ忽ち城を乗取ける其よりつゝひて城敷以上十三まで攻取元良哈人と擧取事七百余人味方の討死ハ纒よ侍七人雜兵ともよ二十七人と聞ける其中よ清正の愛臣貴田孫兵衛といへる勇士今度いさぎよく討死

したる子細を委しく尋るは傍輩なる森本義太夫といへる者と去る夜のことなるは清正の前におゝて女真國へ攻寄る前陣のことを云つたり互よ過言よおよんで既よ撃果すべき氣色なりしと清正中よ入互よ無異をつくりたるいへるとも心は遺難に残りけることよ意丹城といへるを攻ける時義太夫の腰兵糧の類までまづかよこれを調ひ未だ夜の明ざるは諸隊は先立て惟一騎馬を追手の門前よ乗りかけしところへ孫兵衛もつゝひて馬を馳來る森本の貴田よ向つて只今まで運奉よかよ必者の孫兵衛にあらざるや貴田聞ていかよも我の孫兵衛なり互よことよて高名せんと云乘て追手の門へかけ入らんよせしところへ城内より二人の男駈出て一人の義太夫よ渡り合しがやよめは五人引組けるが義太夫力や勝りけん彼男を組什し首とつて立あがる孫兵衛ハ今一人の敵と戦ひけるが其長八尺ばかりの大男よて頬鬚左右よわかち鐵の針よのべたるが如くなるが両眼本にしてさながら鈴を張るよ異ならずその聲大鉦の如くなるが喚きさけんで孫兵衛と劔を合せ陣隨つて斬合たりしが孫兵衛ハ元來劔術功者の早業なれば蝶鳥の如く飛めぐり彼男の眞向を背の土よよ刺る討死柱まで切こんだるよ何かのもつてころぶべきうんと云つて仆れながら持たる劔を孫兵衛よ抛け付たり運の極めのかなじさの孫兵衛が左の小脇に當り痛手なれば遂にたまらず死たりける

一説よ意丹城攻の時義太夫孫兵衛先陣を争ひぬけかけして敵城よ打入らんよせし時城内より

雨は如く半弓を射出すといへとも兩人少しもひるまず打入らんとせし時鉄木舌といへる元良
 哈人駈出やよの義太夫と引組たり鉄木舌の大力にて忽ち義太夫と取て押へける時義太夫の
 心はやき者なれば下よりわざしをもつて鉄木舌が胸腹を力まかせてさし通すさしもの大
 力も少しひるむ所と義太夫下よりぬかへし押へて首と取たりける貴田孫兵衛も元良哈人の
 毅々賀といへる者と組たりけるが毅々賀の八尺は余る大男にて二王の如く成者成孫兵衛が
 若したるかふとの唐の髪毛を引つらみ押つくるゆゑ孫兵衛わざしをぬかんとせしすのび
 たる故ぬけざれば心いふだち敵の上帯み手をかけ矢聲をかけ力にまかせて捻倒しけれども毅
 々賀のつかみし兎の毛をひささず二三度上より下なりてもみ合どころへ毅々賀の弟毅々
 理といへる者馳來り忽ち孫兵衛を引付し劔をもつて突殺しけるあれむべし孫兵衛の生年三
 十三才にて討死したりける義太夫救ひんともしけれども敵のため隔てられ救ふことあた
 りずとなんかくて清正の孫兵衛の討死を去らず居られしが阿波伊兵衛といふ者清正へかくと
 告げれば清正大よなげき早速人をつかひし孫兵衛が死骸と取よせ我膝へ首とのせさせむなし
 き額をなで涙をながし云けるの朝鮮の都入の時秀吉公へ注進の使者を命ぜしよ都城の軍
 大事なれば此使の他人より付くれよとありしがと大事の使者ゆゑ辨舌よく場なれたる者なら

での中付がたしとさま／＼すかして遣せし滞なくかへり來りし時我尋けれの日本へ参りし
 ついで汝が老母も對面せしうとせし時母の方への使をつかひしひまてて立寄申さずと深
 よく答へしが其後また母の無事にてありしかと尋ねけるは左の使の者まわりし時門まで立出
 ちけるの我の無事にてあれは決して心よかくることなかれ我がこととあもふて未練れ働さを
 なしなば生々世々口おしかるべし只弓矢とる身の名こそおしくいへ明日をも去らぬ老の身か
 ればかまへて我有とあもふべからず名と揚げ高名をあらはすべしとすゆよし使の者かへり語
 りいと答し折角眼と涙をうかめ語りしが母のあこむるべしあれども清正かくてあら
 ん限りの汝が母の我太切な養ふべけれ少しも心よかくることあかれと生たる人よ云とどく
 中されければ側は聞居勇士とはじめ心なき兵卒まで鎧の袖をぬらしけるかくて清正の孫兵衛
 が討死を無念よかもひ當の敵なれば毅々賀兄弟を討て追善よ手向べしと自ら意丹城の追手へ
 馳到り真先よ進み乗入らんとせし時城中よりも討て出こゝと大事を防ぎける時毅々賀の劔を
 廻し群集日本勢の真中へ馳入堅横は當りて戦ひけるを清正が兵見知りし者有て毅々賀なるよ
 しを告げれば清正大よ歡ひて一文字よ馬と駈寄討てかゝる毅々賀も心得たりと二々打三打う
 ち合けるが毅々賀の大力無双の者なれば組で勝負を決せんと無二無三よ組付けると清正少し

もひるまず組合しが忽ち首筋へ手をかけ力ままりせてまめつくるゆゑさそがの鞭を賀も働き
 えず清正の其まゝ曳と聲かけ馬上より投出せば從兵忽ち馳寄生捕まこそなしたりける是を見
 るより鞭々理兄を奪ひかへさんと八尺余りの棒を打振り日本勢を或ひに難伏あるひに打倒し
 て働さける故日本勢忽ち十五六人打倒され四方へさつと開きけるこれを見るより飯田角兵衛
 大い奮發し蕪地は馳來り大手をひろげて立向ふ鞭々理の是を見て只一打は打殺さんと棒振
 上力をさゝめて打おろすと角兵衛心得たりと身をかゝしそのまゝ馳寄鞭々理の肩のあたりよ
 手とかけ引よする敵も得たりと組付を角兵衛敵の上帯を力まかせて引かつぎ眞一文字に
 馳出し味方の陣へ駈戻りヤト聲かけて投付れば是も同じく味方の兵士駈寄て逐ひ細とぞかけ
 たりける清正は大い歡び鞭々賀兄弟を引出し首と刎孫兵衛が亡體は手向けられけるとあり是
 の孫兵衛が討死の説と聞侍る故こゝもゑるしぬいづれが是なるや尙後人の評と待のこゝ

清正安邊へかへる路軍の事

扱清正のすで元良哈の城壘と攻陸し朝鮮路に引返しけるが其夜ハ川の上流は野陣を張つて若又
 狄人の後より追來る事もあらんかそ其用意をなして待けるは其夜ハ何の子細もなく夜も明ければ
 總軍へ下知して押出しすで打立んとあしけるところへ女真國の者ども是を喰止めんどやかりひ



けん其兵幾千万といふ數をまらず起り來り清正の本陣へ無二無三は衝きかゝるの夥しき形勢なり
清正も侮るべき事あらずと自らばれんの馬印を振廻して下知しけるは幕本の士卒も手を碎きこ
ゝをせんと戦ひける清正大音聲よて鳴わめき首をば取な切すてよ組打するは太刀よて切れと下
知すれば物なれたる士卒共大將の下知も勇氣をそへ狄人を斬り殺すは青蕪を刈るが如くすれど
も敵猛勢あれば切とも突をも事ともせと手負死人を乗越躍こへ戦へける此時狄兵とも兼て用意を
なしたりける多くの燒草を持來り風上より火と放ち倭兵の方へ投かけしなしける故さしも益
き日本勢き戦ひ憚て見へたる時清正は馬上よて兜とぬき天照皇太神宮其他日本の諸神と祈り別
て弓矢八幡照覽あれ只今清正敵と戦ひ難義及び味方の兵はとく危しあはれ神力と添給へて味
方の兵士を救ひ給へと念じおひりて兜を着し鎗かつ取て自ら敵中へ馳入當るを幸ひ打倒し難伏働
きける折ふし今まで北風にて味方の方へ吹がけし煙忽ち南風とかいりて敵の方へ吹かけゝる故
清正が兵士是よ力を得て命を羽毛れ輕きよ比し喚き呼んで戦ひけれども敵は目よ餘る大軍なれば
いつ果べしとも見へざりける此時清正が運や強かりけん又日本の諸神應護をたれ給へけん大よ
暴雨降來り南より吹かくる風つよく狄兵ども眼を開らんやうあきゆあ少し足立まばらなるよ清
正の兵士得たりや應と捲立て戦ふ程よ狄兵大よ亂れて引退けば清正はかちもふやう此敵兵もどより

も驛たやすべき敵もあらずとおもひて相引よこを引たりけるが尙またひ来る事もやとおもひければ齋藤伊豆入道立本井上大九郎の兩人も命じ後殿をなさせ總軍をまよめ安邊として押行けるところもまた女真國の兵五千三つ、所より打て出て道の防げとあしけると大九郎立本の兩人打散し打く通りけるがこゝも女真國の中より七尺餘の大男二三千の兵と引てきたひ來りて戦ひをいどみければ井上齋藤も引かへし戦ひけるも此兵すこぶる強勇にしてなか〜切崩しがた〜見れば兩人胸を双へ敵中へ切て入四方八面も當りて血戦と敵兵の中より眞黒も鎧ふたる元良哈人身の丈七尺余りなるが劔を廻して打てかゝると立本苑合て一上一下落花未塵と戦ひけるが立本面倒なりと太刀投捨むづと組付ば敵も心得たりと互に捨合兩馬が間も堂と落上を下へと組合けるが兩人とも雨降も組合ゆるゆゑ傍の深田の中へすべり落たりしが立本やがて上より力をさしめて取て押へ首をかゝんとさし添と探りけるも組合し折落しけるもやあらざればいか〜せんとはばし躊躇とさ敵の劔かへさんと挿扎ゆゑ必死をきりめて咽喉へ喰付しかば何か〜以てたまるへき七轉八倒して死したりける立本もなんなく敵を喰殺し深田の中より這上り大手とひろげて敵中へ駈入を此有さまよ恐をあし女良哈人右往左往も散亂し四方へさつと退たりける扱又井上大九郎の立本の勝負いか〜とあんど敵を四方へ切散し人なき所を行如く働きけるところも身の丈

七尺五六寸もあらんかとおもふ大男面の眞黒もしてさながら悪鬼の如くなる者丈五尺計もして握り太なる鐵の棒と麻売の如く打振り大九郎を目がけて打てかゝる大九郎も向ひ四尺五寸の大太刀もて秘術を盡して戦ひどもたやすく討取がたくおもへければ大九郎あしらひかねたる体ももてなし馬をかへして逃出れば敵の大は怒り鎗の如き聲を發して蕪地も追かけ来るを大九郎仕舞したりと急もふりうへり大太刀もて横さまも薙たりければ敵の不意を討れ左りの肩より胸のあたりまで切付られ馬より下へ落たるを大九郎すかさず馬より飛下り押へて首をぞ挿たりけりこゝも於て敵の四方八方へ逃散を加藤勢追詰〜敵を討こころの數えれず扱齋藤井上の長追悪かるべしと人數をまよめ清正の跡をまたふて馳たりけるかくて清正の安邊へと急かれしが後殿の味方狄兵と戦ひ二時三もかくれければ心易かゝすおもひて木村又藏も人數五百と添てつかひしけるが途中まで相互に歡び打連うへり來れば清正も其働さを感ぜそれより安邊へと引取られける

秀吉公加勢と朝鮮もつかひさるゝ事

こゝも秀吉公日本の軍勢すでは朝鮮の王城まで責破るといへども大明の援兵定めて來り助けずんば有べからず其多勢なること必定せりよかる時よ我兵のすでは渡海する處十餘方なりといへどもなかり〜以て敵しかたからんか重ねて兵士を遣はし増田右衛門尉長盛其兵二千石田治部少

輔三成其兵二千大谷刑部少輔吉隆の兵二千五百前野對馬頭長廉その兵千凡て一万七千二百人と
 以て一列となしたりける淺野左京大夫幸長その兵三千南條左衛門尉その兵一千五百人中川右衛門
 大夫秀政その兵二千凡て一万五千五百人を一列とす岐阜少將その人数八千羽柴丹後少將その兵三
 千五百人長谷川藤五郎秀一その手勢五千人木村常陸介その兵三千五百精谷内膳正その兵二百片桐
 東市正直盛その兵二千凡二万五千五百人と以て一列となすこゝに伊達政宗の淺野彈正長政よつ
 て同じく今度の人数を召加へられ朝鮮渡海のことと請ふ秀吉公これを聞て召その意よまかせてこ
 れを許され淺野幸長と相備として渡海の儀をなさしめり長盛三成吉隆の三人秀吉公は修書をも
 つて朝鮮の王城に至りて在陣の諸將達とこれを示せりその趣に軍兵を進退することいよく今
 春命ずるところの如くよして先陣は清正行長相代つてこれを勤むべし其餘の法令先立て定むる處
 相違有べからず凡ての諸將士少しも怠惰は意を生せず朝鮮大明の間に横行しその軍法を正しくし
 て武備を油斷すべからず夫大明の衣裳文字のみ事として武備を油斷のところと聞諸將の勇猛なる
 と以て彼國を攻入らんこと何れ遠慮も無き事なれば我意安堵せしむる處なるが委細に石田等其旨
 を傳ふべき由をぞ書されける此時秀吉公は名護屋海邊の風輿面白き地を撰んで廣さ六七間長さ數
 千間よかよびたるを造作し疊の座板敷一所々々を十間と隔りて厨や竈爐の手遣よく器皿薪炭精米

掘梅の類ひまでことごとくこれを備ひ置てそれ後近郷は海濱より漁父漁女なども召集め此澳よし
 て大網と引せつゝ名護屋に居住の諸國の軍兵共ながくの在陣よつて氣の退屈せんをなぐさめ
 んどのことなりけりかゝりしかば其觸もまたがつて相集るところは漁獵の師凡て數百人よかよび
 けるが遙く小船をも漕出し大網を遠くより巻き寄せたりさしも廣き者海人ならぬところもな
 しかくて取集めたるどころの魚蝦海物濱沙の上より引上たれば濼活てハ沫を噴き鳴つとふ鱗共見な
 れぬ鬚尾の數をつくして恰も阜山の如く積上たる何よたとへんやうもなく目をかどろかそ有さ
 まなり第一よ大なる赤鯛一千尾をえらみて是を鹽水淹し早飛脚をもつて禁中よ獻上ある其外ハ大
 廳所と始めとし親王公家の所々まで不殘贈り賜りけり余ハ在陣の大名より以下の軍兵諸士の
 族に至るまで意よまかせて食せしむさればよやさしも廣き假屋よ居あまつて木の陰岩の上
 までも人ならずと云所もあくおもひよ料理して膾炙包煎品よつくし調味せずといふこと
 あし吳江の鱸丙穴の鮮味といふとも此外ハあるべからずとて各々歡喜の興と催し諸將以下ハ士卒
 まで在陣のおもひを忘るれば君恩の厚なきを感し秀吉公ハまた諸大名の中よ雜り出て笑物語
 るよし酒茶の遊をなし軍士の窮をなぐさめ給ふハ實に雄英大將名手段ところ聞へけれ

小西行長朝鮮勢と破る事

かくて小西行長の第一の先陣なれば朝鮮王の行在所へ押詰諸將お増りし功を顯はさんと勇み進んで押行す。又臨津をはなれて五里斗も行たりけん。おおもふ時朝鮮の將申吉を先鋒として都元帥金命元京、總監司權徽等五万余の軍を引、臨津まで倭兵を防んと押來る。よはしなく出合たり。双方陣を張戦といごみける。朝鮮勢の土地の案内ぐわしければ、かこしこより討て出て小西が兵となやませける。故行長大よ心をくらしめつくく工夫をめぐらし一ツの手術をなし陣頭に進んで味方よ下知して戦ひしむ申吉の元來謀なき者あれば、咄と喚て突かゝる日本勢もまばしり、挑と戦ひけるが。行長の兵よ下知して引退く申吉の勝も乘備ひを亂して追進む。二陣よ有ける權徽、應寅も兵を進めて追かけけるを金命元是を制しけれども耳よもかけす馳出す。故一人よして禁することあたひ。そこよ應寅が引卒したりし兵の常に北虜と戦ひとあし軍の虛實謀るをもすこし知りたる者ともなれば、應寅よ告て云やう味方の軍士今急よ追討こと謀れば可かざる。ところありよく敵の動靜を觀察して後よ進み戦ひ給へといふ。應寅これと惡ざま聞なし。惟へみ士卒共の戰勢といとよて言とこへにかこつけて戦ひをさゝむるとおもへ。何の遠慮も及ばず其頭取となつて口をきいたる者と捕へ三人まで斬たりける。金命元また是をも最もよかす。そのおもひながら此應寅の朝廷より加勢として來りし者よて自己の武威を立んとおもひなかく他の節制を承べき者よもあらじ。

とおもへば敢て一言の異見をも云ざりけり。又應寅が別將劉克良といふ者の年すでよ老して兵よ習へる者なりしが、つとめて異見とし輕くしく進むべうらうと云へるを申吉これをとらへて下知を違背して突りよ言となす。惡き者れば、かたかなとす。又果して是を切くとす。克良云やう我輩と結んでより幾回軍よまたがふ身の。豈今更に死を避るのゆえを以て心とせんや。如此よ争ふ者の恐くの國事をよしなく誤んとする。故なるのみと憤りを含んでそれより己が兵を引、眞先よ馳出す。申吉等も人數を引、日本勢を追かくる。小西が兵よも兼て相圖のとなれば、敵の追來ると見るよりわざと取物もとりあへず甲と落し兵器と打棄て乘たる馬よ鞭うち逸足を出して逃れ行申吉等この体を見るよりも實よ逃ると心得れば、何の思案もあく備ひを混して追かけたり。既に兩山相懸へわづかよ一條の廣路ある所よはや五六町ほど。行過ねらんとおもふ時兼て小西が先だつて宗義智と己が舍弟主殿助木戸作右衛門の三人兵を二手となして左右れ山よ伏兵とあつて隠れ居たるが。今敵す。み此所を過ると見るより時分よよしと貝金太敷と一度よならし鉄砲の筒先を揃へて打かけ左右より起り一手の山路の敵を後よりとめ一手の朝鮮後軍のつやくを立切てこれを討はじめ。敗せし小西が兵も頼て備ひをもりかへし朝鮮の兵を中よ取てめ責立れば、朝鮮勢大よ驚き崩れ立を劉克良のすましも疑がす馬より下つて吾死すべきのところ愛よありとつよやさあが矢束を解て推亂し弓

の弦端濕しざしとり引つめ日本勢を射斃しける此時小西主殿助馳寄克良を討んとす克良是を見て十分引まばり切て放ての主殿助が胸金物よはつしと當るされども鎧の札やよかりけん裏かくまでに有ざりける克良二の矢をいうへんとなしけるところへはやくも主殿助馳寄兜の天返とまたか切付たれば何かいもつてたまるべきつるよ爰て討れける朝鮮に後軍討もらされの者どもにかへし合せて敵をさへ大將れ死を援いんとする心あく惟はしりよ走りて右往左往も遁れ去り日本勢討るゝや數えれず申吉も今ハ叶いぬとて覺悟なし劍を振て日本勢の中へ切て入ればしがほとり戦ひしが亂軍の中よて討れけるまた金元應寅ハ此有さまを見るより大英氣を喪ふて顔色青菜の如くよなり如何いせんと詮方盡て居たりける時折ふし商山君朴忠愼といへる大臣も適來つて陣中よ在りけるがかゝる有さま見るよりも大驚き馬よ打乗走り行を軍兵どもハ只金元元が走るぞと見るより元帥すで走り給ふよとなく逃よといふを聞より朝鮮勢誰か一人とゞまるべき我先よと散亂しければ金元應寅も今ハ是までなりと是非あく朝鮮王の行在所をさして走ける又京畿監司權徹ハ加平郡よ入て亂と避けたり日本の軍將こゝよかめて勝よ乘西の方よ下り伐の勢ひまともつて竹をわるが如くよ見へよける

李鎰行在所よ到る事

扱また李鎰ハ忠州よ有けるよ日本勢のため忠州の車破れければ是非なく江を渡り江原の堺よ到り其より道を轉りて行在所よ至りける此時朝鮮の諸將どもみな南方よ馳向つて敵を防ぎたりけるよ或ハ討れあるひハ又逃れ走り今ハ一人として涉駕よ相またがふの者なかりよ日本兵將ハ日々よ盛んよして今よも押寄あんよと騒動とるの折なりければ人々まさは驚きかろれ頼みなき折よ當り李鎰がこゝよかへり至るよ李鎰ハもとより武將の中よも重名のある者なる故破れ奔し後といへども人々そのかへり來ると聞よりも忽ちよ意つよくなりみな大に歡びける李鎰まばく軍よ打負て逃奔しりし其後ハ晝ハ荆棘の中ようくれて倭人の多き目よふせぎ捕へられじと忍路の風雨を陵ぐ便よ平涼子一ツを頭よ戴き身よハ白布の衫を着し草履の穿たるをやうよ足よ着け形容憔悴せる有さまよてやうよ敵中多くの艱難と逃れ來る物がたりを涙ながらよ語るを聞者嘆息しまよ此比ハ君一人より民百姓まで身の變改の憂ひよあふ定めなき世のならひかなと打驚かぬ人もなし柳成龍ハ李鎰よ向ひ只今こゝよ集會の貴賤いづれもとも君よ依てたのよとかけ鉄楯をつきたるおもひをさせるよ如此枯槁衰體ハ風情よて何ぞ衆人の志をまつめ堅むることを得べきやと成龍藍色なる紗衣を取出してこれよ與ふればこゝよ於て一座の諸大臣もあるひハ毛笠をあたへ或ハ銀頂子彩纓をあたふる者も有て當面衣服の飾をあらため換ひとへ新

粧の大將軍とありたれども靴一色を與るものなき故に櫓も單の履をつけたりける成龍笑つて錦衣と着せる大臣として草履をはけること此稱のすやと云ければ滿座笑ひどよめきまはしの憂と忘れける

李鑑義統が兵を防ぐ事

こゝに碧鐘の兵士任旭景ありたしく來り報じて倭賊すでに嵐山まで至るといふ柳成龍の尹相もむかひ倭賊の物見すでに江外に至るといへば定めて方々の渡場までも穿鑿せんよのさのまりたりそれよつぬて此間詠歸樓の下なる江水の水岐わうれてニタすじとなつて流る故に此所水淺して涉りやすかるべし萬一賊兵我民ととらへ得て案内者となし暗よこを渡りてよのかよ至るほどあり此城もつとも危うるべし急よ李鑑とつかひし往き向つて淺瀬のところで防がせもつて不測の憂ひを警め備ひざらんやと云ひければ伊公も是を然りとし即ち李鑑をつかひとべきま定りて是とやる李鑑が率いるところれ江原に軍兵わづかよ數十餘人有けるよ他の軍兵七百餘人をさし添たり李鑑はすでに合懸門の外に座し兵士の點檢をなしたりけるが如何意の慮したりけん運々よかよび行列をすゝめかねて居たりしと柳成龍の事急ありとおもひし故人をつかひして李鑑が軍の發したりや見て來れと云ければ使者の命をうけて出行しが直よ馳戻りて云やういまだ門上れ矢倉よ上よ



ありと云柳成龍のまきりよ心をいらだて尹斗壽へ此旨を告やりて急よ李鑑を催促せしむ李鑑とて
よ行を發すといへども道の案内をらざるゆえその方角をあらまづて江西の方よ馳向ふ中途よして
平壤城の番兵の座頭金胤といへる者が外より來るに出會てその道と問ければ金胤聞てこれの方
角らがひたり此方へ馳よれい得とて眞先よ馬を馳せその道筋と案内なしける故李鑑が人數馬よ鞭
とくわへて馳たりければすてよ萬頂臺の下に至りたり平壤城をはなる事わづらに十餘里はか
りよして江南の岸頭と望と見れは早日本の兵將數百騎馬よ白泡はませて駈來る此筋へ馳向ふは
る黒田の両手の兵なり江中の小島よ居よなせる村民ども日本人の寄するを見るより慌て騒ぎ呼な
げさて我先よと落失けり李鑑は是と見るよりも兵精の射手二十餘人をすぐりて早く島中よ入これ
を速よ射立よと下知すれば軍士ども日本勢の猛勢なるよおそれをなして進みかねりしかば李
鑑は大笑り憤勇の相をあらはし腰なる劔をするりと抜て一人を斬らんとこれに兵士ども大お
どろき我先よとすくみ行島上よ駈上り矢先を捕へて一度よ射立すき間あらせず防ぎけるゆえ義統
が先手の兵ども六七騎馬より下へ射倒されければ日本勢も此勢ひよ僻易しつぬよ岸頭をば引退さ
たり李鑑はよの一軍よ勝を取たる心地して彌兵をはけまして此所を守りける

遼東の李時華朝鮮を窺見る事

大明寮東の都司官李時季の朝鮮王倭國の難をうくる事既急也と聞へけれどもいまだ大明の朝廷より兵を出すべきの命令に到らざれども朝鮮國より天朝の援兵乞ふこと去きりよして又寮東へもこれ事を急々よあげき告報すること數度よあよべき大明の命令もなくして兵を出すことかなねば兼てその仕度を平調へおきてそれ一左右と待たりけるがそれ先立て日本人の情をも搜り見取ひの虚實をも計りざるべきためとて鎮撫官林世祿といへる者をして平壤城へつかへして朝鮮に君臣の動靜を窺ひしむ朝鮮國李昭のいそぎ林世祿と大同館ふこれをむかへて早速對面ある此時に柳成龍の去ぬる五月よりして左承相の官をやめられたりしが彼が忠心の違ひざるを依て再び官を叙せられ此日當りて大明の將を馳走する役人たらしむ遼東の都官倭人の來つて朝鮮を犯伐するにありと先たつて聞けりといへどもその月日を重ぬる事未だ久しき事ならねば急なりといへども猝遽にして如此なるべしといへどもいざりしよ京都の守りつゝなまかぬ王の親とよ西へ遷ると告るのみか既日本兵はや平壤城境内に入りぬといふを聞て甚だ是を疑ひその疑心の餘りよハ或ハ朝鮮かへつて倭の導引たれども大明の聞を憚り倭兵のため寇せられて偽りて没落せりといへるハ皆是謀斗たんとあざいふ族も多かりける故に世祿一人使として今來れるハそのやうとて窺ひんためなりけりと聞へける柳成龍の馳走人の役たれば世祿ともろともは練光亭の

上に登り敵の形勢と望み察するよ一人の日本の兵卒江東の林木の間より忽ちあつたれ又乍ら隠れて遙く城れやうすと窺ひしがまばらくあれば同く倭の兵三三人跡よりつゝひてあらわれ出あるひハ座し或ハ立てその意安閑たる風情をなすのさながら行路人の休足するは異ならず柳成龍ハ林世祿は對してあれは覽せよ倭軍よりさしつかぬすところの斥候の者あり日本人は意もとより巧み詐り多くして大兵後ありといへども先立るに物見の者をもつて遠くすよませ敵の動靜を窺はせよろの人數三三人の間よすさす是を小物見といふといへり若彼等少し兵とて敵の方ハ油斷されば後より大兵つゝき來りて攻撃せよとあせりとかや實よゆるかせよすべからず偏ハ天朝の援兵を給はらんこと願ふところなりと憂ひ恐ふれば林世祿もこれを最と同じ急ぎかへりて天朝は懇ん急ぎ馬を鞭うつて寮東さへりへりけるすよ日本勢平壤の境内は入のよし聞へければ平壤守りのため左相尹斗壽は命じ都元帥金命元巡察使李元翼等よ令して府城の守りとなさしめたり是より數日前よ平壤城中に籠るところの人民倭兵の責來ると聞て車駕他所遷らんとすといふよりかの王李昭は命あつて大同館の權門に登り城中の父老をも召され此城を明け他へまた陸幸路らんとすの誰がかく云出したるむことなるを嘗よりかゝるは沙汰ハあし只何日までも此城をかたぐ

守り給へんとの上の慮心なれば意やすく存じいへし示し給へば父老どもも館下へ進みずとて東宮の仰せばかり承りて六民の心よむこれと信じ申すまじ必ず聖上の親ら御出あつて勅命なれば叶へからずと白を揃へて奏する故是非なく朝鮮王館門を登らせ給ひて承旨の官を志して此もねせらるゝと父老ども數十人堂下へ拜伏して勅命を畏りて退きけるこの故は平壤の者ども大に歡びそれより方々人をつかりし老若男女山谷の間へ隠れ居たる者どもを招き集めんとて城内へ入たれば又城中へ入満て元の入居となりよけるまかるゝ日本の斥候時々大同江邊を形もをあらはしけるよし潜言を聞より諸臣悞を生じ宰臣盧稷等廟中の神主をんと取もち巴が同志の者どもを引つき道を求めて落行んとす城中の民ども是を見て大に怒り刃と取て盧稷等が通んとする路頭を遮りおもひつゝは打たゝさすては廟社の神主をも地土はたゝき墜され逃行けるまた堂上より向つて大音へ響りけるの汝等平生國の祿を食しながらその政をも正しうせず如此は國を誤る今また民を欺きてつたゞ此城を守らんとすと云たるは間もなく落行んと欲するやと云ひ響り怒り兵仗をもつて人へ遇び人をたゞき貴人商官と見るときはなほつゝ強くこれと打婦女幼稚の等までおとなし怒髪さか立號ひけるのかか城を棄んとせんは何故我等を欺き降んで城へ入賊の手へ殺さるゝんとはかれるやと聲を呼りあける故諸大臣みな色を失ひなれを棄つれども復は止ことなむ

柳成龍おもふやう此有さままで亂民どもの庭中まで押入らんかと心をいたため門外の階の上より立出てその中をつくり見れば年長じて髯多き男のあり如何にも此亂民どもの頭と見へける故成龍方ち手をあげて是を招けり其男乃ち進み來るこれこの下役人と聞かける成龍此者も諭して汝汝等如此は憤りて發するの實は忠義の志と云つべし感心なきおもしろずと云ふは是よつてかつて亂をなし宮内をゆるがし擾とよ至れる條甚だ以て相違駭入たることをなかり注上すて汝等が爲は龍城のことと以て許され給ふ上の何の違ひかあるん早く此趣きを以て衆人へ諭し此騒動を去つむべし若また退かすんば汝が輩重罪なれば赦さずと云ひければ彼男持たる矛を打捨て手をおさめつゝしんで云小民等城を棄るの説を聞てその憤りあはれかたを云りよと大に悦べる顔色して衆人を引退せたりされども猶朝臣の日本勢の來らんとことおそれ出て走らんといふより外の量見もなかりけり中にも寅城府院君鄭徹去きりよ城を棄て他へ遷幸あらんことを相議る柳成龍さまつゝ理をつくして是を止めまばし籠城する内よの太明よりの援兵も來らん今城を棄て落給へんよは是より義州の地に至るまで更は據るべき地なくして其勢ひ必ず國を亡すに至らんといへば左相尹斗壽が此議を同心ぬ柳成龍また鄭徹もむかひ平生常よかむひしの公康

概の愠を發し難易と避けず國家のため身と殺して寇を防ぐべき器量あるといふもいつるに豈
思ひんや今更その議の如此ならんといはげませども一言の返答もなさびこそまた尹斗壽の彼
文山が詩を吟詠し我欲三借劔斬三佞臣といふを聞郎徹りつぬよその座またまらず大に怒る顔色し
て袂を奮つて立去けり

清正征東使伯耆將軍を擒とせる事

かくて加藤主計頭清正の兀良哈人と打破り安邊ちかく引上來りける處は朝鮮五道の元師征東使伯
耆將軍といへる者此道へ落來り瓶金浦といふところへ隠居て去きり軍兵を集め清正の歸路とさ
へざらんとするよし聞へければ清正もふやう味方の兵よくらぶれば敵の自國のなとゆゑ定て水
勢ならん兵の少きを見すうされれば戦ひ難義なるべし敵より寄る先は此方より押寄せ打散さん
まかじと思慮をなし諸將へ其旨を告めし夫より所の者を案内者となし先陣の嶋平治井上太九郎
小代下總守の三人相備となし征東使が籠りたる島鷄館といへる山へ押寄る此時兀良哈人月縁子と
いふ者伯耆が催促よよつて兵を引て島鷄館へ來りけるか今日本勢の押かゝるを見て横合よりかゝ
り來る清正が家老加藤與左衛門黒草威しの腹巻は中段繫糸までおとしたる大袖つきの鎧を着
し双渡り廿尺九寸の菊文字の長刀を取て手勢百人餘りを下知し向ひ合せて突かゝる兀良哈人

半弓をきびしく射かゝるゆゑ味方の兵すゝみかねて見へたりける時赤星太郎兵衛手勢を引て馳來
り此体を見るより鐵砲を四五十挺つるべ打よ放ちかゝれば先よ進みし兀良哈人三十四人をみよ
打倒され色めき立て見へけるよ加藤勢得たりや應と無二無三と突かゝる故つねに退立られ引退
其中より大將月縁子の用と打振取てかへし戦ひけるが加藤與左衛門は是を此中の大將と見てけれ
ば馬を馳寄渡り合えはじ互に挑み戦ひけるが双方ふみ込相突よまたりしよ與左衛門が長刀月縁子
が内甲を突たり月縁子が弟の與左衛門が鼻紙入の上よ當りたりされとも具足つよふして裏かゝす
月縁子の内甲を突れて馬より落るところを與左衛門長刀を取直し丁を切れば左りの股をまたい
よ切込たりければ何かはもつてたまるべき大地へ堂と倒れけるを加藤が郎等はしり寄押す首を掻
たりけり殘る敵ハ散々よなつて逃行と赤星太郎兵衛與左衛門追かけ敵を討て二百三十一人と
記したり扱又嶋鷄館へ向へたる井上大九郎 嶋平治小代下總守の三人の勇を進んで攻かゝる清正
ハ旗本の勇兵よ鐵砲を取持せ歩立となして後よ詰め曳を聲と出して攻入らんと征東使伯耆の
いまだ催促の兵も來らず一万餘の兵を下知して愛を大事と防ぎ戦ふ清正の自ら陣頭よ馬を乗出し
兼て命じ置たる鉄砲の兵に下知し一度お打がけさせつひてとつと押かゝり坂を二三間打破りて
喚きさげんで突入れれば征東使今の叫びと劍を振りさし一方の血路を開き鷄關の方へ進たけ

るを小代下總守 鷹 平治井上大九郎追かけつぬ。伯耆を生捕繩をかけ清正が前へ引來れば清正大
 よ歡ひ扱討取ところの首をも實檢じ人馬の息を休めけるところも元長哈人不骨木といゆる者五
 万餘りの兵を引半弓五千張を先よ立是も伯耆が催促よまたかひ來りける道よ合戦のよじを聞急
 ぎ馳來りしが伯耆擒となりけるを聞といへとも元來 剛強の勇兵なればすこしもおそれず日本八
 を討取て味方の仇を報せんと八尺九尺も餘る大男共眞黒よなつて寄來る加藤勢是と見てとて道
 れぬところを覺悟をきめ先手配りをぞなしたりける先手へ加藤與左衛門水野三郎左衛門原田五
 郎左衛門天野助左衛門其勢二千餘騎にて鎗と小膝よのせて敵かへらば突崩さんと敵陣を白眼で扣
 へたり次は加藤清兵衛小代下總守近藤四郎右衛門安田善助千五百餘騎先手崩れなば入かへらんと
 勇氣をふくんで扣へたり左りの山の尾さきよ山口與惣右衛門齋藤立本大脇治部右衛門三千余入
 よて横鎗を入て敵を切崩さんと待かけたり三陣の清正の本陣なれば妙法の旗を山風よ吹なびかせ
 て銀のばれんの馬印を日よかきやかし其下は清正の銀三尺の立帽子の兜を着せ大兼光の太刀を横
 たへ例の大十文字の鎗を持つて八方へ眼を配りて扣へたり左右よ木村文藏などといへるは騎當
 千九勇士三百余人得物よを捉て大將を守護する有さき實は勇をじりを見ふたりける元長哈の勢
 五万余人眞黒よなつて押かゝると加藤與左衛門兵よ下知して曰く敵を聞かかく引寄一度は鎗を入

よとて備ひを眞丸よし半弓を防ぐ用意をなしてまづまりかへのは待かけたり其時左りの山の尾
 さきよ扣へたる齋藤立本山口與惣右衛門大脇治部右衛門は合戦をはじめ鉄砲を打かけ煙の下よ
 り齋藤立本大長刃を打振眞先よ突入堅横よかけ立血戦す山口大脇も續て進入相戦ふ是を見加藤
 與左衛門味方は下知して敵中へ乗込勇を振口で取ひける敵の目は余々大軍あれば切れとも突進も
 とどもせず戦ふ程は三陣の大將加藤清兵衛小代下總守も味方をたをけて突入此時清正の木村又
 藏井上大九郎飯田角兵衛の三人よ下知して右の方よすこし小高き所へつかぬ敵の横合はり鉄砲
 を打かけし下拳下りよ打せける故死良人の兵少しまらけて見へける時清正時分よよしと自ら眞先
 よ馬を馳て敵中へ駈入當るを幸ひ打倒し突倒し働きければ味方の兵何かの少しも猶豫をたふさ
 んじと八方へ當りて取ひば木村井上飯田の輩是を見て大將よ先を越れて殘念なりと誓はあらば
 同じく敵中へわつて入和良哈勢日本よても名高き加藤の勇臣等よ捲立すれ驟くうち五六百討
 れしがば今の物崩れとなつて引退くを味方の勝不乘て還討けるを清正の是を制し人馬出ぬも勞れ
 たれば長追なすべからずとて人數をまとめて休息なして其夜の此所よ野陣を張翌日早天は手負た
 る者の中よかこひ勢ひ堂よ盤として陣拂をなし打立んとす此瓶金浦といへる所の日本よ乾
 當りて雲晴日和よき時日本よ齋山見ゆる此所人家の屋根本よはみ太尾おか下とらひ有ける

せび玉は朝鮮の大田内いふ處がよき清正を圍む百餘騎の隊ももきものせぬ加藤軍の勇士
 とも伯軍が云々を懸けたりと涙を流しぬ無多けるがもあつた相なる中は阿波伊兵衛允
 鬼四郎兵衛二人は少くも涙を淨りもせぬ常の如くも存じかた人を見せぬれりあつた相
 かがり中あつりける時側なる者あける左様は縁ふな此間人狼眼といふは縁の哀な事なせ
 も涙の出ぬ生れつなきなり心よは哀なる事の人をも同じ事なせり去ける此後朝鮮在陣中哀れ事
 三度あつて清正も涙を落さねしかども此間人少くも落涙せりともよぶかめて人少くも狼眼も存
 じかと善き人々の笑ひけるとなる去程は清正は十月十四日兩王子なりびし后連を始め大臣都合
 百余人を引で吉州まで來りて進下といへるともま宿陣せりかゝる所は橋天といふ者三万餘騎
 梁養山は陣して外は一方の勢もつて清正ががる道とさへ討たてなすまも聞ひければ
 清正は兵士もがりの旗もあつた殊に度々取ひる手負は多しといふせぬと時議あける時清正
 が少くもひるまふ云われけなは明朝の合戦は我死手にあつた横槍は吉村吉右衛門出陣宮内少
 輔森本義太夫仕るべし三番備加藤清兵衛山内與物右衛門加藤美作守長尾安右衛門片岡右馬允庄
 林権人三番の陣は下總守佐々平左衛門つとむし其外は兩王子を誓固とべしと手配をさだめ
 ける時吉村吉右衛門進出云ひるは明日の合戦は我先手とせ自身もあつた結ぶるとも藤丸はは得

とも昔より大將の自ら軍の流をなしをなし給ひしと承りりす刃々十はあやまらぬも有勝の第
 一日本の影もあつて渡河の諸將取ひ難義ならん此義を決てあかるとから伊藤は先手を蒙り敢
 兵何五騎來るとも守矢八幡原の陣を打散しあつたと勇氣をいふは心見つけられ清正大は敢
 左より肥前守を添て用へる人あつたはあつたて夫々の兵練の用事なすし勝率もあつたは
 の下明けて十月廿四日の早夜は備ひあつたは押出し梁養山進み來りけるは梁の如くは三万餘騎を
 したかひ別々五萬の兵を五武衛よりする者には及びて日本人の志は進筋へ出たは日本勢の陣を
 留めしは五武衛の一方余騎と三番に分け半引五百人と先出心備ひを命ぜりかゝる來る加藤
 が先陣吉村少しは狂が鉄砲の兵を先に出し敵より射かくる矢をしらるる傾けぬとの事敵は聞
 近く雨降一度はあつた故らあつたは群集したる敵兵も怒り三三百人打倒し朝鮮勢も立て見
 へける時吉村の時分はよき時を命ぜり入ると平知となし自らも先出心入るは山内將軍を頼ひて
 兵士何の心も懸念あつたは黒旗を圍ひ血戦を朝鮮勢大軍をとりかへるも加藤兵のためは進り
 立られ四五町斗進立は縁は清正の馬もあつたは陣中あつたは此陣中あつたは清正と藤丸
 あつたは吉村吉右衛門のあつたはあつたはあつたはあつたはあつたはあつたはあつたはあつたは
 水の中より山内といふは者進來る日本大軍打倒し朝鮮勢を吉村吉右衛門の陣中あつたはあつたは

宗公馳來り打本かゝる山春等勇を振収本職の影は屋敷面倒なきを得物を投擲引組も忽ち馬島
 間ま堂と落上を下へと捨合はるゝと云ふ阿波伊兵衛取來り山春が首を打落しける此時梅次
 が二万騎山の上より烈風の如くおびと下り來り加藤勢は突かゝり各處に備へたる山岡肥前森本職
 太夫出田宮内少輔を見急ぎ備ひて探出し鉄砲を百餘挺も打放公放あけ煙の下よりおび
 噴せ斬入はは陣崩りける加藤清兵衛中林準入山口與惣右衛門長尾安右衛門加藤美作片岡若馬允
 梅次が横合衆無二無三に鎧を突たりけるこれよつと朝鮮勢大軍なればは陣崩れ加藤勢の必死
 の太刀先は捲り立ちられ色めき立で見へける時三陣よひかへし小代下總任々平左衛門徳もなす又聞
 突せ入清正が旗本より木村又藏赤星太郎兵衛飯田角兵衛などいへるも騎當年の勇士得物
 と振つて敵中へ馳入當をさしわひまのさりと削り火槍を打ちて戦ふは梅次は巨万騎勢を
 斬立られ討ち者多かりければつらめかなはは加藤勢の旗と連るが馬島に
 しゆる清正をこれをかたくり制し加藤與左衛門天野助左衛門を後殿にたもたせ勢はゆる動められし
 て橋州の城へ進みける加藤與左衛門の地り居し錦島加藤守相良宮内少輔六万五千餘騎は此橋州
 まで進ひまを田原も思ひけるが年清正がかり來るを聞て大に驚び早稲城へ入れぬ直
 手は手を取れぬに旗をなげもて錦島へ逃れしは連と永興と別れ七出馬島を月が開け新地れす

音信もなければ扱ひ討死なし玉へけるかと明暮案事わづらひしは先達て元良海よて阿王子をいじ
 め多々の大臣を盛捕正へし世の日本へは往進の便も承る漸く案必かなも加藤勢も此度彼
 地までの涉戦功天晴さぞかしとおもひあるなり及ばれければ清正も和良海表の各取返すに
 て阿王子を擒とあむたるを聞り阿王子は錦島相良の陣を破せしむれば加藤勢も清正
 が働きの感に扱ひ斬り清正に向ひ身と及せぬせられたるは城をさしき置はる討夫へ入る
 つでは休息あるはもとて家來も案内させければ清正の太に敵ひ其意もまかせ候と引世新地果
 長途の勞れと休めける此地は殊の外豊饒の地にして洛陽もかち地なれば此所より御邊を
 十五日程が開清正が所領として米穀などをばとばせ軍用も備ふ扱はれた所は城を破れは是は
 もし先橋州(揚州)のともありの城は加藤清兵衛片岡左馬允加藤備前守野五郎左衛門藤田五郎
 左衛門天野助右衛門山口與惣右衛門七人を大將として兵千五百人入置たり織田は加藤四郎左衛
 門岡田善右衛門佐々平左衛門は五百餘人と添て守りしは金山の加藤與左衛門出田宮内少輔并五
 大九郎五百餘騎よて是と守る律法といふ所は小代下總大脇次郎左衛門長尾安右衛門は五百人
 の兵をさしけ守りしは福井の吉村吉右衛門堤権右衛門手勢を引玉是を守る清正の地は
 城と橋と在陣中錦島も原清水高原永興定平洪原城等も家臣を分け守りしは加藤清正の人

大軍なすといへども馬の足を立棄けるを栗山後藤の大軍の中を東西に断廻りひとづよ大将又粗んと働さけるよ了得の大軍も是がためと捲立られ物崩れとなりて散亂し大川へ追ふたされ命を落す者數しれず李時言も崩れ味方より引立られ川を越て道れ行黒田勢勝に乗つて追かけけるよ栗山後藤これと制し大軍の退ぶことなかれとて輕兵と引上もとの陣所へ引取ける今日の合戦大敵といひつゝ味方のあし刃死一生の大事なりしを栗山後藤衣笠毛利黒田が發手を碎き大軍を切崩しけると比類なき働きありと感せぬ者なかりける栗山備後の左りの高股右の小備内甲四ヶ所なき手を負たり其外將卒とも三四ヶ所づゝ手と負ざるはなかりけるかくて又黒田長政の葛原の陣にて居られけるところは狼川よりの注進を聞とひとしく兵を引卒し揉まもんで馳着しかと早合戦もすゝて味方の手負なごと療治あして居たるところなれば大敵び直も栗山が陣所へ入りて中されけるの何とて卒爾に合戦と好みゆと云れける時備後の手負たる故俤み寄かきりて居なむわが眼を怒らひながら敵押寄ゆよつき合戦仕ゆと返答し不興氣なる体なりけるよ長政涙とながし左様も立腹の尤なご卒爾の合戦をして萬一其方どむ討死などなすならば此身政を誰か補佐すまき未ゆとよませしなり四方も餘る大敵を纏よ二千餘の小勢もて打破りたる働き今にはじめぬ事ながら比類なき手振なり必長政が言葉も必まかぬと遊軍を伴も問われお人殺儀の小器くんと見廻りて



また栗山が小屋へかへられける時先手の將みなく來りて合戦の物語りなきしけるも黒田惣右衛門
門注進狀書なをしのことをや出しければ長政何故辭なししやと尋られけるも栗山さんい敵の
四方は余の大軍味方二千斗の小勢ゆゑなかく勝べき戦ひあらねば只討死と覺悟ををししへば
あといよて黒田の者ども死すべき軍は加勢をたのみしあき言れんことの口おしさままたいめ
あをし此地の事の心やすかるべしとや上りまた假令君加勢をあし給はんも此所より葛原まで
九里の行程を注進なし夫より人数と出し玉ひてまた九里の道を駈着玉ひ、往返十八里の道を駈
る間もあれは時刻うつりてなかく合戦の間は合さざれば右の如くや上しありと云ければ長政
を始め將卒ともよみな感涙をながしける此度の戦ひは栗山が家人山本甚太夫津田才藏栗山甚太郎
池田久兵衛などをいじめ十三人多くの敵と討取手柄をなす後藤又兵衛が家人も古澤金馬等入
九人も高名となしければそれよ褒美を與へられてその軍勢をあぐさめられける

小早川隆景 香州城よりこむ事

爰も又小早川隆景の朝鮮の王城に入て諸將と會し評定れ上平壤へ打入らんと其用意なしける時
香州へ籠りたる王僧林多くの兵を集め釜山浦の日本勢を攻んとするよし聞へければさらば先香州
城を責べしとて惣大将毛利輝元中渡され目付として精谷内膳正新庄新三郎太田飛騨守をさし添ら

れ小早川隆景立花宗茂久留米待從秀包高橋筑前二万五千餘騎各手勢を引て晉州城へと進ける小早川の諸將も先立汗馬と早の急さけりかくて牧使王僧林の金山の麓も柵とふりて一万余の勢を引て此ところも出張して待かけける小早川が先手高橋主殿助栗谷四郎兵衛三千余騎よて進みけるがはしなくこゝへ來かゝりければ牧使が兵の待もふけたることなる故所々も立わかれて矢だねとおしまずさし詰引つめ散々も射る高山栗谷が兵のかゝることゝの夢もあらざれば色めき立て騒ぐところを一万余人の牧使が兵咄と喚て切て入日本勢をばしが程の戦ひしが大軍も揉立られ一度も崩れて引退く牧使が勢勝も乗て追來る事甚だ急なれば味方多く討れける故栗谷が勢の中より野島掃部白母衣りけて大鍬形打たる吼を著し大身の鎧を携へ取てかへし追來る敵を忽ち五六騎突殺し勇と振つて防ぎ戦ふ野島と討せまゝ村上河内守木梨平左衛門同じく返し合せ防戦すされども敵の大軍味方の小勢よて殊も崩れ立たることなれば右往左往も敗走す野島村上木梨の三人三四度かへし合せて引退く高山栗谷も是非多く五六町退て主従六騎よて馬より下り立急ぎ本陣へ注進す隆景すこしも騒かす兵に下知して汗馬も鞭を加へて馳ける故津横目太田精谷利庄も馬を馳て進みける故王僧林の遙よこれを見て急ぎ兵をまとめて金山へ引返しける隆景が旗本の先手井上五郎兵衛備を乱さず関を作り鉄砲を打かけ責登る隆景の旗本勢を引て小山の有けると幸ひと是よ上りて

陣と取敵山を下りて其後を討んとひかへたり木田飛騨守新庄精谷の西の方の横合より責登る王僧隣か勞も必死となつて追下し追上られて戦ふこと夥し井上が勢の中より深野平右衛門佐世勘兵衛尾島丹治早見式部等各得物くを携へ喚き叫んで突登る此時栗谷五郎兵衛高山主殿助の兩人の主従七八騎なれどもはじめの合戦も負しことを無念におもひいかよもして牧使の旗本へ切入王僧隣と組んと主従心を一ツよして牧使が旗本を目かけ轡を双べ死ものぐるひに切て入當るを幸ひ切伏難伏七轉八倒して働きける是よよつて牧使が旗本四度路よなつて見へける時隆景味方よ下知して惣かゝりよ攻かゝるよよゝゝかゝるて朝鮮勢つめよかならずして惣崩れとなつて敗走す栗谷四郎兵衛の牧使も逢んど敵中を駆廻りけれども出合す逃る敵を追かけ東の峯へ來りしよ百人の朝鮮人一トかたまりになつて落行を四郎兵衛これと見て牧使をらんかと心よ歡び善地も馳出し敵中へ切て入敵四五人切て落し王僧隣をさがしけれども此中よ有ざれば詮方なく主従六騎敵數多討取て隆景の手へ引退さける扱も隆景の備を亂さず金山へ押上りける故朝鮮勢つめよ打負晉州さして引退く續て攻入べしと勇とけるを隆景の智勇兼備の老将なればかく制して大敵を経ては合戦の實よ大事の勝負ゆゑ深入りて味方を損すべかゝらずとて陣を張り物見を出して晉州城の勤靜を閉しむるよ五万余れ大軍よて用心さびしく守りけるよしなれば隆景も陣をかたくなして日々城下近邊を

放火して兵威を益めし對陣して有けるも王城は有ける惣大将秀家三奉行より使來りて晉州表を引
拂ひ王城より五里隔たる開城府といへる所は戸田民部少輔在城しけるが入りかへりすきよし云
越けるよつき隆景の兵をまとめて引退き開城府へ至りて戸田と入りかへり此所を守りて近邊の一揆
とまつめて武威をふるはれける

行長書を朝鮮王にかくる事

小西撫津守行長は數度軍功を著すといへども王子を捕へざる事なほめて甚だもつて恨とせり
此ゆゑは清正と其間もつましからず遂は心の隙をなすまことと古より兩雄の争ふふならい
有と云置しつゝさる事と聞へけり行長もそで平壤の境内は打入り兵共とまのく屯し止めたるも
大明は援兵の來れる事も近きもありと風聞すれば大明の兵來るにわめて一戦は功を成就するが
またの奮ひ戰つて討死し殘る名を千古に留るゝの此二のものなほわめて其運命を極めんとおもひ定
めて人を王城をつかひし諸將の方へ逃るやう是より段々攻討て鴨綠江を打渡り直は大明へ打入
んこと最も容易かるべきことなり諸將も後援をなし給ひ吾必ず前鋒たらんと云やりける諸將
は行長が使者に對し慶尙全羅の兩道の殘城とも固く守りていまだ降らずは大敵前もあるを打捨て
今輕しく鴨綠江を渡らんとせんこと最も危き事なるべしなほわめて其運命を極めんとおもひ定めて先

全羅道は打入りてこれを全く取り扱めんといふと云やりける行長はこれを聞より大に怒り所詮はか
らの和儀をなし朝鮮王を和議せしめて自己の功作をなすべしとて僧玄蘇をつかひし朝鮮王李昭は
書を贈り此事をなさんときたりける玄蘇の乃ち行長が命は應玄平壤の北岸よぞ急ぎける扱また平
壤府の城内より倭軍すでに境内は攻寄せ幾は一江の水を隔て居ける故諸臣のよく恐懼し逼り
てひとへは王を始め大臣も逃仕度の外に更なまかりける咸鏡道は加藤清正鍋島直茂等が手もて既
に攻破りたりといふ事を去らすして咸鏡は落行べき愈々一はまれば同知官李希得が會て永興
府使とあつて民は惠ある政をなしたりし故今は國人の心を取得しと云をもつて再び咸鏡道の巡
檢事となし兵曹郎金義元を從事官となして北道は行しめ皇妃をはなれ内々の女官以下まで先立て
北は向ひて落し行しめける柳成龍の固く此義を警めて車駕始より西の方より臨幸さざるの議も
と天兵(大明のことなり)の援けを頼んで再び國を奪ひ復さんとする故なりすでは軍兵を天朝は請
たれを近きと當りて定めて援兵も來りぬべしを待たずして反つて深く北道は入らんと云給ふ此
より後其間を敵兵のためは隔てられなば天朝は通路も斷絶して音問をも聞ことあからんましてや
國家を恢復するの勢はあらんや其上敵兵すでは諸道は人數を散じたりと聞ゆれば北道も必ず敵兵
の無てや有きべ若不幸にして賊兵の中は落入後より賊兵は追るべしなほわめて其運命を極めんとおもひ定めて先

の只も北の虜のあるのみあり何れの所をか依りたのまん其危きこと又甚しからずやといへども朝廷あるところの臣の家屬も落行て多くの北道もある故をもつて妻子は行衛は覺束なきに北道とのみおもひ立との聞へけり柳成龍のこれのみ獨つぶやき臣が老母といへども京城を落去つて東へ出しと聞なれば定めて江原威鏡の間へあらん其行方をとらして母子の情の覺束なき元より人と同じけれと豈私の計をもつて公の義と害せんやと懇よこれを奏しければ李昭のこれを痛しく聞給へど知事官韓準また猶進み出て北へ向ふの是なることやすより兎も角威鏡道へ臨幸あるべきとて其落支度を急ぎしこそはかあけれ

行長數度和議を欲する事

倭兵すて大洞江まで入り臨んで今も江を渡りて賣入らん勢ひあれバ柳成龍が輩練光亭の上へ在つて渡り場の方を遙く見る一人の倭人紙と見へたるもれを以て木の梢へ挟み江沙に上り立置て此方へ向ひ扇を上げて招ぐに體なり柳成龍のこれを見て火炮の匠金生麗といへる者を召來して倭人の招く如何さまも此方の人へ諸用ありと見へたるぞ汝早速行向つて是を取り來れといへバ金生麗のそれより小舟へ打乗拵取一人召具して向ふの岸に漕付て陸へあかれバ彼の倭人兵具と調へず常の衣着て生麗は立向ひ其手を握り背を拵て極めて款狎るやうもてなし一封の書を懐

中より取出してこれを與ふれに金生麗は是を請取舟へ乗りて歸り來り書と尹斗壽は相渡す尹相の此書受取内讀よて開くべきこと如何あらんと思案はわたるを柳成龍云やう是を啓くとも何の子細かあらんぞ早く封をきつて見給へといふ尹相これと同じて封を啓けバ朝鮮國禮曹判書李公閣下より上ると書したるのこれ李德馨と與ふるところの書よして平の訓信と僧玄蘇とが贈れるところなり其大概は小西行長が意と傳へ我國と和議とあさんと欲するのみ抑朝鮮國の諸臣の中其名を知るの人も多かるべきは李德馨を宛として此書を贈るぞと其由來を尋るよ小西平の行長が去ぬる頃尙州に城を攻破する時倭學通事景應舜といへる者李鎰が軍中へ在りけるが敵の爲に虜となりし時平の行長應舜が擒と許し書一封を與へて贈り來せる其文にはく東萊は在りし時蔚山の郡守李彦誠と生あがり得たりし時彼を免して歸らしむれ刻一封を贈といへとも今もあわてその返報も到來せず朝鮮今我と和睦せんと欲するなと早く李德馨をして當月廿八日まで行長と忠州へ會せしめよと書たりける是の過つる四月に事なりける又李彦誠は倭兵の蔚山を攻つる時敵のたぬめ生捕れとて殺さるべかりしを行長和睦を欲する故彦誠を免してそれを便宜として書状と贈りたれとも李彦の敵中へ生捕られたるの科と恐るゝの意より軍すては戦ひ破れて惟一人やうくは逃來ると號してその書状をば遂に隠したる故今までも猶知れる人の無りしを行長が再び景

應を免しかへすと云より始めて是とまりたりける此時のいまだ王李昭京城に在し時あれハ早速
 李德馨も命ぜられ景應舜をさし添て行長が方へつかひしける徳馨ハ去ぬる年宗義智等が使とし
 て来りし時馳走人よて出合たるゆゑは行長も其名と知るかゆゑ今度も彼をさして状をも贈れるな
 り李德馨等のその時途中まで出たるは忠州城もハや陥ると聞へたれば如何とへや還らんかと思
 案する折から加藤清正が兵よ出遇應舜ハ討れければ徳馨もやらへお逃げ回り王城よ入らんとす
 るよハや李昭平壤よ落行玉ふよより直ハ行在所よ至つて此事を奏聞したりけりこれよよつて和
 の儀も久しくこと止んで其沙汰もなかりしは兎角よつめて行長のじめより和議をおもふの志止ざ
 りしゆゑ今また此如の書と贈りて和議となさんと欲する下意とハ見へたりける行長一巳の功を
 たてんと思ひはぎめ李彦誠を免し書を贈り次は景應舜として書をつかひし今また僧玄蘇をもつて
 和議となさんとす都合三度よおよびけるとなん

李德馨僧玄蘇等よ會する事

こハ行長が和陸の議を欲する其おもむきを聞んため此旨を李德馨も命ぜらる徳船命を承り急
 ぎ扁舟に竿さへせ江中よ出向ひ平の調信僧の玄蘇も東岸より船と漕出し船をあうべて參會せり
 そのじやう平生れ懇懇を盡し初僧玄蘇云けるやう日本より貴國の道と借中原に至らんとする入

